

英語の補文構造に関する認知言語学的研究
—エビデンシャルティに関わる現象を中心に—

河野 亘

謝辞

本論文は、京都大学大学院人間・環境学研究科共生人間学専攻言語科学講座修士課程および博士後期課程での筆者の一連の研究をまとめたものである。

本論文の執筆にあたり、数多くの方々にお世話になった。この場をお借りしてご指導とご助言をいただいた数多くの方々に厚く御礼申し上げたい。

山梨正明先生（関西外国語大学教授、京都大学名誉教授）には、研究室に受け入れていただいてから今日に至るまでご指導を賜ってきた。学会や研究室の研究会やゼミでは、個別の現象や分析の域にとどまらない、言語学全体を見据えた視座から議論され、筆者の言語観や視野を広げるきっかけを与えてくださった。ご退官後も、筆者の博士課程在籍時以降も継続的にご指導や激励をいただいております、いつも元気づけていただいている。

谷口一美先生（京都大学教授）には、山梨先生が退官される時期から研究指導を賜ってきた。特に、筆者が英語の構文分析に研究の射程を定めていく際に、いつもの的確なご助言をいただいた。筆者の博士後期課程研究指導認定退学後も研究指導をいただくだけでなく、英語教育に関するお話も聞かせていただき、筆者の教員としての立場でも勉強させていただいている。

山梨正明研究室・谷口一美研究室では、ゼミ（言語フォーラム）や研究会（京都言語学コロキウム：KLC）のほか、有志による言語理論・方法論等に関するさまざまな研究会・勉強会・読書会が開かれ、多くを学ばせていただいた。山梨研究室・谷口研究室には非常に多様な研究関心をもち、国内外で研究・教育に邁進する研究者や院生が所属しており、研究者あるいは大学教員として研鑽を重ねる貴重な機会をいただいた。

また、筆者が勤務している京都大学高等教育研究開発推進センターでは、執筆にあたりさまざまなご配慮をいただいた。

最後に、いつも遠くから支えてくれる家族に感謝したい。

2019年 春

河野 亘

目次

| | | |
|-------|----------------------------|----|
| 第1章 | 序論 | 1 |
| 1.1 | 本論文の目的 | 1 |
| 1.2 | 本論文の構成 | 5 |
| 第2章 | 理論的背景 | 8 |
| 2.1 | エビデンシャリティに関わる構文現象 | 8 |
| 2.1.1 | エビデンシャリティの概要 | 8 |
| 2.1.2 | エビデンシャル方略の批判的検討 | 11 |
| 2.2 | 認知文法の理論的枠組み | 15 |
| 2.2.1 | 記号的文法観 | 16 |
| 2.2.2 | 認知的際立ち | 16 |
| 2.2.3 | 用法基盤モデル | 17 |
| 2.2.4 | 認知文法におけるエビデンシャリティ論 | 18 |
| 2.3 | 構文化理論 | 20 |
| 2.4 | まとめ | 23 |
| 第3章 | 知覚動詞構文の補文構造の認知言語学的再考 | 25 |
| 3.1 | 連結的知覚動詞構文の補文構造 | 25 |
| 3.2 | 連結的知覚動詞構文のコントロールサイクル | 32 |
| 3.3 | 連結的知覚動詞構文の歴史的变化と構文化 | 41 |
| 3.3.1 | 連結的知覚動詞構文の成立過程 | 41 |
| 3.3.2 | 構文化現象としての連結的知覚動詞構文 | 46 |
| 3.3.3 | 定形節補文を伴う連結的知覚動詞構文 | 51 |

| | | |
|-------|----------------------------------|----|
| 3.3.4 | 現代英語における変化 | 53 |
| 3.4 | まとめ | 55 |
| 第4章 | 補部が前置された知覚・推論動詞構文の分析 | 56 |
| 4.1 | 補部が前置された知覚・推論動詞構文 | 56 |
| 4.2 | 意味論的分析 | 58 |
| 4.2.1 | 現代アメリカ英語の事例 | 58 |
| 4.2.2 | アプレイザル理論 | 60 |
| 4.3 | 語用論的分析 | 65 |
| 4.3.1 | 語用論的機能 | 65 |
| 4.3.2 | comp. as 構文と推論動詞 | 67 |
| 4.4 | 構文変化 | 68 |
| 4.4.1 | 現代アメリカ英語における構文変化過程 | 68 |
| 4.4.2 | 譲歩構文と間主観性 | 72 |
| 4.5 | まとめ | 74 |
| 第5章 | 定形節補文を伴う have 構文の分析 | 76 |
| 5.1 | 定形節補文を伴う have 構文 | 76 |
| 5.1.1 | have it that 構文 (HITC) | 80 |
| 5.1.2 | have it PP that 構文 (HIPTC) | 82 |
| 5.2 | 通時的分析：HI(P)TCにおける構文化 | 85 |
| 5.2.1 | HI(P)TCにおける構文化前の構文変化 | 85 |
| 5.2.2 | HI(P)TCにおける構文化 | 87 |
| 5.2.3 | HI(P)TCにおける構文化後の構文変化 | 92 |
| 5.2.4 | 構文化理論からみる HITC | 98 |

| | | |
|-------|---------------------------|-----|
| 5.3 | 共時的分析 | 101 |
| 5.3.1 | have 構文と参照点構造 | 101 |
| 5.3.2 | HI(P)TC の認知構造 | 103 |
| 5.4 | 理論的含意 | 105 |
| 5.4.1 | 非人称 it 主語構文との連続性 | 105 |
| 5.4.2 | 英語のエビデンシャル方略としての非人称化..... | 109 |
| 5.5 | まとめ..... | 111 |
| 第 6 章 | 結語と展望..... | 113 |
| 6.1 | 本論文のまとめ | 113 |
| 6.2 | 本研究の意義と今後の展望 | 115 |
| 参考文献 | | 118 |

第1章 序論

1.1 本論文の目的

補文構造 (complement structure) や補文化 (complementation) に関して、伝統的にさまざまな記述的・理論的立場から研究がなされている。補文構造を対象とした研究は、他の言語現象に関する研究と同様、研究パラダイムの変化や発展の影響のもとで進展してきた (cf. Horie and Comrie 2000)。

1960年代から1970年代には統語論的側面に関する生成文法的研究 (cf. Rosenbaum 1967; Brennan 1979) がなされる中で、重要な意味論的研究が進む (e.g. Bolinger (1968, 1972, 1974), Kiparsky and Kiparsky (1970), Karttunen (1971), Borkin (1973), Ross (1973), Riddle (1974), Hooper (1975), Kirsner and Thompson (1976))。その後、1980年代は機能的・類型論的研究の拡大期となり (e.g. Givon (1980), Noonan (1985), Ransom (1986), Lehmann (1988), Wierzbicka (1988))。さらに、1980年代後期以降には認知言語学的研究の出現・発展期を迎える。研究関心や言語観の相違はあるものの、補文構造研究の歴史は大まかにこのような過程で進展してきている。

補文構造や補文化を始めとするいわゆる複文 (complex sentences) の研究はこのように長い歴史を持つが、本研究の理論的立場である認知言語学や機能主義言語学による研究によりひとつの転換期を迎えたといえる。

たとえば、Langacker (1991, Ch.10) は複文の節間の関係における伝統的分類である等位 (coordination)・従属 (subordination) や、従属節の下位分類の関係節・補文節・副詞節を批判的に検討し、これらのカテゴリーが伝統的な分類のように明確に分けられるわけではなく、実際には意味的・形式的観点で中間的で曖昧なものが存在することを指摘し、認知文法の枠組みから代案となる特徴付けをおこなっている¹。

¹ Langacker (1991) では中間的な事例に対し、概念的依存性 (conceptual dependency) やプロフ

また、伝統的に「主節」・「従属節」と規定されてきた概念とそれらの区分について、以下のように、中心的な役割がむしろ「従属節」にあり、「主節」にあたる表現が補足的に振る舞う現象も認知言語学・機能主義言語学の立場から記述されている (Thompson 2002; Diessel and Tomasello 2001; Verhagen 2005; Langacker 2008, 2009)。

(1) (talking about a photo collage on the wall)

TERRY: I think it's cool.

ABBIE: it i = s cool.

MAUREEN: it i = s great.

(Thompson 2002: 132)

このように、一見、安定した現象であると思われる補文構造に関して、1980年代以降の認知言語学的立場の研究により捉え直しが図られている。

本論文は補文構造に関わる言語現象の中でも、特に「エビデンシャリティ (evidentiality)」² に関わる現象を主な研究対象とする。エビデンシャリティは一般に情報源を第一義として示す文法的カテゴリーとされている (Aikhenvald 2004)。エビデンシャリティ研究は特に 1980 年代以降、記述的・理論的立場を超えて広く言語学者の研究関心を集めているが、主に文法化したエビデンシャリティの標識 (evidential markers あるいは「エビデンシャル (evidentials)」) を持つ個別言語を対象とした共時的な記述研究を中心に進展してきた。その一方で、文法化したエビデンシャルを持たないとされる個別言語にみられる「エビデンシャル方略 (evidential strategies)」 (Aikhenvald 2004: 105) を扱う研究は相対的に少ない。

ファイル (profile) の観点から分析されている。

² 本論文では、“evidentiality” を「エビデンシャリティ」と表記する。「証拠性」と表記される場合もあるが、Aikhenvald (2004: 4) が述べるように、言語学における evidentiality と、一般的な (主に法学的概念としての) 「証拠」の概念は異なるためである。

本研究は、英語の補文構文によるエビデンシャル方略に関して、認知言語学の立場から分析をおこなうものである。

理論的観点において、これまで、認知言語学の立場から英語のエビデンシャルリティに関する分析はあまりなされてこなかった。機能主義言語学などの他の理論と比較して、認知言語学による英語のエビデンシャルリティ研究が少ないことについては、Lampert (2011) が述べるように、ひとつにはエビデンシャルリティにおける文法的・語彙的側面の観点が関わっていると思われる。つまり、英語はいわゆる文法的なエビデンシャルを持つ言語ではないため、という理由である。

(2) That cognitive linguists have been relatively silent about the category of evidentiality may find its explanation in the fact that in English, their preferred object language, evidentiality is a lexical, not a grammatical category—which in a very influential strand of research has been deemed sufficient enough for not considering English a language in which evidentiality is a relevant category in the first place. Research not only on grammaticalized but also on lexicalized evidentiality has indeed become vital in the last few years—mainly from a functionalist point of view. Before I turn to my case study, it therefore appears necessary to briefly present what may be called the consensus view on evidentiality.

(Lampert 2011: 7)

この指摘は単純ながら正鵠を射ている。先に述べたように、エビデンシャルリティ研究は文法的エビデンシャルリティを中心に発展してきているという歴史があり、文法的なエビデンシャルを持たないとされる英語は、そもそもエビデンシャルリティとの関わりが論じられること自体が相対的に少なかったという事情が存在する。

一般に英語は「語彙的に」エビデンシャルリティが現れる、あるいはエビデンシャル方略を持つ言語であるとされる。ここで、伝聞情報を表す標識として先行研究で挙げられている表現を例示する。

- (3) a. Reportedly, the game was postponed because of rain.
b. It is claimed that Susan did not kill the two boys.
c. One hears that the jury for the O.J. trial had many internal problems.
d. Allegedly, the justices system in the U.S. has improved over the years.
- (4) allegedly, I have heard, it appears, it has been claimed, it is claimed, it is reported, it is rumored, it is said, one hears, purportedly, reportedly, they allege, they say, they tell me
- (Fraser 1996: 183)

(3), (4) は、Fraser (1996) で「伝聞標識 (hearsay marker)」として挙げられているものである。伝聞標識は語用論標識 (pragmatic marker) の下位区分のひとつであり、(3), (4) のように副詞や非人称 *it* や *they*、*one* などを主語にとる補文導入する構文など、さまざまな表現がこのカテゴリーにリストされている。

英語のエビデンシャルに相当する他の表現としては、副詞 (e.g. *evidently*) や前置詞句 (e.g. *according to ...*)、定形節補文を伴う動詞構文 (e.g. *I hear that (p)*) や法助動詞の用法 (e.g. *must have Vpp.*) などが指摘される。

ここで注意しておきたいのは、副詞のように「語彙的」であるといえるカテゴリーだけでなく、動詞補文構文に由来するカテゴリーのように、文法・語彙の間の中間的なカテゴリーに位置づけられるとみなされる現象が存在するということである。

認知言語学では語彙と文法が連続体を成すと考えるが、この語彙と文法の連続性を鑑みると、英語のエビデンシャル方略の中には、文法化した形態素と比べてさまざまな文法化の度合いを見せるものが存在する。特に、本研究で扱う構文には部分的に固定的なスロットを持つ形式的イディオム (Filmore 1988) のような現象も存在する。そのため、こういった諸現象に対して、記号的文法観や用法基盤モデルといった理論的立場に立つ認知言語学的アプローチから共時的・通時的両側面から分析をおこなう必要がある。この点についての詳細は第2章で述べる。

1.2 本論文の構成

本論文の構成は以下のとおりである。

序論である第1章に続き、第2章では本研究の理論的背景および理論的枠組みを概観する。研究対象である英語の補文構造のように迂言的にエビデンシャルリティが観察される傾向にある言語では、エビデンシャル方略の分析の際に文法・語彙の二分法を超えた、認知言語学における言語観・構文観が必要となることを述べた上で、特に認知文法および構文化理論を概観する。

第3章では、連結的知覚動詞構文 (Copulative Perception Verb Construction) の補文構造について、経験者主語構文と比較検討するかたちで分析する。英語の経験者 (experiencer) を主語にとる構文 (以下、経験者主語構文と表記) では、定形節補文を伴う事例が推論・伝聞といったエビデンシャルリティを表すことが知られる (cf. Dik and Hengeveld 1991)。その一方で、補語を伴う知覚動詞構文である連結的知覚動詞構文は定形節補文を伴う事例に限らず、さまざまな補文構造でエビデンシャル方略としての解釈が生じる。本研究では、認知文法における認知モデルのひとつである Langacker (2002, 2009) のコントロールサイクル (control cycle) の理論を援用し、連結的知覚動詞構文の認知構造を明らかにするとともに、Traugott and Trousdale (2013) の構文化 (constructionalization) の理論を援用し、構文発達過程や補文構造の広がり、定形節補文を伴う構文の意味・機能、現代英語における変化に関して論じる。

(5) a. I could hear from her quivering voice that Peter had been fighting.

b. I saw on her face that Peter had been fighting.

(6) a. I heard from John that Peter had been fighting.

b. I saw in the newspaper that Peter had been fighting.

(Dik and Hengeveld 1991: 247)

(7) a. Jane sounded scared.

- b. Jane sounded a fool.
- c. Jane sounded like a fool.
- d. Jane sounded to be {a fool/ scared}.
- e. Jane sounded like she was scared.

(Gisborne 2010: 251)

- (8) Going to be a big one, looks like.

(López-Couso and Méndez-Naya 2012: 180)

第4章では、連結的知覚動詞構文や *Seem* 構文のうち、典型的な補文構造をとる事例ではなく、これまでの研究ではほとんど検討されてこなかった連結的知覚動詞構文・*seem* 構文と他の構文との相互作用によって創発する構文現象について分析する。具体的には、(as) 補部 + as + N + V の形式をとる「*complement-as* 構文 (“*complement-as construction*”）」(Kjellmer 1992; Tottie 2001, 2002) について扱い、連結的知覚動詞や *seem* が生起する (9) のような *complement-as* 構文が間主観的な構文変化を遂げていることを、コーパスに基づく共時的分析や語用論的分析に加え、現代アメリカ英語の構文変化の通時的観点を踏まえて分析する。

- (9) a. Incredible as it seems, America's infotech infrastructure is no longer world-class.
- b. Some have speculated that the new stamping makes it easier for the hitter to pick up the spin on the ball. This is the one visible change in this year's ball — so, as unlikely as it seems, you figure it's possible.
- c. As cold as it sounds, “Wall Street views layoffs as a good thing,” he said.
- d. As cliché as it sounds, “bears are probably more afraid of you than you are of them,” ...

(COCA)

第5章では、定形節補文を伴う2種類の have 構文の汎時的分析をとおして、英語の伝聞構文にみられるエビデンシャル方略の一般的特徴を明らかにする。定形節補文を伴う have 構文である have it that 構文 (HITC) および have it PP that 構文 (HIPTC) は have 構文全体のネットワークの中でも特異的な補文構造をとるが、意味論的にも特徴的な振る舞いを見せる。これらの構文は、(3), (4) で挙げた伝聞標識のように、伝聞情報を表すエビデンシャル方略として機能する。

(10) a. Rumor has it that they aren't hostages, but I think they are.

b. In fact, I have it from a reliable source that you've been discussing Mr. Cerino's case in detail.

c. I have it on good authority that Cormac lives on Coffin Avenue.

d. ... and then you have it on tape that I said that.

e. They have it in their logs that I came here last night and retrieved my property with this.

(COCA)

第6章では、本論文の各章でおこなった議論を概観するとともに、本研究の意義と今後の研究の展望を述べる。

第2章 理論的背景

第2章では本研究の理論的背景について論じる。エビデンシャリティ研究は主に文法化したエビデンシャルを持つ言語の分析を中心に展開されてきており、英語のようにエビデンシャル方略を持つ言語のエビデンシャリティの分析は比較的最近になるまでほとんどなされてこなかった。本章では、本研究の分析対象である英語の定形節補文構文のように迂言的にエビデンシャリティが観察される言語では、分析をおこなう際に文法と語彙の連続性を捉えた、本論文が援用する認知文法および構文理論といった認知言語学的言語観・構文観が肝要となる。また、第3章以降の分析で援用する認知文法および構文化理論の理論的枠組みを概観する。

2.1 エビデンシャリティに関わる構文現象

2.1.1 エビデンシャリティの概要

本研究の理論的背景として、本論文で主な分析対象とするエビデンシャリティに関わる構文現象について概観する。

エビデンシャリティは一般に情報源を第一義として示す文法的カテゴリーとされる (Aikhenvald 2004)。文法化したエビデンシャリティの標識 (evidential markers あるいはエビデンシャル (evidentials)) を持つ個別言語では、直接知覚や推論、伝聞など、複数の種類のエビデンシャルの分類が顕在化される。Aikhenvald (2004) では、一般的なエビデンシャルの分類として表1の6種類が挙げられており、個別言語によって2種類以上のエビデンシャルから成る多様な体系 (エビデンシャルシステム) を構成している。

表 1. エビデンシャルの 6 分類 (Aikhenvald 2004)

| | |
|-----------------|--|
| I. VISUAL: | covers information acquired through seeing |
| II. NON-VISUAL: | covers information acquired through hearing, and is typically extended to smell and taste, and sometimes also to touch. |
| III. INFERENCE: | based on visible or tangible evidence, or result. |
| IV. ASSUMPTION: | based on evidence other than visible results: this may include logical reasoning, assumption, or simple general knowledge. |
| V. HEARSAY: | for reported information with no reference to those it was reported by. |
| VI. QUOTATIVE: | for reported information with an overt reference to the quoted source. |

たとえば、タリアナ語 (Tariana, Arawakan languages; Brazil) では以下のようなエビデンシャルが観察される³。

(1) a. Juse irida di-manika-**ka**

José football 3sgnf-play-rec.p.vis

José has played football (we saw it)

b. Juse irida di-manika-**mahka**

José football 3sgnf-play-rec.p.nonvis

José has played football (we heard it)

c. Juse irida di-manika-**nihka**

José football 3sgnf-play-rec.p.infr

José has played football (we infer it from visual evidence)

³ 3: third person, assum: assumed, infr: inferred, nf: non-feminine, nonvis: non-visual, rec.p: recent past, rep: reported, sg: singular, vis: visual

d. Juse irida di-manika-**sika**

José football 3sgnf-play-rec.p.assum

José has played football (we assume this on the basis of what we already know)

e. Juse irida di-manika-**pidaka**

José football 3sgnf-play-rec.p.rep

José has played football (we were told)

(Aikhenvald 2004: 2-3)

それぞれ、(a) -ka は視覚的証拠、(b) -mahka は非視覚的証拠、(c) -nihka は推論的証拠、(d) -sika は（既知の情報に基づく）想定的証拠、(e) -pidaka は伝達的証拠を表すとされる。タリアナ語では、これらの標識が時制（近接過去、recent past）と融合しており、義務的に標示される。

タリアナ語のように文法化したエビデンシャルを持つ言語は文法的エビデンシャルリティの言語とされる。一方、文法化したエビデンシャルを持たない言語でも、情報源を第一義としない要素によるさまざまな拡張的用法によって情報源の意味が表される現象が広範に観察される。このように、本来エビデンシャルリティを表す形式でないものが二次的に情報源を評価する意味を表すようになる現象は「エビデンシャル方略 (evidential strategy)」と呼ばれ、ムード・モダリティや時制、アスペクト、補文構造に基づくものなどが報告されている (Aikhenvald 2004)。

また、エビデンシャルリティをめぐる主要な論点のひとつに、エビデンシャルリティと認識的モダリティ (epistemic modality) の領域の関係がある。

Palmer (1986) では、エビデンシャルリティは認識的モダリティの下位カテゴリーであるとされている。また、van der Auwera and Plungian (1998: 85-86) は、推論的エビデンシャルリティがモダリティとエビデンシャルリティの間の重複したカテゴリーであると述べている (e.g. *must*)。Cornillie (2009) が指摘するように、推論的エビデンシャルリティ一般に van der Auwera and Plungian (1998) の見方が適用可能か否かは議論の余地があ

る⁴。エビデンシャルリティと認知的モダリティとの関係が示唆される研究がある一方で、De Haan (2004) や Aikhenvald (2004) はエビデンシャルリティと認知的モダリティは別の概念であると述べている。このように、研究者によってさまざまな分析がなされてはいるものの、統一的な見解はみられていない。現在、Aikhenvald (2004) がエビデンシャルリティ研究の中で包括的かつ重要な位置付けとなっているものの、エビデンシャルリティをめぐる概念や用語法は研究者間で統一をみているとは言い難い (cf. Boye 2018)。

2.1.2 エビデンシャル方略の批判的検討

本研究の分析対象である英語は一般に文法的にエビデンシャルリティが現れるのではなく、エビデンシャル方略を持つ言語とされる⁵。Aikhenvald (2004) を中心に、文法化した（狭義の）エビデンシャルの研究が類型論的に進み、エビデンシャル方略が広くさまざまな言語で存在すること自体はこれまでも指摘されている。その一方で、エビデンシャル方略に関する理論的な分析はほとんどなされてこなかった⁶。

⁴ 推論的エビデンシャルを表す構文はエビデンシャルリティ研究の中でも分析対象とされることが多いカテゴリーであるが、このことは認知的モダリティ研究の文脈と関係があると思われる。つまり、推論は命題の真実性・確定性に関する話者の認識と密接にかかわる認知的モダリティとの関連が強く、そのことが反映していると思われる。

⁵ ただし、Anderson (1986) では、エビデンシャルに相当するものとして英語の法助動詞 *must* の用法が指摘されている。この Anderson (1986) の分析を引用して、英語に文法的なエビデンシャルが存在するという可能性に言及する研究もある (e.g. Boye 2018)。

(i) John [must have] arrived. (because I see his coat on the chair) (Anderson 1986: 274)

しかしながら、法助動詞 *must* が含まれているとはいえ、厳密にはあくまで「エビデンシャル方略」のひとつとしてとみなされるべきであると思われる。このことは、Anderson (1986) 自身が “[must have]” と表記していることからもうかがえる。

⁶ 英語のエビデンシャル方略は、第 1 章で引用した Fraser (1996) のように、しばしば談話標識・語用論標識、評言節研究の一環で、他の機能を持つ表現とともにリスト的に記述されている (e.g. Brinton 1996, 2008; Thompson 2002)。

(ii) Evidential CTPs: been said, can tell, experience, find, find out, hear(d), intimated, know (with 3rd person), looks like, mean, notice?, read, (look &) see, seem, show, smells like, suggest, tell
(Thompson 2002: 138)

エビデンシャル方略の分析にあたり、まず、諸概念の定義を検討する。

Boye (2018) はエビデンシャルの定義として、Anderson (1986: 274-275) による定義を一部修正するかたちで以下の 4 点を示している⁷。

- (2) a. エビデンシャルは命題の情報源の種類を示す
- b. エビデンシャルはそれ自体が節の要点となるものではなく、命題に対して他の側面の特定化を付与するものである
- c. エビデンシャルは証拠の表示を意味とし、それは語用論的推論として含意されるだけではない
- d. エビデンシャルは文法項目 (grammatical items) である

(2a) は意味機能の観点で、エビデンシャルは命題の情報源の種類の特特定化をおこなうことを示す。また、(2a) に関連して、(2c) はその機能が語用論的に含意されるだけでなく、意味論的意味に含まれることを表す。

特に注意が必要なのは (2b) および (2d) である。いずれも文法化に関する特徴を示している。(2b) は談話上の際立ちの観点で、エビデンシャルは二次的な (discursively secondary) 際立ちにとどまるということを述べている。また、(2d) については、Boye (2018) は文法的要素のみをエビデンシャルとしてみなしているように見える。しかしながら、Boye (2018) は以下の *they say, I saw* をエビデンシャルに相当するものとして

⁷ 以下、Boye (2018) を一部修正 (Boye (2018) で省略されていた Anderson (1986) の記述箇所を追加) して引用する。

- a. Evidentials show kind of information source for a proposition which is available to the person making that claim, whether direct evidence plus observation (no inference needed) evidence plus inference inference (evidence unspecified) reasoned expectation from logic and other facts and whether the evidence is auditory, or visual, etc.).
- b. Evidentials are not themselves the main point of the clause, but are rather a specification added to a proposition about something else.
- c. Evidential have the indication of evidence as in (a) as their semantic meaning, not only as a pragmatic inference.
- d. Evidential are grammatical items.

例示している。

(3) a. They say James is a fool.

b. I saw (that) Mary murdered someone in the supermarket.

(3a) の they say を例にとると、「James について人がどう思っているか」という質問に対する回答の場合、補文節中の “James is a fool” が発話の中心となり、伝聞に基づく命題であるという特定化が「二次的」な要素となるため、エビデンシャルに相当するとみなされる。一方で、(3a) が「なぜ誰もが “James is a fool” と思っているのか」という質問に対する回答の場合、they say 自体が発話の中心となり（さらに “James is a fool” は冗長となり、こちらが二次的となるため）、エビデンシャルに相当するものとはみなされない。

ここで注意すべきは、they say や I saw は厳密に従来の意味で文法項目とはみなされないことである。つまり、Boye (2018) では事実上、(2) がエビデンシャルの定義として述べられつつ、(3) のような事例が（狭義の）エビデンシャルの事例ではなく、エビデンシャル「方略」の事例として挙げられていると考えられる。この定義と例示の不一致は、Boye (2018) で「エビデンシャル」と「エビデンシャル方略」とが区別されていないことに起因していると思われる⁸。

Boye (2018) がエビデンシャルの定義の一例として参照した Anderson (1986) は「エビデンシャル方略」(Aikhenvald 2004) の概念が提出される前の研究である。Boye (2018) による定義だけでなく、Anderson (1986) によるエビデンシャルの定義の中にも、文法化された要素だけでなく、情報源の意味を表す (3) のような英語の主節表現（＝

⁸ おそらく、(2d) で文法項目と記述されているのは、元の定義をおこなった Anderson (1986) の影響があると思われる。Anderson (1986) はエビデンシャルの定義に続くかたちで、英語の事例 (*I hear Mary won the prize* における *I hear*) の記述をおこなっている。したがって、Anderson (1986)・Boye (2018) の両者は、エビデンシャルの定義を述べつつ、エビデンシャル「方略」の事例としての英語の事例を挙げていることになる。

本研究におけるエビデンシャル方略) が想定されている。

Anderson (1986) によると、(4) において、(4a, b) のみがエビデンシャルを含む事例であり、括弧内の語句がエビデンシャルであると述べている。(4) では、当該の発話の中で相対的により強い強勢が置かれる語が大文字で示されている。

- (4) a. [I hear] Mary won the PRIZE.
b. [I heard] (that) Mary won the PRIZE.
c. I HEARD that Mary won the prize.
d. I HEARD she won it, but nobody told me what the prize WAS.
e. I already HEARD that, you don't need to tell me AGAIN.

(Anderson 1986: 276)

(4a, b) の発話の中心は定形補文節で表される命題内容 (Mary が賞を獲ったこと) であり、その内容を話し手がどのように知ったかが [I hear] および [I heard] で表されている。一方で、(4c-e) のような事例では、HEARD に強勢が置かれており、発話の中心と解釈されるため、エビデンシャルとはみなされないという。

Anderson (1986) はさらに、(4a) [I hear] の時制が現在形であることにも触れている。話し手が当該の内容について聞き知ったのは過去のことであるにもかかわらず、形式上、過去時制を含まない。この現象について、Anderson (1986) は (5) の事例を含め、次のように記述している。これらの事例は [I have heard that] Mary won the PRIZE. のような事象に基づく話者の知識の状態を表しているとし、一種の再分析 (reanalysis) の可能性があることを指摘している。さらに、同様の現象が類型論的にマカー語 (Makah) など、他の言語でも観察されることが指摘されている。

- (5) a. [I understand that] Mary won the PRIZE.
b. [I have it on good authority that] Mary won the PRIZE.

以上の Anderson (1986) の記述・分析は、本論文がとる認知・構文的アプローチと通じる部分がある。Anderson (1986) では通時的な言語変化に関する分析はなされていないものの、意味的・形態的・音韻的事実から、語彙的な要素に基づく「エビデンシャルらしさ」に関する共時的分析が試みられている。また、(5b) [I have it on good authority that] は、本論の第 5 章で扱われる have it PP that 構文の事例であるが、この構文は後に分析するように、it や前置詞句といった義務的な構成要素を含む、多分にイディオム性 (idiomaticity) が高い構文である。したがって、Anderson (1986) はエビデンシャル方略という用語が存在しない時期に、既に文法化の度合いの観点で中間的な構文をも射程に捉えようとしていたということもうかがえる。

このように、英語のエビデンシャル方略に野心的に迫ろうとしている点は先駆的であり、評価に値する。しかしながら、英語の補文現象のように、文法と語彙の中間的存在として立ち現れる現象を記述するためには、以上のような共時的な側面の分析だけでは限界がある。

以上の議論から、エビデンシャルリティおよびエビデンシャル方略の記述・説明には、文法と語彙の関係の捉え方を反映する言語理論が必要となる⁹。また、そこには共時的分析だけでは不十分であり、通時的分析も不可欠である。

本研究では、通時的変化の側面を含め、エビデンシャル方略として発達する過程の精緻な記述を目指す。

2.2 認知文法の理論的枠組み

ここでは、本研究で援用する認知文法 (Cognitive Grammar) の理論的枠組みについて述べる。

⁹ Cornillie (2007) も、従来のエビデンシャルリティ研究の一部が、文法と語彙の二分法を前提としている恐れがあることを批判している。

2.2.1 記号的文法観

認知文法における、人間の言語知識を形式と意味との対応に基づく記号的な関係であると考える見方を「記号的文法観 (symbolic view of grammar)」という。認知文法では、言語および文法は音韻極 (phonological pole) と意味極 (semantic pole) とを両輪とする、音韻構造 (phonological structure) と意味構造 (semantic structure) とが結びついた記号構造 (symbolic structure) として構成される。言語におけるこのような記号的な関係は、形態素・語・句・節・文・談話に至るあらゆる単位においてみられ、認知文法ではそれらのすべてが記述対象となる。

また、記号的文法観に関して強調すべき点として、認知文法では、文法と語彙との間に明確な境界が設定されないという点が挙げられる。つまり、前節で論点となった文法と語彙との関係において、認知文法はこれらが連続体を成すという立場に立つ。

2.2.2 認知的際立ち

人間が外界を知覚する際、すべての対象に注意を向けることはできず、焦点となる部分とそれ以外の部分で相対的な差が生じる。焦点となる部分を図 (figure)、残りの部分を地 (ground) といい、このような図・地関係は言語表現においても現れる。

言語表現の概念について、焦点化され際立ちを受ける部分はプロファイル (profile) とされ、プロファイルの背景となる認知ドメインはベース (base) とされる。

また、2つの要素間の関係がプロファイルの対象となる際には、相対的により高い際立ちをもつ要素はトラジェクター (trajector)、より低い際立ちの要素はランドマーク (landmark) と呼ばれる。こういった際立ちの差異は、句レベルや文レベルなどさまざまな構造で生じる。

具体例として、参与者とセッティングの概念を見ておく。

(6) はより典型的な他動詞構文であり、(7) は (6) の空間的・時間的セッティングが主語位置に生起しているセッティング主語構文 (Setting-subject construction) である。

- (6) a. People have seen some thrilling contests in this stadium.
 b. People have witnessed some major changes in the last few years.
- (7) a. This stadium has seen some thrilling contests.
 b. The last few years have witnessed some major changes.

(Langacker 2008: 389)

参与者主語構文では参与者間の相互作用がプロファイルされ、セッティング主語構文では、セッティングとその中の参与者との間の「容器—中身関係 (content-container relation)」がプロファイルされるとされる (Langacker 1999: 69-70)。

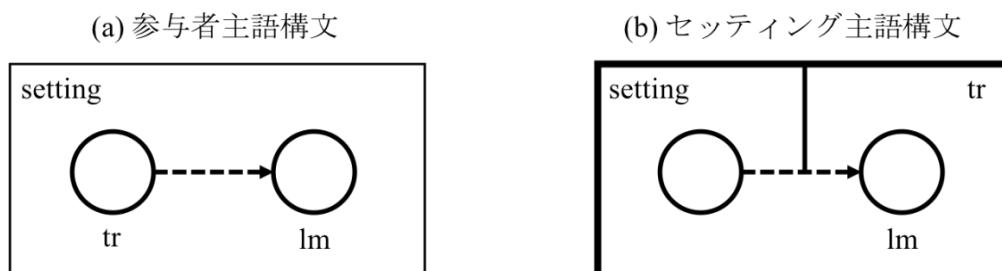


図 1. 参与者主語構文とセッティング主語構文

2.2.3 用法基盤モデル

用法基盤モデル (usage-based model) とは、文法を発話の場における実際の言語使用からボトムアップ的に得られるスキーマによるネットワークであると捉えるモデルを指す。認知言語学では、言語を生成文法のように静的な規則体系やそれに基づく表示として見るのではなく、現実の言語使用に基づく動的なネットワークとして捉える。

この用法基盤モデルは、2.3 節で見る構文化理論とも整合するモデルである。

2.2.4 認知文法におけるエビデンシャルリティ論

Langacker (2017) は従来のエビデンシャルリティの分類を認知言語学の観点から捉え直し、認知文法的枠組みに沿うかたちで一般化を図っている。認知文法では、エビデンシャルリティは節のグラウンディングの一側面とされる (Langacker 2017)。

グラウンディングとは、グラウンド (ground) と呼ばれる話し手・聞き手を含む発話の場に名詞類や定型節が位置付けられることを指す。名詞類のグラウンディングは冠詞 (e.g. *the*) や指示詞 (e.g. *this, that*)、数量詞 (e.g. *a, some*) などが関わり、節のグラウンディングには動詞の屈折 (e.g. *-s, -ed*) や法助動詞 (e.g. *may, will*) などが関わっている。

文法的エビデンシャルリティを持つとされる個別言語では、エビデンシャルリティは時制やモダリティの体系と同様に文法化したグラウンディング要素として現れる。しかしながら、エビデンシャルリティシステムは時制やモダリティと比較して広く普及しているわけではなく、個別言語によって様相がかなり異なっているという側面もある。

Langacker (2017) では、情報源と情報の信頼性の観点でエビデンシャルは「自己中心的に (egocentrically)」組織化されているとされている。エビデンシャルリティと認知的な直接性との関係には基盤 (Substrate) と呼ばれる (8a) のようなスキーマが存在し、直接性・間接性の階層構造をなしている。これは、(8b, c) のような個別言語のエビデンシャルリティシステム全体のスキーマとなっている。

- (8) a. 基盤 (Substrate) : INTERNAL > PERCEPTION > INFERENCE > REPORT
b. ワンカ・ケチュア語 (Wanka Quechua) : DIRECT > INFERENCE > REPORT
c. 東ポモ語 (Eastern Pomo) : DIRECT > NON-VISUAL PERCEPTION > INFERENCE
> REPORT

また、Langacker (2017) では文法的なエビデンシャルについてだけでなく、英語のエビデンシャル方略への記述・説明もなされている。補文構造に基づくエビデンシャル

ル方略については、現代英語において *I think, I'm sure, I hear, I feel, they say, it is said* などの数多くの表現が文法化の過程にあると推定されており、これらは高次のグラウンディング要素として機能していると述べられている。*I think he stole it.* のような事例における *I think* は現在、文法化の過程で副詞 *maybe* に相当するグラウンディングの機能を発達させているが、今後さらに形式的・概念的な統合が進んでいけば、*He may steal it.* における法助動詞 *may* に相当する、グラウンディング要素的な概念にさらに接近していくと推定されている。

上記のようなグラウンディングの観点によるエビデンシャルリティ観は、近年の認知的・機能的観点からの他のエビデンシャルリティ研究の流れに沿うものである。他の認知・機能主義言語学の研究者の一部も、エビデンシャルリティを発話の場との関連で捉えつつある (de Haan (2004); Nuyts (2001); Langacker (2017); 神尾 (1990))。たとえば、de Haan (2004) はエビデンシャルリティを直示的 (deictic) カテゴリーとして規定している。また、神尾 (1990) の情報のなわ張り理論も話し手・聞き手の発話の場を中心とした理論である。

Langacker (2017) の議論は一見、従来の話し手中心の概念としてのエビデンシャルリティの捉え方と類似しているように思われるかもしれない¹⁰。しかしながら、先述のとおり Langacker (2017) はエビデンシャルリティを節のグラウンディングの一側面と捉えており、他のグラウンディング要素である時制やアスペクトとの関係まで射程に入れられている。また、それ以前の認知文法 (cf. Langacker 1987, 1991, 2008, 2009) から一貫した記述が試みられていることも特筆すべきである。

さらに、Langacker (2017) ではいわゆる文法的なエビデンシャルだけでなく、多様な文法化の程度や体系性の現れとしての側面を持つ語彙的表現を含むエビデンシャル方略にも目を向け、記述・説明が試みられているという点も重要である。この点について、本研究における分析の方向性と関連しているといえる。

¹⁰ 従来のエビデンシャルリティ研究では、話し手の確信度や権威づけ、責任回避、情報の所有権などを中心として議論される傾向がある。話し手中心のエビデンシャルリティ研究とその批判的検討については Ikarashi (2015) を参照。

従来の研究で主な分析対象とされていた文法的なエビデンシャルは、基本的には一方向性仮説が適用可能な現象が主であったと思われる。しかしながら、本研究で扱う英語のエビデンシャル方略のように、典型的な文法化現象の領域を超える現象、つまり、談話標識・語用論標識・評言節のような、文法・語彙の間の中間的なカテゴリーに位置づけられる現象も数多く存在する。そのため、こういった現象を捉えるためには、文法と語彙との間に明確な境界を設定しない認知文法的な言語観に基づく分析が必須となる。

次節では、Langaker の認知文法と同様、本研究での中心的な理論的枠組みとなる構文化理論 (Traugott and Trousdale 2013) について見ていく。

2.3 構文化理論

構文化 (Constructionalization, Cxzn) とは新しい形式と意味の記号のペアが創発すること (“The creation of a form_{new}-meaning_{new} pairing” (Traugott and Trousdale 2013: 1)) と定義される。「構文 (construction)」は言語のあらゆる単位が想定され、適用される¹¹。

構文化は、従来、文法化や語彙化として分析されてきた現象を包括する概念である。構文文法研究では、かつては通時的な言語変化はあまり分析されておらず、共時的な記述・分析がなされていた。文法化、語彙化、イディオム化など、史的側面を重視する研究関心の高まりから、構文文法に基づく文法化、語彙化などの現象を対象とした理論が構築されている。

従来の「文法化」に相当する変化は文法的構文化 (grammatical constructionalization) とされ、手続き的意味を持つ構文への変化をいう。また、従来の「語彙化」に相当する変化は語彙的構文化 (lexical constructionalization) とされ、内容的意味を持つ構文への変化であるといわれる。ただし、文法的構文化と語彙的構文化は程度問題であり、明確に区別することは難しいとされ、現象によってはどちらの側面も持つものも存在

¹¹ この意味で、「構文」は「文」レベルに限られない。そのため、構文の代わりに「構成体」という訳が用いられることもある (cf. 山梨 2009)。

する。

構文化の前後には構文変化 (constructional change) が生じるとされ、それぞれ構文化前の構文変化 (前構文化, Pre-Constructionalization Constructional Changes, PreCxzn CCs) と構文化後の構文変化 (後構文化, Post-Constructionalization Constructional Changes, PostCxzn CCs) と呼ばれる。前者は (i) 語用論的推論の拡大、(ii) 語用論的推論の意味化、(iii) 形式と意味のミスマッチ、(iv) 分布の変化を伴い、後者は (i) コロケーションの拡大や (ii) 形態音韻的縮小などを伴う。

Traugott and Trousdale (2013) では、構文化の例として、[a lot of + N] の量化用法の発達が挙げられている。名詞 lot はもともと「(全体の中の) 一部分」を表す名詞であり、“a lot of” で a {unit, piece, share} of に相当する意味を持っていたが、構文化の結果、18 世紀頃には「多量の」(many, much) を表す量化用法を発達させているとされる。

[a lot of + N] の通時的変化には、構文や定型表現の形成において重要な役割を果たすチャンク化 (chunking) がかかわっているとされる。Bybee (2010) によれば、特定の要素の共起が高頻度で生じると、構成的に捉えられていた要素同士がひとまとまりのユニット (=チャンク) として記憶されるようになる。さらに、チャンクとして記憶された要素同士が反復的に使用されることによって、特定の新しい構文フレームとして形成される。

[a lot of + N] の通時的変化は Traugott and Trousdale (2013) では以下のように表される (ibid.: 25)。

(9) [[N_i [of N_j]] <—> [part_i – whole_j]] > [[N of N_j]] <—> [large quant – entity_j]]

左側は量化用法が発達する前の [a lot of + N] であり、N_i と N_j が部分・全体関係を示すことが表されている。一方、右側は量化用法が発達した [a lot of + N] であり、“a lot of” のチャンク化を経て、[N_i of N_j] 内のまとまりのユニットが変化していることが表されている。

先述の構文化後の構文変化の過程でみられる現象として、コロケーション上の共起関係の拡大現象がある。Himmelmann (2004) では「ホストクラスの拡大」(host-class expansion) と呼ばれている。たとえば、未来を表す *be going to* では、初期には移動事象に関係の深い行為動詞 (e.g. *make a noose, read, lay out*) が共起していたが、構文化の進展に伴い、*like* や *be* といった状態的な動詞が共起できるようになる。[a lot of+N] の量化用法の発達の過程では、以下のように、19 世紀以降、抽象名詞や動名詞との共起が観察されるようになる。

- (10) a. There was a lot of people round him. (1822)
- b. The keeper will have lots of time to get round by the ford. (1857)
- c. He had battled with it like a man, and had lots of fine Utopian ideas about the perfectibility of mankind. (1857)
- d. she will not pester me with a lot of nonsensical cant. (1885)
- e. He is only young, with a lot of power. (1895)
- f. the horses needed a lot of driving. (1901)
- (ibid.: 115)

さらに、現代英語におけるさらなる変化として、形態・音韻的縮約が生じつつあるようである。

(11) That's allota ducks

(<http://brookelynmt.blogspot.com/2010/03/thats-allota-ducks.html>)

(ibid.: 28)

上記の形態・音韻的縮約も、構文化後の構文変化にみられる現象のひとつとされる。

構文化理論はさまざまな構文の変化を統一的に捉えようとする理論である。従来、

文法化研究や構文研究・イディオム研究として記述されてきた現象は言語の動的な変化を反映しており、変化の過程や定着度・慣習化の度合いや構成性は程度問題である。

本研究における分析対象の進行中の構文変化を含め、文法と語彙の中間的なカテゴリーとして位置付けられる言語現象をつぶさに分析するためには、用法基盤主義に基づくこういった認知的・構文的アプローチが必要となる。

2.4 まとめ

第2章では、英語のエビデンシャル方略の分析に認知的・構文的アプローチが必要となることを示した。語彙と文法の連続性の問題や、通時的分析の必要性を考慮し、認知文法と構文化理論の枠組みを援用する重要性を述べた。

第3章からの事例研究に移る前に、本章で概観した理論的枠組みを反映させ、本研究におけるエビデンシャル方略の定義を述べる。

(12) 本研究におけるエビデンシャル方略の定義：

情報源の表示および情報源の種類の特特定化を意味機能として持つ文法的構文

エビデンシャル方略の意味機能の観点などについては、基本的に (2) の Boye (2018) による定義と同様である。ここで特に重要なのは、末尾の「文法的構文」である。構文化理論の概念を定義に援用したのは、(i) 共時的観点と (ii) 通時的観点の両方の意味に基づいている。共時的観点では、このように定義することで、語彙と文法の連続性をみとめつつ、英語の補文構文現象のように語彙と文法の連続性の中間的な段階にある諸現象の記述をおこなうことを念頭に置いている。さらに、通時的観点では、言語変化の動的な側面を柔軟に扱えるよう、さまざまな文法化（あるいは、文法的構文化）の度合いを前提とした、構文化理論における文法的構文としている。

先述のとおり、Anderson (1986) はエビデンシャルリティの標識の作業的定義を提唱し

ており、英語など文法的なエビデンシャルを持たないとされる言語の「エビデンシャル方略」を射程に捉えようとした試みであったといえる。本研究における文法的構文の概念の援用は、Anderson (1986) の意図を背景として、英語のエビデンシャル方略の記述・分析の精緻化を目的としたものである。

第3章 知覚動詞構文の補文構造の認知言語学的再考

第3章では、連結的知覚動詞構文 (Copulative Perception Verb Construction; 以下、CPVC と表記) における補文構造やエビデンシャルリティに関わる現象について、経験者を主語にとる知覚動詞構文 (e.g. *I see that (p)*, *I hear that (p)*) と対比するかたちで詳細に分析する。経験者主語構文では定形節補文を伴う事例において推論や伝聞といった間接的なエビデンシャルリティを表すのに対し、CPVC では、定形節補文を伴う事例だけでなく、定形節補文以外の補部をとる事例でもエビデンシャルとして機能する。CPVC の先行研究では、そのような事実に対して用法の記述にとどまっていたが、本研究では認知文法における一般的な認知モデルの一つであるコントロールサイクルの理論を援用し、エビデンシャルリティを表す事例とそうでない事例における認知構造を明らかにする。さらに、定形節補文を伴う CPVC に関して、「繰り上げ」現象や非人称 *it* 主語構文の発達、語用論標識・評言節的事例の出現といった事実をもとに、Traugott and Trousdale (2013) の構文化理論の観点から、現代英語におけるチャンク化 (Bybee 2010) に基づく構文変化の可能性を示唆する¹²。

3.1 連結的知覚動詞構文の補文構造

本章で扱う知覚動詞構文について概観する。Viberg (1983) では知覚動詞の3分類が示されており、*Experiencer-based* の活動的知覚動詞および経験的知覚動詞、*Source-based* の連結的知覚動詞に分かれる。

¹² 本章の内容は河野 (2013) に基づく。

表 1. 知覚動詞の 3 分類 (Viberg 1983: 128)

| | EXPERIENCER-BASED | | SOURCE-BASED |
|---------|--------------------|--------------------|--------------------|
| | ACTIVITY | EXPERIENCE | COPULATIVE (STATE) |
| | (CONTROLLED) | (NONCONTROLLED) | |
| Sight | look at | see | look |
| Hearing | listen to | hear | sound |
| Touch | feel ₁ | feel ₂ | feel ₃ |
| Taste | taste ₁ | taste ₂ | taste ₃ |
| Smell | smell ₁ | smell ₂ | smell ₃ |

- (1) a. Peter {looked/was looking} at the birds.
 b. Peter {listened/was listening} to the birds.
- (2) a. Peter saw the birds.
 b. Peter heard the birds.
- (3) a. Peter looked happy.
 b. Peter sounded happy.

(Viberg 1983: 125)

このうち、活動的知覚動詞 (*look at, listen to, ...*) と経験的知覚動詞 (*see, hear, ...*) は知覚的事態における主体の意図性にちがいがあ。前者は意図的行為であり、後者は非意図的行為である。連結的知覚動詞 (以下、CPVs と表記) は叙述形容詞などの補語をとる自動詞用法の知覚動詞である。経験者主語構文と CPVC はそれぞれ、経験的知覚動詞と CPVs が生起する。

類型論的研究から、知覚・認識動詞構文の補文構造と認識的な直接性・間接性との関連が指摘されている (cf. Langacker 1991; Horie 1993; 堀江・パルデシ 2009; Verspoor 2000)。

- (4) a. I saw John crossing the street. (直接知覚事象)
 b. I saw that John was crossing the street. (知覚に基づく推論)
 c. I thought that John was crossing the street. (知覚に基づかない推論 = 間接知覚事象)

- (5) a. 雨だ！ (臨場的・直接的経験)
 b. 雨のようだ。 (知覚的証拠に基づく推論)
 c. 雨と聞いている。 (伝聞)

(堀江・パルデシ 2009: 142-143)

知覚・認識動詞構文や使役構文・依頼表現では、文法構造上の形式の複雑さが意味的な段階性に相対的に反映されるという「類像性 (iconicity)」(Haiman 1983) が観察される。経験者主語構文では補文構造と意味との間の類像的な対応関係がみられる。

非定形補部を伴う事例が直接知覚経験を表すのに対し、定形節補文を伴う事例では知覚そのものではなく、知覚に基づく推論・認識的判断を表す。以下のように、経験者主語構文において、直接目的語をとる (6a) のような事例や非定形補部を伴う (6b) のような事例では、事態の直接知覚が表される。

- (6) a. I saw your brother last night.
 b. I saw him walk down the street.

(Dik and Hengeveld 1991: 237-238)

一方で、定形節補文を伴う経験者主語構文では直接知覚とは異なる意味が表される。以下の例では、前者は知覚に基づく推論を表し、後者は他者からの伝聞的知識を表す。

(7) a. I could hear from her quivering voice that Peter had been fighting.

b. I saw on her face that Peter had been fighting.

(8) a. I heard from John that Peter had been fighting.

b. I saw in the newspaper that Peter had been fighting.

(Dik and Hengeveld 1991: 247)

これらの構文では、命題内容は知覚刺激の受容そのものによるものではなく、当該の感覚モダリティを介した推論や伝聞の結果として得られる知識・情報を示す。

また、叙実性 (factivity) の観点では、前者の事例では that 節の命題内容が半叙実的 (semifactive) であり、真実性がキャンセルされる but 以下のような内容と意味的に矛盾する。一方で後者の事例は、that 節の命題内容が非叙実的 (nonfactive) であり、真実性を否定する内容の共起が可能である。

(9) I could taste that the toast was burnt (* but it turns out that it wasn't).

(10) I heard (from John) that Mary had caught a cold (but it turns out that she hadn't).

(Dik and Hengeveld 1991: 248)

(10) の伝聞的知識を表す事例は以下のような他の非叙実述語と平行的である。つまり、知覚に基づく推論を表す事例は話し手にとって事実と捉えられる内容を示し、他者からの伝聞的知識を表す事例は話し手にとって事実とは異なる内容も表しうる。

(11) a. I knew that the sun is over 93 million miles away from the earth, but {it's not true./ I don't believe it.}

b. I have heard that the sun is over 93 million miles away from the earth, but {it's not true./ I don't believe it.}

c. I have been told that the sun is over 93 million miles away from the earth, but {it's not

true./ I don't believe it.}

d. I am aware that the sun is over 93 million miles away from the earth, but {it's not true./
I don't believe it.}

(中右 1983: 560)

以上のように、経験者主語構文では補文構造の定形性と知覚・認識の直接性・間接性との関連がみられ、定形節補文を伴う事例において推論や伝聞といった間接的なエビデンシャルリティを表す。

一方、CPVC では、経験者主語構文と異なる様相を見せる。

CPVC は (12) にみられるようにさまざまな補部をとる。CPVC は定形節補文を伴う事例だけでなく、定形節補文以外の補部をとる事例でもエビデンシャルとして機能する事例がある。

- (12) a. Jane sounded scared. (形容詞)
b. Jane sounded a fool. (名詞句)
c. Jane sounded like a fool. (like 句)
d. Jane sounded to be {a fool/ scared}. (to be 句)
e. Jane sounded like she was scared. (like 節)

(Gisborne 2010: 251)

Gisborne (2010) は CPVC には以下の 3 種類の用法があることを指摘している。推論を含まない知覚的な印象を表す *Attributory use* (e.g. *This music sounds lovely.*)、知覚に基づく推論を表す *Evidential-1 use* (e.g. *He sounds foreign.*)、主語が直接の知覚対象でなく間接知覚を表す *Evidential-2 use* (e.g. (*I've heard the forecast and*) *tomorrow's weather sounds fine.*) である。

Attributory use は当該の知覚動詞が表す感覚モダリティに基づく印象を表し、*be* に

よる叙述文と類似した意味をもつとされる。

- (13) a. This music sounds lovely.
b. Peter's face looks lived-in.
c. This cloth feels sticky.
d. This food smells spicy.
e. This food tastes rancid.

(ibid.: 245)

(13) のような価値評価の形容詞補語をとる場合、特定の五感の知覚を表す叙述形容詞文と同等の属性叙述的な意味を表す ((13a) に対応する例 : *This music is lovely.*)。このことは、(14) のようにその事実性が打ち消される意味を表す節を後続させることができないうことにも表れている。

- (14) a. *This music sounds lovely, but it isn't really.
b. *Peter's face looks lived-in, but it isn't really.
c. *This cloth feels sticky, but it isn't really.
d. *This food smells spicy, but it isn't really.
e. *This food tastes rancid, but it isn't really.

(ibid.)

Evidential-1 use、Evidential-2 use はエビデンシャルティに関わる用法である。

当該の知覚動詞が表す知覚経験に基づく推論を表す Evidential-1 use は、Attributory use の場合とは異なり、*He sounds foreign but he isn't.* のように事実性を打ち消す節を後続させることが可能である (ibid.: 249)。また、これとは逆に、*He sounds foreign and he is.* のような場合は、知覚経験に基づいて推論されることと実際との間に相違がないこ

とが表される。

(15) a. He sounds foreign.

b. He looks ill.

c. The fabric feels old.

d. The wine smells delicious.

e. The food tastes fantastic.

(ibid.)

また、Evidential-1 use では認識的な判断が表されるため、*to judge by ...*句を用いて以下のようにパラフレーズすることが可能である。

(16) a. To judge by his sound, he is foreign.

b. To judge by his look/appearance, he is ill.

c. To judge by its feel, the fabric is old.

d. To judge by its smell, the wine is delicious.

e. To judge by its taste, the food is fantastic.

(ibid.)

一方、Attributory use は認識的な判断ではなく知覚的な印象を表すため、*to judge by ...*句とはなじまない。

(17) は Evidential-2 use の事例である。

(17) a. (I've heard the forecast and) tomorrow's weather sounds fine.

b. (I've seen the forecast and) tomorrow's weather looks fine.

(ibid.)

Evidential-1 use と Evidential-2 use の違いは、主語の指示対象が直接の知覚対象であるかどうかにある。Evidential-1 では、主語が直接的な知覚対象として解釈される。一方、Evidential-2 では、主語の明日の天気 (*tomorrow's weather*) は直接知覚される対象ではなく、間接的な情報源である天気予報 (*the forecast*) を介して評価される対象である。つまり、Evidential-2 では、他者の発言やメディアなどの情報伝達手段をとおして知識が獲得されていることが表される。

以上の観察から、経験者主語構文と CPVC はエビデンシャルリティに関して、次の3点の共通点が見いだせる。(i) 五感の知覚動詞すべてで知覚に基づく推論の意味を表す、(ii) 視覚・聴覚の知覚動詞で伝聞の意味を表す構文を持つ、(iii) 伝聞を表す事例が非叙実的に解釈されうる。その一方で、両者の相違点として、(i) CPVC はさまざまな補部構文でエビデンシャル用法が存在するが、経験者主語構文は定形節補文を伴う事例に限られる、(ii) 知覚に基づく推論を表す事例における叙実性が以下の (18), (19) のように異なるという点が挙げられる。

(18) 経験者主語構文の叙実性

- a. 知覚に基づく推論：叙実的 (factive)
- b. 伝聞：非叙実的 (non-factive)

(19) CPVC の叙実性

- a. 知覚に基づく推論：非叙実的 (non-factive)
- b. 伝聞：非叙実的 (non-factive)

3.2 連結的知覚動詞構文のコントロールサイクル

本節では、前節で概観した CPVC の叙実性 (factivity) の差異について、Langacker (2002, 2009) における認知モデルであるコントロールサイクル (control cycle) の理論を援用し、記述する。意味的・統語的観点から、認識的コントロールサイクル (epistemic

control cycle) で包括的に捉えることができることを示す。

コントロールサイクルは非常に広範なプロセスをある存在が対象を自らの統制下に置く過程のアナロジーで一般化した認知モデルである。Langacker はこの認知モデルを導入し、無秩序に遍在するかのようにみえるさまざまな言語表現を統一的に捉えようとしている。最も一般的なモデル (図 1) では、存在は「主体 (actor)」、対象は「ターゲット (target)」と呼ばれる。主体を取り囲む領域である「ドミニオン (dominion)」は、主体が支配力を行使する領域を示す。全体の領域である「フィールド (field)」は主体の認識の領域 (または意識のスコープ) である。コントロールサイクルにおいて、相互作用のプロセスは基準段階 (baseline)、潜在的段階 (potential)、活動段階 (action)、結果段階 (result) の 4 つの「段階 (phase)」から構成される。基準段階は、主体・ターゲット間の相互作用の起こる前の静止状態 (stasis) である。潜在的段階は、ターゲットが主体の認識領域内に現れる段階であり、緊張状態 (tension) を伴うといわれる。活動段階 (action) は主体・ターゲット間の相互作用が起こる動的な段階である。結果段階はターゲットが主体のドミニオン内に置かれ、支配される段階である。このモデルの根底には、<力 (force)>と<緊張状態 (tension)>、もしくは<変化>と<連続性>という相反する状況が交互に循環し続けていくという考え方が存在する。

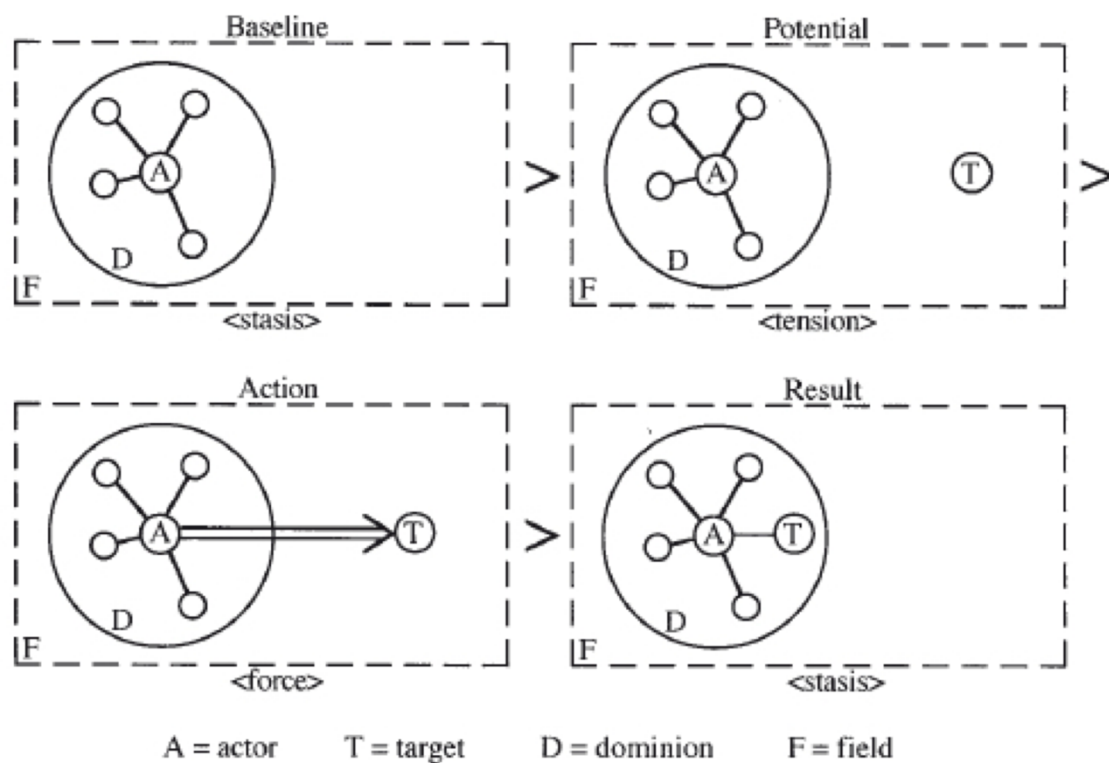


図1. コントロールサイクル (Langacker 2002: 193)

この認知モデルの背景となる具体事例として、Langacker (2002, 2009) ではネコ (主体) がネズミ (ターゲット) を捕獲するプロセスが挙げられている。まず、ネコがネズミの存在に気付いていない段階 (基準段階) があり、その後、ネコの視野の中にネズミの存在が含まれ、ネコが行動を起こすまでの段階 (潜在的段階) を経て活動に移行する。潜在的段階には、活動に至るまでの物理的な予備動作や、心理的な警戒が含まれる。そして、ネコによるネズミへの直接の捕獲動作 (e.g. 飛びかかる、捕まえる、傷付けるなど) の結果、最終的にネズミが捕獲された段階 (結果段階) に至る。これは主に物理的行為の例であるが、知覚や高次認識、社会的な活動などの多様なプロセスの概念的基盤をなしている。

コントロールサイクルでは、プロセスを動的な事象と静的な状態の循環 (cycle) からなる構造として捉える。動的な事象とは何らかの変化を含む有界的な事象であり、静的な状態とは動的変化を含まない緊張 (tension) を伴う非有界的な状態である。この

総体的な構造は「緊張性サイクル (Tension Cycle)」と呼ばれる (Langacker 2009: 305)。コントロールサイクルは、この緊張性サイクルを基盤とし、主体とターゲットの間のさまざまな相互作用を「獲得」(Capture) と「回避」(Avoidance) の概念で捉える (ibid.: 306)。獲得は、主体の認識領域に侵入してきた存在・ターゲットを支配する行為である。回避は、主体の認識領域から排除する行為である。

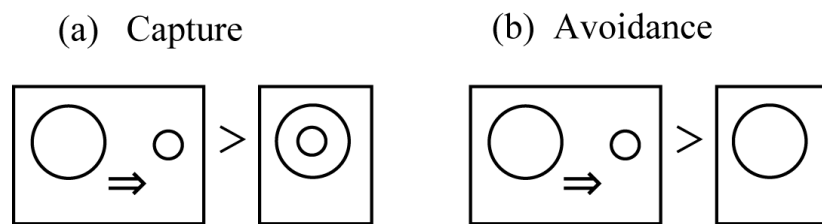


図 2. 獲得と回避

物理レベルの獲得は、対象を主体の領域（縄張りや体内など）に取り込むプロセスである。知覚レベルの獲得は、ある感覚を感覚情報として獲得、または受容するプロセスである。認識レベルの獲得は、ある命題の事実認識に関わるプロセスである。そして社会レベルの獲得は、ある対象を主体の社会的領域に受け入れるプロセスである。

表 2. さまざまな獲得・回避

| 事象の種類 | 獲得の例 | 回避の例 |
|-------|-----------------|----------|
| 物理的事象 | 捕獲、捕食、モノの授受 | 排除、駆逐 |
| 知覚的事象 | 五感・体性感覚などの獲得・受容 | 感覚の喪失・麻痺 |
| 認識的事象 | 命題の認識や確信 | 命題の否定 |
| 社会的事象 | 他者の受容、承認 | 拒絶、疎外、差別 |

現実性の概念などの認識や思考、推論の意味に関わるプロセスには、認識レベルのコントロールサイクルが適用される。認識や思考に関わるプロセスのコントロールサイ

クルでは、潜在的段階は順に、察知 (formulation) 、評価 (assessment) 、意向 (inclination) の3つの場面に区分される。察知、評価、意向のサイクルにも緊張状態と力の循環があり、察知は未完了プロセス、評価は完了プロセス、意向は未完了プロセスを示す。

(20) 認識的コントロールサイクルの潜在的段階 (Potential) における下位区分

- a. 察知 (Formulation) : 命題を潜在的な考慮の対象として導入する段階
- b. 評価 (Assessment) : 命題の現実性を評価し、潜在的な選択をおこなう段階
- c. 意向 (Inclination) : 概念化者の命題に対する判断が方向づけられる段階

(21) a. I am aware of the possibility that politicians occasionally distort the truth. 【察知】

b. She {wondered / considered} whether anything could be done to alleviate the situation.

【評価】

c. He {thinks / believes / suspects} they will never agree to his offer. 【意向】

d. She {learned / discovered / decided / concluded} that her lawyer could not be trusted.

【活動】

e. He {believes / knows / thinks / accepts} that the earth is round. 【結果】

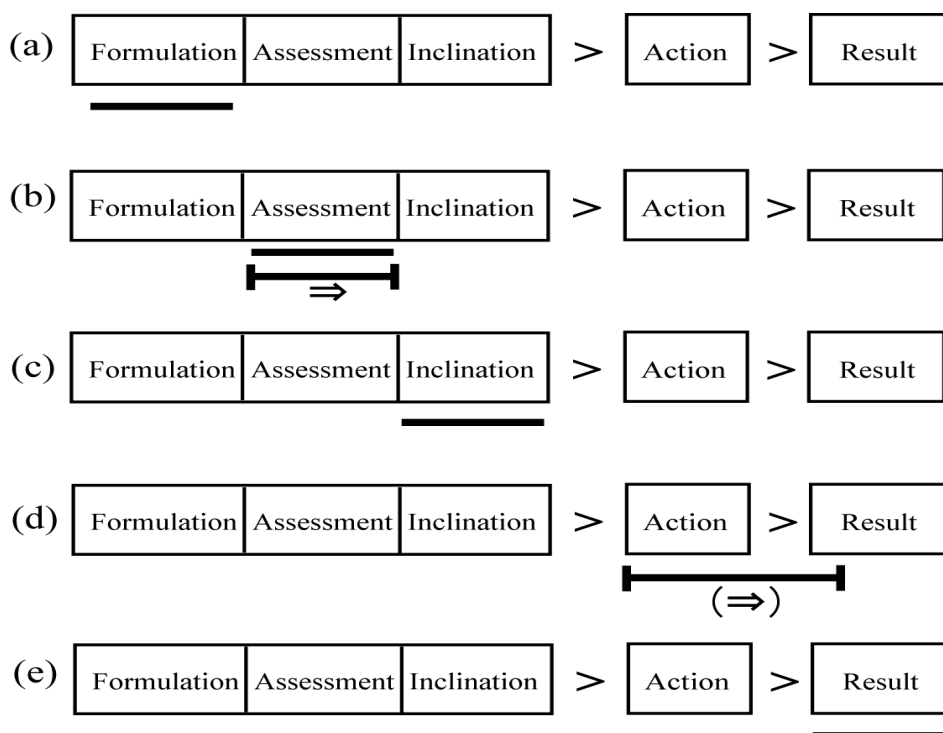


図 3. 認識レベルのコントロールサイクル

また、意向段階を表す事例にみられる特徴として、否定辞繰り上げ現象 (negative raising) がある (Langacker 2009: 263)。否定辞繰り上げ現象は概念化者の判断が方向づけられる段階を表し、命題内容の真偽が不確定であることを示す。以下に示すように、この現象はコントロールサイクルにおける他の段階ではみられない。以下はそれぞれ、人称用法・非人称用法の述語の例である¹³。

(22) a. I don't believe she has any children.

【意向】

¹³ (22), (23) の各事例における「=」は Langacker (2009) によるものであるが、この「=」はより厳密には山梨 (1993, 1995) における<認知レベルの意味>における同等性ではなく、<状況レベルの意味>において同等であることを表していることに注意されたい。

(i) <状況レベルの意味>

(i-a) 記号化される以前の場面对応レベル (i-b) 外部世界を真理条件的に反映するレベル

(ii) <認知レベルの意味>

(ii-a) 視点・パースペクティブを反映するレベル (ii-b) 言葉のコード化のモードにかかわるレベル

(山梨 1995: 6)

= I believe she doesn't have any children.

b. I didn't believe (his story) that he had to work late. 【活動】

≠ I believe (his story) that he didn't have to work late.

c. I don't believe (the theory) that God is female. 【結果】

≠ I believe (the theory) that God isn't female.

(23) a. It isn't possible that dolphins are smarter than people. 【察知】

≠ It's possible that dolphins aren't smarter than people.

b. It isn't uncertain whether dolphins are capable of metaphor. 【評価】

≠ It isn't uncertain whether dolphins are capable of metaphor.

c. It doesn't appear that chimps will ever learn to use the subjunctive. 【意向】

= It appears that chimps will never learn to use the subjunctive.

d. It isn't certain that beer is good for you. 【結果】

≠ It's certain that beer isn't good for you.

(Langacker 2009: 263)

以上のコントロールサイクルの枠組みを、Gisborne の提示した CPVC の 3 用法に適用する。

3.1 節で見たように、Attributory use と Evidential-1 use ・ Evidential-2 use の用法は叙実性のちがいがみられ、Attributory use は叙実的、Evidential-1 use ・ Evidential-2 use は非叙実的に捉えられる。さらに、エビデンシャルの用法では seem 構文同様、(24b, d) のように否定辞繰り上げの現象が観察される (Gisborne 2010: 278)。

(24) a. Jane sounds like she's not very old.

b. Jane doesn't sound like she's very old.

c. Jane seems like she's not very old.

d. Jane doesn't seem like she's very old.

これらの事実を踏まえ、CPVC の 3 用法をコントロールサイクルにより分析する。(25a, b) はそれぞれ Evidential-1 use ・ Evidential-2 use の例、 (26) は Attributory use の事例である。

(25) a. He sounds foreign.

b. (I've heard the forecast and) tomorrow's weather sounds fine.

(26) This music sounds lovely (, *but it isn't really).

エビデンシャルとしての用法である (25a, b) はコントロールサイクルにおける意向段階に位置づけられ、概念化者の命題に対する判断が方向づけられる段階を表す。一方、推論を含まない価値評価の意味を表す (26) は客体的な叙述形容詞文である (27) と同様、結果段階に位置づけられ、ある命題を主体が確信している状態、つまり、命題内容が事実であると主体が認識していることが示される。

(27) This music is lovely.

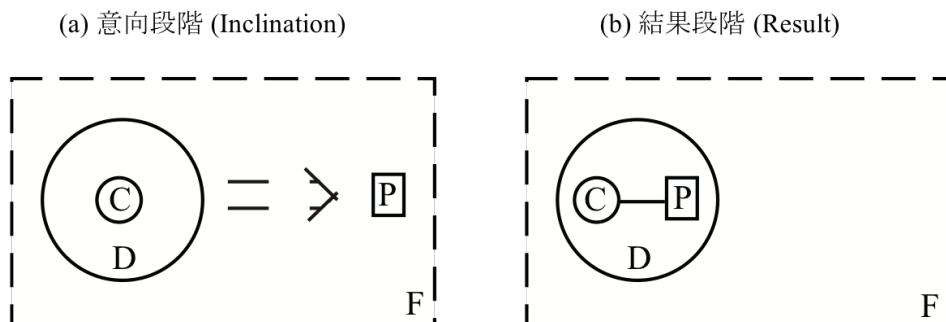


図 4. 意向段階と結果段階

この事実は、定形節における法助動詞の共起の有無と平行している。(28) のように、法助動詞を含む定形節は意向段階を、法助動詞を含まない定形節は結果段階を表す。

(28) a. She {may / might / could / should / will / must} be upset. 【意向】

b. She {is / was} upset. 【結果】

(Langacker 2009: 264)

また、コントロールサイクルはアスペクトの異なる CPVC の事例の記述にも援用できる。CPVC は典型的には状態的な事態を表すが、以下のような進行相をとる事例は異なる振る舞いを見せることが知られる (Viberg 1983: 132; Gisborne 2010: 265)。

(29) a. Jane is looking scary.

b. Jane is sounding angry.

(29) のような進行相をとる CPVC の事例では、主語で表される存在は動作主的に解釈され、表される事態が全体として主語の指示対象による意図的な行為のように捉えられる (Gisborne 2010: 265)。したがって、(30a, b) のように行為の目的を表す *to* 不定詞による副詞句や (30b, c) の *deliberately* のような様態副詞が共起し、主語の指示対象が当該の見え方・聞こえ方を意図的に生じさせている (つまり、「見せている」・「聞こえさせている」) という解釈が生じうる。

(30) a. Jane is looking scary (to frighten off the boy she doesn't want to date).

b. Jane is sounding angry (to hide the fact she's scared).

c. Jane is deliberately looking scary.

d. The teacher is deliberately sounding angry.

(Gisborne 2010: 265)

この解釈の場合、コントロールサイクルにおいては、プロセスが有界的・完了的に解釈されることから、活動段階に位置づけられるものとみなすことができる。

3.3 連結的知覚動詞構文の歴史的変化と構文化

本節では、3.1 節で示した CPVC の特異性について認知言語学・構文化理論の立場から検討する。具体的には、3.2.1 節で先行研究における CPVC の構文成立過程を概観し、その上で、3.2.2 節ではその過程を構文化理論の立場から捉え直す。

3.3.1 連結的知覚動詞構文の成立過程

認知言語学的研究により、CPVC の成立に身体性や主体性が深く関わっていることが明らかになっている (cf. Taniguchi 1997, 谷口 2005; 深田 2001)。Taniguchi (1997)・谷口 (2005) は通時的データに基づき、以下のような構文成立過程を明らかにしている。

Taniguchi (1997)・谷口 (2005) では、経験者と知覚対象の間の非対称関係の観点から CPVs の五種類を知覚対象からの刺激の際立ちがより高い「二方向性知覚」 (bi-directional perception) である嗅覚・聴覚と「一方向性知覚」 (uni-directional perception) である視覚・味覚・触覚に分けられている。五感を表す 5 種類の知覚動詞構文において、構文変化が一様に生じたわけではなく、知覚刺激の発散のあり方を反映する段階がみられるという。具体的には、知覚対象からの刺激の際立ちがより高い二方向性知覚の動詞の構文成立が先立ち、その後、一方向性知覚の動詞の構文成立が進展したとされている。

(31) 神経回路の次元で言えばすべての知覚は「刺激と反応」によって成立するのだが、
私たちが事態を言語表現によって記号化する前段階である概念化の次元で考えれば、知覚対象からの刺激のあり方は、嗅覚のように明確に認知可能なものと、触

覚や味覚のようにほとんど認知不可能なものに分けられる。

(谷口 2005: 218)



図 5. 知覚の二方向性

E は経験者 (experiencer) を、O は知覚対象 (object) を示す。E から O への破線矢印は経験者からのメンタルコンタクトを表し、知覚対象から経験者への破線矢印は刺激の発散を表す。

(32) a. 二方向性知覚：嗅覚、聴覚

- ・ 経験者から対象へのメンタルコンタクト
- ・ 対象から経験者への刺激発散 (匂い、音)

b. 一方向性知覚：視覚、味覚、触覚

- ・ 経験者から対象へのメンタルコンタクト

(谷口 2005: 219)

(33) a. The smell reached me.

b. The sound reached me.

(34) a. ?? The feeling reached me.

b. ?? The taste reached me.

c. ?? The sight reached me.

(ibid.)

表 3. OED における各用法の初出年 (Taniguchi 1997: 279)¹⁴

| | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 (C) |
|------------|------|-------|-------------|-------------|-------|-------------|--------|
| 二方向性知覚 | | | | | | | |
| smell (EB) | | | 1175 | ----- | | | |
| (SB) | | | 1175 | ----- | | | |
| (CPV) | | | 1220 | ----- | | | |
| sound (SB) | | | | 1352 | ----- | | |
| (CPV) | | | | 1374 | ----- | | |
| 一方向性知覚 | | | | | | | |
| look (EB) | 1000 | ----- | | | | | |
| (CPV) | | | | | 1400 | ----- | |
| taste (EB) | | | | 1340 | ----- | | |
| (CPV) | | | | | | 1552 | ----- |
| feel (EB) | 897 | ----- | | | | | |
| (CPV) | | | | | | 1581 | ----- |

表において、EB は経験者用法 (Experiencer-based) を、CPV は Stimulus-based で連結的用法 (Copulative) を、SB は Stimulus-based で、かつ (36) のように補語をとらず刺激の発散のみを記号化する用法をそれぞれ表す。

(35) a. I looked at John. (Experiencer-based)

b. John looks happy. (Stimulus-based)

(ibid.: 220)

(36) a. The food began to smell.

b. The bell began to sound.

¹⁴ 表中の sound の箇所に (EB) がないのは、sound には経験者用法 (EB) が存在しないためである。

(ibid.: 221)

表 2. のように、二方向性知覚の動詞から CPV としての事例が出現し始め、その後、一方向性知覚の動詞にも CPV の事例が出現しているという過程が確認できる。

谷口 (2005) は CPVC の成立の要因として (i) 形容詞・副詞間の意味的・形態的曖昧性と、(ii) それに伴う副詞、形容詞、動詞の指定する関係のプロファイルシフトを挙げている。

(i) に関しては、「中英語以前には形容詞が副詞と同形であり、また現代英語での形容詞と副詞のように意味的機能が明確に分かれてはおらず、両者が重複していた」という (ibid.: 224)。CPVC の構文変化は本来 (36) のように補語を必要としない非連結的用法を持つ二方向性知覚動詞から進展したが、上記の形容詞と副詞の間の意味的・形態的な曖昧性により、非連結的用法を持つ二方向性知覚動詞において副詞が共起する事例だけでなく形容詞が共起する事例が観察されるようになったようである。

(37) a. His grace looks cheerfully and smooth.

(1594 Shakespeare, Rich. III, III, iv, 50. Visser 1963: 210)

b. Good gentleman look fresh and merrily.

(1601 Idem Jul. Caes. II, I, 224. Visser 1963: 210)

c. You look most shockingly.

(1773 Goldsmith, She Stoops I (168). Visser 1963: 210)

(谷口 2005: 225-226)

さらに、(i) に伴って、(ii) の「対象から経験者への刺激発散」から「経験者から対象へのメンタルコンタクト」へのプロファイルシフトが生じたことで叙述的機能を持つ構文として成立したと説明されている。

また、CPVC の成立過程は主体化 (subjectification) の一種である。以下の図は 2 種

類の知覚動詞の主体化の過程を図示したものである。

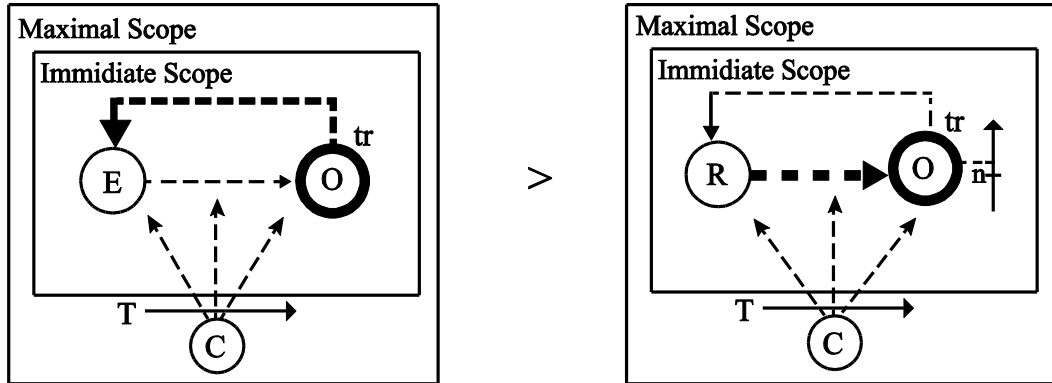


図 6. 二方向性知覚動詞の主体化

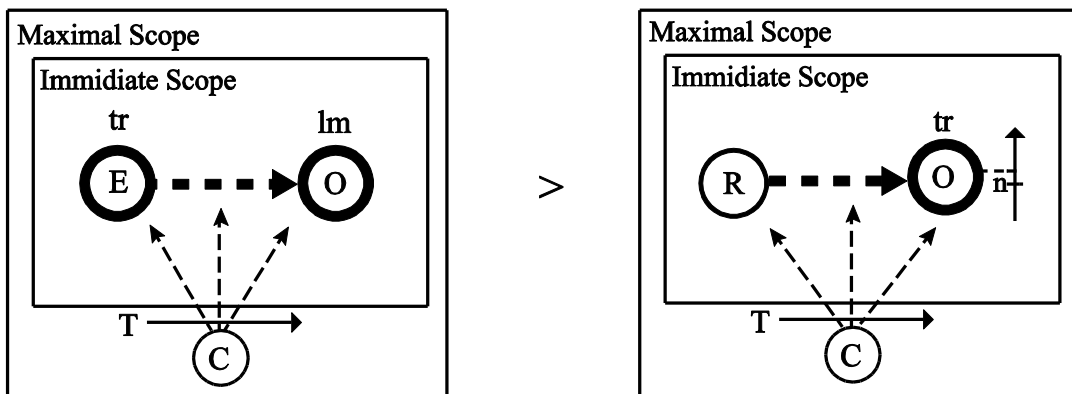


図 7. 一方向性知覚動詞の主体化

R は参照点 (reference point) を、C は概念化者 (conceptualizer) をそれぞれ示す。

二方向性知覚は知覚刺激の発散の際立ちが相対的に高い。そのため、知覚対象がトラジェクターとなって特徴づけが行われる構文形成が自然であったようである。主体化のプロセスの結果、知覚主体の存在が背景化し、知覚対象の特徴づけの意味が前景化したため、特徴づけをおこなう主体による知覚（メンタルコンタクト）の際立ちが高くなったと考えられる。ここで注意すべきは、このとき主体の存在は含意されるに

とどまっているという点である。つまり、言語化されないまま、知覚対象の特徴づけのための参照点 (reference point) として機能している。この主体化の過程に基づいて生じた類推により、一方向性知覚でも同様に主体化が起こったとみられる。

3.3.2 構文化現象としての連結的知覚動詞構文

本節では、前節で概観した CPVC の構文成立過程と CPVC の補文構造の拡大について構文化理論の観点から捉え直す。

前節での議論のように、CPVC は二方向性知覚および一方向性知覚の動詞で段階的な構文化をみせている。CPVC における叙述的機能を持つ構文への一連の変化の過程は、以下のように構文化 (Traugott and Trousdale 2013) の現象とみなすことができる。

先述のとおり、(i) 形容詞・副詞間の意味的・形態的曖昧性と (ii) それに伴う副詞、形容詞、動詞の指定する関係のプロファイルシフトにより CPVC への変化が促進された。ここで、構文成立前に形容詞・副詞が共起する事例が混在していた時期は、Traugott and Trousdale (2013) における構文化前の構文変化が生じていた時期とみられる。

共起する要素が副詞から形容詞補語へと変化していくという過程は一見、劇的な変化のように思える。しかしながら、両品詞カテゴリーが曖昧な状態で混在していたという事実は、構文化理論における形式と意味とのミスマッチの発生が促される状況につながり、構文変化の過程へと漸進的に移行していったことがうかがえる。

また、二方向性知覚の動詞において叙述的機能を持つ構文が成立 (=構文化) した後、一方向性知覚の動詞にも同様の変化が生じたという過程に関しても、構文化理論の説明が援用可能である。一方向性知覚動詞への拡張は構文化後の構文変化とみなすことができる。つまり、二方向性知覚動詞の事例が高頻度で観察されるようになり、一定以上慣習化が進んだことにより CPV のスキーマ性が高まり、CPVC に共起する動詞におけるホストクラスの拡大 (host-class expansion) の結果として、一方向性知覚の動詞にも変化が生じたと捉えられる。二方向性知覚および一方向性知覚の動詞の構文化は (38) のように捉えられる。「CPV₂」は二方向性知覚の CPVs を表し、「CPV₁」は一方向

性知覚の CPVs を表す。

(38) a. 構文化（二方向性知覚動詞の構文化）：

[N CPV₂ Adv.] > [N CPV₂ Adj.]

b. 構文化後の構文変化（一方向性知覚動詞への拡張）：

[N CPV₁ Adv.] > [N CPV₁ Adj.]

さらに、次節で扱う定形節補文を伴う CPVC に関しても、構文化後の構文変化により出現したと考えられる。定型節補文ではいわゆる繰り上げ現象 (raising) が観察されるなど、統語的な変化も生じている。このような変化も、構文化後の構文変化にみられる特徴のひとつである。

CPVC の構文化は以下のようにまとめられる。

(39) a. 構文化前の構文変化：副詞・形容詞が生起する事例の混在

b. 構文化：二方向性知覚の動詞における叙述的機能を持つ構文への変化

c. 構文化語の構文変化：

(i) 動詞におけるホストクラスの拡大（一方向性知覚動詞への拡張）

(ii) 補文構造上の統語的拡大（叙述名詞補語や定形節補文を伴う構文の成立）

ここで、CPVC の補文構造に関して、非定形補部 (to be 句) を伴う構文について述べる。CPVs には非定形節を伴う構文が存在するが、CPVs の中でも look 構文と sound 構文に限られ、さらに、to be 句に限定されるという事実がある。

(40) a. John looks to be a fool.

b. John sounds to be a fool.

c. *It tastes to be a fruit.

d. *It feels to be a blanket.

e. *It smells to be a rose.

(谷口 2005: 244)

一方、*seem* 構文では *to* 不定詞補部の動詞にそのような制限がなく、より多様な動詞が生起できる。

(41) John seems to have a lot of money.

(ibid.: 253)

経験者主語構文の補文構造との対比を考慮すると、非定形節を伴う CPVC の分布が限定的であることは一見、不規則的であるように感じられるかもしれない。しかしながら、この事実に関しては、認知文法における定形節・非定形節の特徴付けから説明可能である。

認知文法では、非定形節は出来事 (occurrence) を表し、定形節は命題 (proposition) を表すとされる (Langacker 2008: 441)。いずれもプロセスを表すが、後者の命題はグラウンディングされていることが異なる。Langacker (2008) では定形節と非定形節を伴う述語の対比として、時間的意味を表す動詞 (e.g. *begin, keep, finish*) と認識的評価 (e.g. *be true, be false*) を表す動詞が挙げられている。前者はアスペクト的な意味を表し、出来事の時間的現れが問題となる述語であるため、出来事／事態を表す非定形節構文の特徴とよくなじむ。それに対し、後者は認識的判断・評価の妥当性が問題となるため、典型的に命題を表す定形節を伴う傾向がある。認知文法では、非定形節をとる述語は現実 (effective) レベルの関係を表し、定形節は認識 (epistemic) レベルの関係を表すとされる (Langacker 2008: 442)。

(42) a. She {began / kept / finished} scraping off the paint.

- b. *She {began / kept / finished} that she scraped off the paint.
- c. That he never takes a bath is {true / false}.
- d. *His never taking a bath is {true / false}.

非定形節を伴う seem 構文に多様な動詞が生起できるのは、ひとつには seem がより抽象的な推論を表す構文として発達しているためである。非定形節を伴う CPVC も推論的意味を表すものの、相対的に seem ほど抽象性が高くなっているわけではなく、当該動詞の感覚モダリティの間接的な知覚・認識（知覚に基づく推論および伝聞）の意味に限られる¹⁵。

また、この非定形補部の限定的な共起に関して谷口 (2005: 253) が「CPVs での補語が本来副詞から転じた形容詞であるため」と述べているとおり、to be 句は叙述形容詞・叙述名詞に対応する非定形補部である。CPVC に共起する非定形補部が限定的であることにはこのような理由があると思われる¹⁶。

- (43) a. Jane sounded scared.
- b. Jane sounded a fool.
 - c. Jane sounded like a fool.
 - d. Jane sounded to be {a fool/ scared}.
 - e. Jane sounded like she was scared.

(Gisborne 2010: 251)

(44) CPVC のネットワーク

¹⁵ ただし、主体化の進行の程度によって、今後より抽象化をみせる可能性はある (cf. 谷口 2005; Nakamura 2018)。上記の記述はあくまで現時点でのものであることをことわっておく。

¹⁶ 上記の説明は非定形補部 to be-句に焦点を当てている。非定形補部を伴うのが視覚・聴覚動詞のみであること理由は、谷口 (2005: 245) が述べるように認識・推論の間接性の観点に関わっていると思われる。

- a. マクロ構文 : [N CPVs Comp.]
- b. メゾ構文 : [N look Comp.], [N sound Comp.], [N smell Comp.], [N taste Comp.], [N feel Comp.]
- c. マイクロ構文 : [N look Adj.], [N look N], [N look like-phrase], [N look to be-phrase], [N look like-clause], [N sound Adj.], [N sound N], ...

CPVC はさまざまな補部を伴うが、どのカテゴリーも叙述機能を有する形容詞補語と連続的な補部であるといえる。つまり、形容詞、名詞、like 句を補部にとる構文は連続体を成しており、非定形補文 (to be 句) もその連続性の中に位置付けられる。

さらに、CPVC は read や touch といった行為動詞への拡張を見せている (谷口 2005: 247-248)。

(45) read: To turn out (well or ill), or have a specified character, when read; to produce a certain impression on the reader. Also, to convey a statement when read.

(46) a. Thy comedies excell ... And read politely well.

(1731 Gentl. Mag. I, 21. OED, s.v. *read*)

b. Whose productions ... read better than they act.

(1789 T. Twining Aristotle's Treat: Poetry. I, 254. OED, s.v. *read*)

c. Nothing can read more free and easy than his present translation.

(1828 Examiner 84/2. OED, s.v. *read*)

(47) touch: (with descriptive extension) To 'feel' to the touch; to cause a specified sensation when touched .

(48) a. We say this beast touches nicely upon its rib.

(1770-4 A. Hunter Georg. Ess. IV. 575. OED, s.v. *touch*)

b. They touch rough — dusty rough, as books touch that have been lying unused.

(1885 Jefferies Open Air 104. OED, s.v. *touch*)

上記の引用中の記述や事例で示されるとおり、*read* や *touch* は CPVs の表す知覚・推論の意味との関連を見せる。こういった、より上位の動詞クラスへの拡張も構文化後の構文変化として生じる現象の一例である。

3.3.3 定形節補文を伴う連結的知覚動詞構文

CPVC は英語の定形節補文構文で広く用いられる一般的な補文標識である *that* ではなく、*like, as if, as though* に導かれる定型節補文を伴う。López-Couso and Méndez-Naya (2012) では *like, as if, as though* は “comparative complementizers” と呼ばれる。

like 節・*as if* 節・*as though* 節を伴う *seem* 構文や CPVC では、コピー繰り上げ (copy-raising) または擬似繰り上げ (pseudo-raising) と呼ばれる現象が観察される。これは、「従属節内の主語が主節の主語に繰り上げられ、従属節内に同一指示的な代名詞のコピーが残る現象 (Gisborne 2010)」とされる。生成文法では、このような構文のペアが「同一指示制約」という変形規則に基づく派生関係をもち、同一の意味を表すと分析する。また、非繰り上げ構文の主語位置に生起する *it* は伝統的に “Anticipatory *it*” (Curme 1931), “Provisional *it*” (Kruisinga 1931), “Preparatory *it*” (Jespersen 1933) あるいは「虚辞 (expletive)」といった用語で記述され、「意味を持たない」ものとされてきた。

認知言語学では、言語の形式のちがいが意味のちがいに反映していると考え、抽象的な統語操作を仮定しない。また、認知文法ではこの種の *it* に対し、意味を持たないと捉えるのではなく、他の用法との連続性を見出す。

Langacker (1991) は Bolinger (1977) による “ambient *it*” の分析を基本的に継承しつつ、「抽象的なセッティング」として規定する。さらに近年の Langacker (2002, 2008, 2009) の枠組みでは、抽象的なセッティングなどそれまでの記述を踏襲しつつ、非人称 *it* は命題に関連する「意識のスコープ (scope of awareness)」を示すと記述される。この意識のスコープは、コントロールサイクルにおけるフィールド (F) と一致し、セ

ッティングと連続的である。

- (49) a. I {suspect / believe / imagine} that she will be elected.
b. It {appears / seems / is likely} that she will be elected.
c. That she will be elected is {likely / probable / doubtful}.

(Langacker 2009: 144)

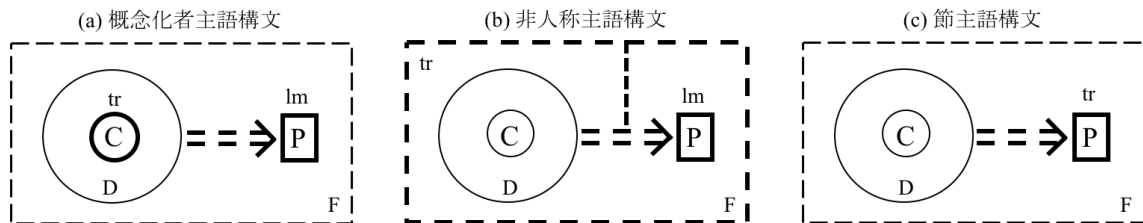


図 8. 概念化者主語構文、非人称主語構文、節主語構文 (Langacker 2009: 144)

図 8 において、C は概念化者 (Conceptualizer)、P は命題 (Proposition)、F は概念化者の意識のスコープ／フィールド (scope of awareness / Field) を示す。いずれもスキーマとなっている認識的事態は共通しているが、認知的際立ちを受けている要素が異なっている。(a) 概念化者主語構文では、特定の概念化者と命題との間の認識的なプロセスが示される。一方で、(b) 非人称 it 主語構文や (c) that 節主語構文では、当該の事態の認識の主体である概念化者が脱焦点化 (defocused) され、前者では概念化者の意識のスコープ (F) が、後者では命題 (P) が、それぞれ節のトラジェクターである主語として焦点化されている。(a) では認識的プロセスの参加者と認識の対象との間の相互作用がプロファイルされるのに対し、(b) では特定の認識の主体としての概念化者が焦点化されず、「一般化された概念化者」 (generalized conceptualizer) としての含意をもち、いかなる概念化者にとっても同様の認識を得ることが示唆される。

以上の意識のスコープに関する Langacker (2002, 2008, 2009) の規定と、Langacker (1995) や Langacker (2009: 321) による繰り上げ構文の分析をもとに、CPVC のコピー

繰り上げ現象の認知構造を以下に示す。

(50) a. It sounds like/as if/as though Jane won.

b. Jane_i sounds like/as if/as though she_i won.

(Gisborne 2010: 269)

(51) a. It looks like Mary is going to leave here.

b. Mary looks like she is going to leave here.

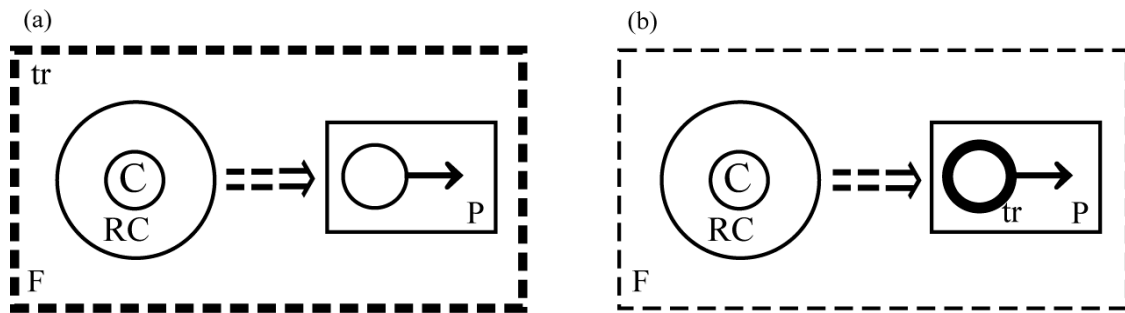


図 9. コピー繰り上げ現象

(50), (51) の各 a, b の認知図式はそれぞれ図 9 のようになる。(a) では主語位置の抽象的なセッティングである it がトラジェクターとして際立ちをもつため、主体の認識的な領域であるフィールドが際立つ。一方、(b) では、命題内の主語と同一の指示対象である存在 Jane, Mary がトラジェクターであり、プロフィールされる。構文間の意味の相違は、プロフィールの相違に現れる。

3.3.4 現代英語における変化

最後に、現代英語における定型節補文を伴う構文の発達について構文化の観点から分析する。

現代英語における CPVC には、主語位置の名詞句が存在しない事例が観察される。

López-Couso and Méndez-Naya (2012) は (52), (53) のような CPVC について、(i) 動詞が現在時制で、(ii) *like* との共起が最も高頻度であったことから、[looks like], [sounds like] に化石化 (fossilization) が疑われるとしており、エビデンシャルに対応する意味へと変化する過程にあると述べている。

(52) a. Looks as if it might well have been doesn't it?

b. Sounds as though he must be.

(53) Going to be a big one, looks like.

(López-Couso and Méndez-Naya 2012: 180)

また、Nakamura (2018) は現代アメリカ英語において、CPVC が評言節 (comment clause) としての用法を発達させていることを示している。具体的には、(i) 付加疑問文の従属節との一致、(ii) 主語の省略あるいは虚辞 *it* の選好的選択、(iii) 主節の節内での自由な生起、(iv) 従属節内の直説法の使用といった事実から、CPVC が評言節としての用法を発達させていることを示している。

(53) のような事例における [looks like], [sounds like] には、定形節補文構文の事例で補文標識とみなされる *like* が残存したまま固定化しているという特異性がある。この事実はチャンク化が関わっているものと思われる。3.3.2 節で示したように、CPVC において定形節補文を伴う構文が成立した後、(54) のように、非人称 *it* が主語位置に生起する定形節補文構文 [it CPVs (looks, sounds) like (p)] の事例の頻度が高頻度となり、その後、構文化後の構文変化の一側面として、主語省略を経て、さらなる統語的拡大 (syntactic expansion) が生じた結果、[CPVs (looks, sounds) like] が慣習化したものと考えられる。

(54) [it CPVs (looks, sounds) like (p)]

> [(it) CPVs (looks, sounds) like φ]

> [φ CPVs (looks, sounds) like φ]

> [CPVs (looks, sounds) like]

3.4 まとめ

第3章では知覚動詞構文のエビデンシャル用法を中心に分析した。Gisborne (2010)で提案されたCPVCの用法の分類に関して、経験者主語構文と比較するかたちで考察をおこない、主に認知文法の立場から、知覚動詞の背後にある我々の知覚経験や叙実性・エビデンシャルリティなどの認識的概念を中心に記述した。特に、Langacker (2002)のコントロールサイクルにより、当該構文で観察される叙実性の差異をより一般的なレベルで示した。また、構文化理論を援用し、構文の成立以前から現代英語における変化におけるさまざまな補部を伴う構文の成立過程および現代英語における変化に関して、チャンク化 (Bybee 2010) に基づく構文変化の可能性を示唆した。

第4章 補部が前置された知覚・推論動詞構文の分析

第4章では、連結的知覚動詞構文と他の構文との相互作用から創発する構文現象について分析する。具体的には、連結的知覚動詞や *seem* が生起する complement-as 構文が間主観的な構文変化を遂げていることを、コーパスに基づく共時的分析や語用論的分析に加え、現代アメリカ英語の構文変化の通時的観点を踏まえて分析する¹⁷。

4.1 補部が前置された知覚・推論動詞構文

本章では、(as) 補部 + as + N + V の形式をとる「complement-as 構文 (“complement-as construction”）」(Kjellmer 1992; Tottie 2001, 2002) のうち、(1) のような SEEM タイプの動詞 (CPVs や *seem, appear*) をとる構文を扱う。コーパスから収集した事例をもとに補語の分布や関連構文との比較、動詞の意味論等の分析をおこない、現代英語において、当該構文が対立する主張を導く狭義の譲歩用法だけでなく、直前・直後の発話内容の伝達を円滑にするための語用論標識・談話標識的な用法を発達させていることを明らかにする。

- (1) a. Incredible as it seems, America’s infotech infrastructure is no longer world-class.
- b. Some have speculated that the new stamping makes it easier for the hitter to pick up the spin on the ball. This is the one visible change in this year's ball — so, as unlikely as it seems, you figure it’s possible.
- c. As cold as it sounds, “Wall Street views layoffs as a good thing,” he said.
- d. As cliché as it sounds, “bears are probably more afraid of you than you are of them,” ...
- (COCA)

¹⁷ 本章の内容は Kono (2015), 河野 (2016) に基づく。

complement-as 構文（以下、comp. as 構文と表記）は主に記述的な観点から研究がなされている（Quirk et al 1985; Kjellmer 1992; Tottie 2001, 2002）。comp. as 構文を含む文では、一般に主節・従属節（comp. as 節）間の関係において因果関係（2a）、譲歩（2b）、付帯状況（2c）の3用法があるといわれる（Kjellmer 1992）。因果関係・譲歩用法はそれぞれ、comp. as 節が主節に対して因果関係・譲歩の関係を表す用法である。付帯状況用法は単に付加的に話し手・聞き手に共有された知識を示す用法であるとされる（Kjellmer 1992: 342）。

(2) a. Tired as he was, he fell asleep immediately.

(Kjellmer 1992: 339)

b. Tired as he was, he felt obliged to finish the chapter.

(ibid.: 340)

c. ... unable as he [President Eisenhower] was himself to say his running was best for the country, unconsciously he had placed his party before his country.

(ibid.: 342)

このような3用法がみられるとされる一方、(3)のような構文の事例には、因果関係的解釈はみられない（“Impressionistically, they seemed unlikely to have a causal reading.”）という記述がある（Tottie 2001: 312）。

(3) a. Incredible as it seems, hunger may be completely absent during even an extended fast.

b. And, to be frank I suspected also that she never wrote about me, and that I might feel hideously offended, stupid as that sounds.

(Tottie 2001: 312-313)

実際、(3) のように SEEM タイプの動詞をとる *comp. as* 構文のコーパス上の事例は、(2) の 3 分類における譲歩的な解釈となるものばかりが観察される。しかしながら、先行研究では限られたデータから *comp. as* 構文の一般化が図られており、動詞に *be* が生起する構文の分析が中心で、SEEM タイプの動詞のような *be* 以外の動詞が生起する事例については詳細な分析がおこなわれていないという問題がある。それゆえ、(3) のような構文に関して Tottie (2001) が示唆した主節・従属節間の関係に関する特異性に関しても、詳細な記述や理論的説明はなされていない。

4.2 意味論的分析

前節で述べたとおり、先行研究では当該構文の記述に足る量的分析がおこなわれているとはいえない。本研究では当該構文として認定される事例をコーパスから網羅的に収集する。主に現代アメリカ英語の事例を対象を絞り、コーパス (COCA) から事例を収集し、さらに、構文的な特異性を明らかにするため、生起する補語の分布傾向をアプレイザル理論 (Martin and White 2005) を援用して分類する。

4.2.1 現代アメリカ英語の事例

本研究では、現代アメリカ英語の事例の中で最も頻度が高く、慣習化していると思われる構文を分析対象とする。主語に関しては、(3) のような構文を抽出するため、代名詞 *it, this, that* を候補とし、動詞に関しては、SEEM タイプの 7 種の動詞 *seem, appear, look, sound, feel, smell, taste* の単純現在形を候補として、各事例数を比較する。

以上の調査の結果が表 1 である¹⁸。各構文の右の数字はトークン頻度を示している。

¹⁸ 事例の検索時の手続きとして、補語に対応する品詞タグを指定せず、[as it Vs] の事例を検索したのち、当該構文以外的事例を排除することによって抽出・収集した。当該構文の補語のプロトタイプは形容詞類であるが、形容詞は名詞や分詞との差異が必ずしも明確ではない。COCA の形容詞タグでは正確な抽出が困難な場合がある (e.g. *messed up, cliché*)。そのため、この手順を採用している。

表 1. 各構文の事例数

| construction | token | construction | token | construction | token |
|---------------------|-------|-----------------------|-------|-----------------------|-------|
| comp. as it sounds | 203 | comp. as this sounds | 18 | comp. as that sounds | 54 |
| comp. as it seems | 93 | comp. as this seems | 6 | comp. as that seems | 8 |
| comp. as it appears | 10 | comp. as this appears | 0 | comp. as that appears | 0 |
| comp. as it looks | 4 | comp. as this looks | 4 | comp. as that looks | 0 |
| comp. as it feels | 3 | comp. as this feels | 1 | comp. as that feels | 0 |
| comp. as it smells | 0 | comp. as this smells | 0 | comp. as that smells | 0 |
| comp. as it tastes | 0 | comp. as this tastes | 0 | comp. as that tastes | 0 |

この結果から、高頻度で観察される comp. as it sounds 構文と comp. as it seems 構文を主な分析対象とした（以下、特に他の形式・構文と対比させることがない場合は、これらの構文を単に「sound 構文」、「seem 構文」と表記する）。(4), (5) はそれぞれ収集された sound 構文、 seem 構文の事例の補語の内訳を示している。

(4) sound 構文の補語 (92 タイプ・206 トークン)¹⁹

strange (20), crazy (19), corny (18), odd (8), amazing (6), bizarre (6), silly (6), improbable (5), incredible (5), sick (4), simple (4), cliché (3), clichéd (3), good (3), harsh (3), nice (3), simplistic (3), unbelievable (3), counterintuitive (2), funny (2), goofy (2), impossible (2), ironic (2), peculiar (2), stupid (2), unfair (2), unlikely (2), weird (2), absurd (1), anti-humanistic, arbitrary, artificial, stounding, bad, basic, brutal, cold, cornball, cruel, depraved, depressing, dorky, dramatic, egotistical, embarrassing, extreme, great, hokey, horrifying, humble, idyllic, implausible, impressive, intuitive, inviting, laughable,

¹⁹ それぞれの構文において、表 1 の事例数 (sound: 203, seem: 93) と (4), (5) の中の補語のトークン頻度の合計 (sound: 206, seem: 98) が一致していないのは、1 文中に複数の補語をとるものがあるためである。

ludicrous, lugubrious, maudlin, messed up, morbid, mundane, naive, outlandish, outrageous, paradoxical, preposterous, radical, remarkable, ridiculous, rude, rustic, scary, schmaltzy, settled, shocking, sinister, superficial, surprising, tame, tough, trite, un-American, unchristian, uninviting, unorthodox, unpalatable, unsavory, vain, wacky, warped, wonderful

(5) seem 構文の補語 (48 タイプ・98 トークン)

strange (18), incredible (10), unlikely (8), odd (6), crazy (4), amazing (3), unbelievable (3), absurd (2), astonishing (2), impossible (2), paradoxical (2), alien (1), ambitious, casual, counterintuitive, counterproductive, diminutive, distasteful, dogged, draconian, dramatic, exhaustive, fantastic, frightening, hard-hearted, heartbreaking, horrifying, improbable, incorrect, intense, naive, obscure, old-fashioned, outrageous, petty, remarkable, remote, ridiculous, sad, shocking, significant, simple, small, solid, surprising, unimaginable, untechnical

4.2.2 アプレイザル理論

前節の事例に対して、アプレイザル理論 (Martin and White 2005) の価値基準を援用して補語の分類をおこなう。アプレイザル理論の枠組みでは、評価極性（肯定的・否定的）を含めたさまざまな価値基準が定められているため、評価・判断を表す多様な補語が現れる comp. as 構文を扱ううえで有用である。

アプレイザル理論は選択体系機能言語学 (Halliday and Matthiessen 2004) に基づいて Martin and White (2005) によって提唱された、テキストの評価情報・価値判断の分析のための体型的アプローチである。この枠組みでは、評価極性（肯定的評価・否定的評価）を含めたさまざまな価値基準が定められている。

アプレイザル理論による分析は本来、あるテキスト全体に関して、評価情報を持つすべての語句に対して評価基準を付与し分類するものである。本研究の comp. as 構文

の補語の分類にあたっては、コーパスから収集された当該構文の事例に生起する補語に関して、その補語を含む事例及び前後文脈を考慮した上で、最終的に補語それぞれに対してアプレイザル理論の評価基準を付与し、分類するという方法を採用する。

アプレイザル理論の評価基準について簡単に説明する。アプレイザル理論で定められている価値基準は態度 (Attitude) と呼ばれ、感情評価 (Affect)、道徳評価 (Judgement)、観照評価 (Appreciation) の3種類に分けられる。感情評価は感情に関する評価であり、幸・不幸に関わる幸福感 (happiness)、安心・不安に関する精神的安定 (security)、満足・不満に関わる満足感 (satisfaction) に分かれる。道徳評価は主に人の行為に関する社会的・道徳的評価とされ、大きく世評 (social esteem) と規範 (social sanction) に分かれる。世評はさらに普通さ・異常さに関わる一般性 (normality)、能力・体力の有無に関する能力 (capacity)、信頼性 (tenacity) に分類され、規範は誠実さや正直さに関わる評価 (veracity) と、公平さや礼儀に関わる評価 (propriety) に分類される。観照評価は美学的な評価とされ、反応 (reaction)、構成 (composition)、価値 (valuation) に分類される。反応には面白さなど印象度に関わる評価 (impact) や質の高・低に関わる評価 (quality) がある。構成は論理や一貫性に関わる評価 (balance) と構成の複雑性に関わる評価 (complexity) とに分かれる。価値は評価者にとって貴重・有益と見なされるかどうかに関わる評価とされる。

表2は、アプレイザル理論の価値基準の種類と対応する英語の各表現の具体例を示している。

表 2. 英語における価値基準の種類と評価表現の関係

(Martin and White (2005), 佐野 (2012: 56) をもとに作成)

| Type of Appraisal | | Positive | Negative | |
|-------------------|-----------------|--|---|--|
| Affect | happiness | <i>rejoice, happy, love ...</i> | <i>sad, unhappy, sorrowful ...</i> | |
| | security | <i>faint, assured, comfortable ...</i> | <i>anxious, startled, surprised ...</i> | |
| | satisfaction | <i>satisfied, pleased, charmed ...</i> | <i>discontent, angry, fed up with ...</i> | |
| Judgement | social esteem | normality | <i>normal, predictable, familiar ...</i> | <i>abnormal, unpredictable, odd ...</i> |
| | | capacity | <i>powerful, mature, sensible ...</i> | <i>weak, naive, foolish ...</i> |
| | | tenacity | <i>brave, careful, faithful ...</i> | <i>impatient, unreliable, unfaithful</i> |
| | social sanction | veracity | <i>truthful, honest, credible ...</i> | <i>dishonest, blunt, deceitful ...</i> |
| | | propriety | <i>moral, fair, kind, polite ...</i> | <i>rude, evil, cruel, unfair ...</i> |
| Appreciation | reaction | impact | <i>dramatic, intense, notable ...</i> | <i>boring, uninviting, predictable</i> |
| | | quality | <i>fine, good, appealing ...</i> | <i>bad, plain, ugly ...</i> |
| | composition | balance | <i>balanced, consistent, logical ...</i> | <i>irregular, uneven, flawed ...</i> |
| | | complexity | <i>simple, intricate, precise ...</i> | <i>unclear, plain, simplistic</i> |
| | valuation | | <i>real, valuable, effective ...</i> | <i>worthless, useless, ineffective ...</i> |

表 3, 4 は sound 構文および seem 構文の補語の価値基準の分布を示したものである。

表 3. sound 構文の補語の価値基準の分布 (N=206)

| Type of Appraisal | | | Positive | Negative | Neutral | TOTAL |
|-------------------|-----------------|------------|----------|----------|---------|-------------|
| Affect | | | 0 | 7 | 2 | 9 (4.4%) |
| Judgement | social esteem | normality | 1 | 86 | 0 | 115 (55.8%) |
| | | capacity | 0 | 1 | 0 | |
| | social sanction | veracity | 0 | 10 | 0 | |
| | | propriety | 1 | 16 | 0 | |
| Appreciation | reaction | impact | 2 | 28 | 1 | 82 (39.8%) |
| | | quality | 11 | 6 | 1 | |
| | composition | balance | 0 | 20 | 0 | |
| | | complexity | 4 | 7 | 0 | |
| | valuation | | 0 | 2 | 0 | |
| | TOTAL | | | 19 | 183 | |

表 4. seem 構文の補語の価値基準の分布 (N=98)

| Type of Appraisal | | | Positive | Negative | Neutral | TOTAL |
|-------------------|-----------------|------------|----------|----------|---------|------------|
| Affect | | | 0 | 5 | 0 | 5 (5.1%) |
| Judgement | social esteem | normality | 0 | 56 | 0 | 77 (78.6%) |
| | | capacity | 0 | 3 | 0 | |
| | | tenacity | 1 | 0 | 0 | |
| | social sanction | veracity | 0 | 12 | 0 | |
| | | propriety | 0 | 5 | 0 | |
| Appreciation | reaction | impact | 3 | 0 | 0 | 12 (12.2%) |
| | | quality | 0 | 1 | 0 | |
| | composition | balance | 0 | 3 | 0 | |
| | | complexity | 0 | 1 | 0 | |
| | valuation | 1 | 3 | 0 | | |
| Graduation | quantification | | 0 | 0 | 4 | 4 (4.1%) |
| TOTAL | | | 5 | 89 | 4 | 98 |

表 3, 4 が示すように、sound 構文と seem 構文で価値基準の分布が大まかには類似しているといえる。補語の評価性に関しては、sound 構文で 206 例中 183 例 (88.8%)、seem 構文で 98 例中 89 例 (90.8%) と否定的評価を意味に含むものが圧倒的な割合を占める。また、価値基準のうち最も高い割合を占める [-normality] (e.g. *strange, crazy, odd*) を始めとして、想定・期待に反する評価・判断を表す補語の割合が高い。

以上の結果が当該構文に特徴的であることを確認するため、比較のために動詞が be である形式 comp. as it is 構文（以下、be 構文と表記）の補語の分類をおこなった。具体的には、be 構文の事例 1770 例から 500 例のランダムサンプリングをおこない、さらに、そのうちの譲歩用法の事例（117 タイプ、172 トークン）を抽出し、補語で表される評価・判断を検討した。その結果、肯定的評価を表す事例が 73 例 (42.4%)、否定的評価を表す事例が 85 例 (49.4%)、中間的評価（肯定的・否定的極性の観点で曖昧なもの）が 14 例 (8.1%) という結果となった。つまり、動詞 be をとる comp. as 構文

は *sound* 構文や *seem* 構文とは異なり、想定・期待に反する評価・判断や否定的評価への著しい偏りはみられなかった。特に顕著な相違点として、*be* 構文では、[-normality] の価値基準がわずかに 6 例 (3.5%) のみであったことが挙げられる (*bizarre, crazy, extreme, shocking, strange, surprising*)。こうしたことから、*sound* 構文や *seem* 構文のコロケーション上の特異性が確認できる。

be 構文は、動詞が *be* であるため断定的な響きになりやすく、それゆえ想定・期待に反する評価・判断と共起しにくいと考えられる。一方で、*sound* 構文や *seem* 構文の場合、より主体的で断定が和らげられているため、命題内容の妥当性を疑うような表現との共起を許すと考えられる。

次に、先行研究で示唆された当該構文の特異的な主節・従属節間の関係について考察する。主節・従属節間の関係に関して、以下の (6) の事例と (7) の事例 ((1) の再掲) とで異なる。

(6) a. Diminutive as it seems in most photographs, the Glass House is surprisingly big.

b. As exhaustive as it seems, Richardson's project is far from definitive.

c. As a nanny and former teacher's aide, I know that as good as it sounds, it won't work.

d. And that idea of renunciation — un-American as it sounds — lies near the center of it all.

(COCA)

(7) a. Incredible as it seems, America's infotech infrastructure is no longer world-class.

b. Some have speculated that the new stamping makes it easier for the hitter to pick up the spin on the ball. This is the one visible change in this year's ball — so, as unlikely as it seems, you figure it's possible.

c. As cold as it sounds, "Wall Street views layoffs as a good thing," he said.

d. As cliché as it sounds, "bears are probably more afraid of you than you are of them," ...

(COCA)

(6) のような事例では、*comp. as* 節中の *it* が指示する対象が N であり、主節・従属節間において、評価・判断に意味的な対立があるという特徴がある。このような用法では、(6a) *diminutive* および *big*、(6b) *exhaustive* および *definitive* のように、表現間で語彙的な対立がみられるものもある (cf. Kjellmer 1992)。これらは、先行研究における *comp. as* 構文一般の譲歩用法の典型例に近いものである。一方で、(7) のような事例では *comp. as* 節が主節に対する談話標識・語用論標識的な要素になっている。また、これらの用法の分布としては、*sound* 構文・*seem* 構文に共通して (6) のような用法よりも (7) のような談話・語用論標識的用法の方が高頻度で観察されるようである。これは、次節で見る補語の特性と関係がある。

4.3 語用論的分析

4.3.1 語用論的機能

本節では、*comp. as it SEEMs* 構文の語用論的機能について考察する。

前節では、否定的評価に類する補語に大きな偏りがあり、特に想定・期待に反する評価・判断を表す補語が大きな割合を占めるという傾向が示された。補語におけるこの特徴的な分布傾向は、当該構文の語用論的機能に深く結びついている。当該構文には想定・期待に反する評価・判断の意味となる補語に偏りがあると述べたが、これらの表す評価・判断は、一般的に忌避される類のものが典型的であると思われる。ここでは、その性質を「心理的抵抗感」と呼ぶ。

表 5. 主な否定的価値基準と心理的抵抗感をもたらす諸要因

| 価値基準 | 心理的抵抗感をもたらす諸要因 | 補語の具体事例 |
|--------------|----------------|--|
| [-Affect] | <悲観><不快><恐怖> | <i>depressing, sad, horrifying, ...</i> |
| [-normality] | <意外><異常><奇妙> | <i>strange, crazy, odd, incredible, ...</i> |
| [-veracity] | <信憑性の薄さ> | <i>improbable, impossible, unlikely, ...</i> |
| [-propriety] | <辛辣><苛烈><非情> | <i>harsh, unfair, cruel, cold, ...</i> |
| [-impact] | <陳腐><凡庸> | <i>corny, cliché, clichéd, ...</i> |
| [-balance] | <非常識><不合理><滑稽> | <i>silly, sick, absurd, ridiculous, ...</i> |

当該構文において、これらはすべて談話において話し手の主張の伝達を阻害しうる要素と解釈される。それぞれの心理的抵抗感は、発話における悲観的な内容や、ぞっとするような内容 ([*-Affect*])、おかしい、突飛な内容 ([*-normality*])、ありそうもない話 ([*-veracity*])、辛辣な内容や言葉遣い ([*-propriety*])、よくある話 ([*-impact*])、ばかげている話 ([*-balance*]) といった評価や判断に密接に関わるものである。もちろん、日常の会話やテキストにおいて、こういった聞き手の反応をあえて狙って内容や表現方法を選択することは多々ある。その一方で、自分の主張をストレートに伝えるべき場面では、自分のおこなう主張と潜在的な聞き手の反応との間で葛藤が生じることもある。当該構文には、話し手の導入する発話内容（主張）に伝達が阻害されうる要素が含まれる際に、話し手の想定する聞き手の解釈を予告することでその状況を緩和するという機能がある。つまり、聞き手が自分の発話をどう受け取るかを話し手が積極的に読み込んで、衝突や不和を回避するという間主観的な配慮が含まれている。

また、文中の *comp. as* 節が生起する位置については特に主節に先行するか後続するかが問題となる。大橋 (2013) の分析を参考に COCA の事例を文頭・文中・文末の 3 種類に分類した。

(8) a. 文頭 : Strange as it sounds, his children had no idea their father was in prison ...

b. 文中 : One of the reasons they don't know it is that there's a thread in our culture, as strange as it sounds, that making money is bad.

c. 文末 : And, you know, once again, we really appreciated the ice cream, strange as it sounds.

(COCA)

表 6 のように sound 構文、seem 構文ともに同様の結果となり、文頭位置が 2/3 以上と最も高い割合を示した。

表 6. 文中の comp. as 節の位置

| | 文頭 | 文中 | 文末 | 合計 |
|-----------------------|-------------|------------|----------|-----|
| comp. as it sounds 構文 | 136 (66.9%) | 61 (30.0%) | 6 (2.9%) | 203 |
| comp. as it seems 構文 | 64 (68.8%) | 26 (28.0%) | 3 (3.2%) | 93 |

多くの研究が示唆するように、談話標識・語用論標識は文頭位置に生起する傾向がある (cf. Brinton 1996: 33)。したがって、この結果も当該構文が談話機能を持つ固定的な表現として慣習化していることを示唆しているといえる。

4.3.2 comp. as 構文と推論動詞

当該構文に生起する SEEM タイプの動詞の偏りについては、(i) 主体性 (subjectivity) の度合いと (ii) 動詞の意味の観点から動機づけることができると思われる。

まず、(i) 主体性に関しては、SEEM タイプの 7 種の動詞は推論や知覚に基づく推論を意味する動詞タイプであり、そのうち、嗅覚動詞 smell, 味覚動詞 taste, 触覚動詞 feel は主体化の度合いが相対的に低い。その他の seem, appear, sound, look はより抽象的な推論を表す意味に拡張しており、そのことは補文構造等にも現れる。

SEEM タイプの動詞の中で、上記の 4 つの動詞 seem, appear, sound, look はいずれも、

意味や補文構造の差こそあれ、推論の意味を発達させている。これらの動詞はいずれも主体化に基づく構文変化を経ている。それ以外にも、look の seem への接近、look と sound における補文構造の類似 (谷口 2005; Gisborne 2010) 等がしばしば指摘される。これらのことから、comp. as 構文に生じた場合でも、同様の分布・慣習化を見せ、同様の用法を発達させていたとしても一見不思議ではない。しかし実際は、現代アメリカ英語の事例やその頻度が示すように、look 構文と appear 構文では comp. as it Vs という形式自体は確認されるものの、談話的用法の発達には sound 構文と seem 構文に偏りがある。こういった動詞構文間の相違には、(ii) 動詞の意味が関わっていると思われる。

look や appear は推論の中でも、より視覚的証拠に基づく印象や推論の意味を有している (cf. Austin 1962; 谷口 2005) とされる。それに対し、seem は特定の感覚モダリティに限定されない、推論を表すより一般的な動詞である。また、聴覚動詞 sound は、聴覚的証拠に基づく印象や推論の意味を発達させており、物理的な音声から得る印象から言語表現・発話内容の意味解釈に至るさまざまな聴覚的印象をコード化する。当該構文においても、話し手がおこなう発話の聞こえ方に関わるさまざまな評価・判断の叙述を生んでおり、補語の意味タイプの豊富さにも表れている。推論の意味は、前述した先行発話・後続発話に含まれる潜在的な心理的抵抗感を読み込みと深く結びついており、話し手の懸念や配慮が表れる。これらの動詞構文ごとの慣習化の差異は前節までの議論と整合する。

4.4 構文変化

4.4.1 現代アメリカ英語における構文変化過程

Yule (1996) では、ヘッジ (hedge) の例として may が共起する形式の譲歩構文が挙げられている。

(9) This may sound like a dumb question, but ...

(Yule 1996)

(9) は CPVC に *may* が生起している構文である。同様に、*comp. as* 構文でも法助動詞 *may* が生起する事例がみられる。

(10) *As strange as it may seem ... / Strange as it may seem ...*

(Lampert 2011; 表記を一部修正)

(10) について、Lampert (2011: 15) では *seem* 構文に法助動詞 *may* が共起する例とのみ述べられている。

本節では、アメリカ英語の史的コーパスである *Corpus of Historical American English* (COHA) を用いて、1810 年から 2000 年までの *comp. as it SEEMs* 構文、*comp. as it may SEEM* 構文、*comp. as it might SEEM* 構文におけるマイクロ構文のトークン頻度の変化を調査する。

表 7.では、各構文の粗頻度の変遷が 10 年刻みで示されている（10 例以上の事例が観察される期間については、数値に強調を施している）。

表 7. COHA における各 comp. as 構文の粗頻度 (1810-2000)

| comp. as it V | 1810 | 1820 | 1830 | 1840 | 1850 | 1860 | 1870 | 1880 | 1890 | 1900 | 1910 | 1920 | 1930 | 1940 | 1950 | 1960 | 1970 | 1980 | 1990 | 2000 | TOTAL |
|---------------|------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------|-----------|-----------|-------|
| sounds | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | 0 | 1 | 1 | 2 | 4 | 3 | 2 | 2 | 4 | 8 | 7 | <u>10</u> | <u>11</u> | 58 |
| seems | 1 | 1 | 2 | 6 | 4 | 9 | 8 | 4 | 7 | 5 | <u>12</u> | 3 | 3 | 8 | 9 | 6 | 8 | 3 | 6 | 8 | 113 |
| appears | 0 | 3 | 4 | 1 | 0 | 3 | 1 | 0 | 2 | 1 | 1 | 0 | 0 | 1 | 1 | 1 | 3 | 0 | 0 | 0 | 22 |
| looks | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 4 | 1 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 10 |
| may sound | 0 | 1 | 2 | 2 | 1 | 0 | 1 | 1 | 1 | 1 | 4 | 8 | 4 | 2 | 5 | 2 | 2 | 4 | 7 | 5 | 53 |
| may seem | 2 | <u>25</u> | <u>31</u> | <u>45</u> | <u>38</u> | <u>50</u> | <u>53</u> | <u>48</u> | <u>37</u> | <u>29</u> | <u>51</u> | <u>31</u> | <u>40</u> | <u>26</u> | <u>22</u> | <u>16</u> | <u>14</u> | 6 | <u>12</u> | <u>13</u> | 589 |
| may appear | 2 | 5 | <u>28</u> | <u>20</u> | <u>17</u> | <u>13</u> | <u>16</u> | <u>14</u> | <u>12</u> | 6 | <u>12</u> | 9 | 3 | 0 | 2 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 161 |
| may look | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| might sound | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 3 |
| might seem | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 2 | 0 | 0 | 2 | 2 | 2 | 2 | 4 | 2 | 0 | 3 | 3 | 3 | 1 | 5 | 33 |
| might appear | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 |
| might look | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

表 7. に示されるように、マイクロ構文の観点では、comp. as it may seem 構文の事例が高頻度で観察される。このことから、少なくとも 19 世紀以降、comp. as it may seem 構文がプロトタイプとして分布していたようである。また、マクロ構文の観点では、may が共起する SEEM タイプの comp. as 構文 (comp. as it may SEEM 構文) がより早期から慣習化しており、その後、may が共起しない SEEM タイプの comp. as 構文 (comp. as it SEEMs) が増加してきたようである。より詳細には、19 世紀には comp. as it may seem 構文および comp. as it may appear 構文の事例が一定の頻度で出現していたが、20 世紀初頭頃になると、appear 構文 (comp. as it may appear 構文および comp. as it appears 構文) の事例がかなり減少していることがみてとれる。

下表の COCA の comp. as it SEEMs 構文、comp. as it may SEEM 構文、comp. as it might SEEM 構文の事例の粗頻度と合わせて考えると、20 世紀までは comp. as it may seem 構文および comp. as it may appear 構文の事例が他の構文を牽引していたが、このうち comp. as it may seem 構文のみ一定の頻度を維持しており、comp. as it sounds 構文およ

び *comp. as it may sound* 構文の事例が徐々に増加し、現代英語で慣習化してきたとみ
 るのが妥当と思われる。

表 8. COCA における各 *comp. as* 構文の粗頻度

| construction | tokens | construction | tokens | construction | tokens |
|----------------------------|--------|-------------------------------|--------|---------------------------------|--------|
| <i>comp. as it sounds</i> | 203 | <i>comp. as it may sound</i> | 102 | <i>comp. as it might sound</i> | 16 |
| <i>comp. as it seems</i> | 93 | <i>comp. as it may seem</i> | 186 | <i>comp. as it might seem</i> | 36 |
| <i>comp. as it appears</i> | 10 | <i>comp. as it may appear</i> | 8 | <i>comp. as it might appear</i> | 2 |
| <i>comp. as it looks</i> | 4 | <i>comp. as it may look</i> | 0 | <i>comp. as it might look</i> | 1 |
| <i>comp. as it feels</i> | 3 | <i>comp. as it may feel</i> | 1 | <i>comp. as it might feel</i> | 1 |

上位構文である CPVC と *seem* 構文の構文発達過程を考慮すると、この見立ては妥当
 なものと思われる。前章でも述べたように、CPVC の構文化は *seem* 構文の類推によ
 り促進されたという背景があり、このことは *comp. as it SEEMs* 構文にも当てはまると
 思われる。

comp. as it SEEMs 構文の場合、*comp. as it MAY seem* 構文が構文変化の初期のプロ
 トタイプとして出現していた。それに続いて、典型的な CPVC が *seem* 構文の類推に
 より発達したのと同様に、CPVs の *comp. as* 構文が増加してきたようである。それ以
 降、現代英語にかけて、当該構文における語用論的機能と好相性である *sound* 構文が
 台頭してきたのであろう。

comp. as it may SEEM 構文に生起する *may* は *speech-act modal* (Sweetser 1990: 70)
 といわれる。

(10) a. He may be a university professor, but he sure is dumb.

b. There may be a six-pack in the fridge, but we have work to do.

(Sweetser 1990: 70)

Sweetser (1990) では、(10a) は “I admit that he’s a university professor, and I nonetheless insist he’s dumb.” に対応する意味を持つと述べられている。こういった事例の主節・従属節間の関係は、一般的な譲歩の関係である “although p, q” を表す。また、Palmer (2001: 31) も同様の may の用法に対して「譲歩」の用語を当てている。いずれも、認識的モダリティを表す法助動詞の may の用法とは異なるものとして分析されている。

4.4.2 譲歩構文と間主観性

譲歩構文に関して、一般に、話し手・聞き手の観点の読み合いが基盤にあり、本質的に相互行為的 (Couper-Kuhlen and Thompson 2000; König and Siemund 2000) 、間主観的 (Traugott and Dasher 2002; Verhagen 2005) な性質をもつ営みであるとされる。Couper-Kuhlen and Thompson (2000) は基本的な譲歩 (cardinal concession) は二者間の相互行為が基盤となっていることを指摘している。しかしながら、本研究における comp. as it SEEMs 構文は話し手自身の先行発話・後続発話に対してなされるという点で基本的な譲歩構文とは異なる。

また、譲歩構文について、構文変化との関連では、間主観化 (intersubjectification) という現象の存在が指摘されている (Traugott 2003)。

(11) Actually, I will drive you to the dentist.

(Traugott 2003: 129)

ここでの actually は、後続する話し手の聞き手に対する申し出 (歯医者に連れて行くこと) を聞き手が断る可能性への配慮を表している。聞き手の考えを想定し、それを是認しつつ、自分の主張を示す用法であり、この点で comp. as it SEEMs 構文の意味機能に通じるものと思われる。Traugott (2003) では、間主観化は主観化 (subjectification) の後に生じると仮定されている。

(12) non-subjective > subjective > intersubjective

(Traugott 2003)

第3章で述べたように、CPVCの成立には主体化が関わっている。comp. as it SEEMs 構文の場合、CPVCが主体化によって構文化した後に、comp. as 構文との相互作用の結果として慣習化が進展したようである。このことを考慮すると、comp. as it SEEMs 構文の発達も間主観化の一種である可能性がある。

現代英語における comp. as it SEEMs 構文の間主観的な構文変化を示唆する事例として、COCA や The Corpus of American Soap Operas (SOAP) といったコーパス上では、以下のような事例が観察される。

(13) a. I am sorry, Jamie, as cold as it sounds, that's exactly what you've got to do.

b. There's a lot to worry about. I'm afraid as difficult as it sounds, all we can do right now is wait.

(SOAP)

(14) Biologists have an easier task before them in making maps of all living organisms than faced those early cartographers because, as surprising as it sounds to a nonscientist, the genes of nearly all living organisms are almost identical.

(COCA)

(15) As a most striking point about this particular mimicry, Roy notes that these fungal pseudoflowers do not resemble true flowers of their host plant, *A. holboellii*. Rather, they mimic the yellow flowers of other neighboring plant species, particularly buttercups of the genus *Ranunculus*. In other words, and strange as it sounds, fungal infection induces plants to grow in such a way that they mimic flowers of other, co-occurring species.

上記の事例はそれぞれ、I'm sorry や I'm afraid といった後続の発話に望ましくない内容の存在を合図する表現が共起している事例 (13)、because 節中で詳細な説明を展開する直前に用いられている例 (14)、パラフレーズによる追加説明がおこなわれている事例 (15) である。これらの事例における comp. as it sounds 構文はいずれもメタコメントとして用いられており、対人関係的効果を有している。

このように、comp. as it SEEMs 構文が他の comp. as 構文と異なり、広義の譲歩用法あるいは間主観的な対人関係機能に特化したのは、本節までに述べたそれぞれの構文が持つ間主観的側面に基づいていると思われる。

また、本研究の他のデータも間主観性の反映を示唆している。先述した comp. as it SEEMs 構文の補部における想定・期待に反する評価・判断を表す意味への偏りは sound 構文および seem 構文に顕著であり、be 構文では同様の分布はみられない。この理由のひとつは、be 構文がより客体的であるのに対し、sound 構文および seem 構文は（間）主観的であるためである。

4.5 まとめ

第4章では、SEEMタイプの動詞をとる comp. as 構文の特異性に関して、意味的・談話的・語用論的観点から記述・考察をおこなった。

共時的分析では、COCA から収集した事例をもとに、主節・従属節間の関係の観察から、狭義の譲歩的・対立的な用法だけでなく、談話・語用論標識的な用法が発達していることが示唆された。具体的には、当該構文では、話し手の想定する聞き手の解釈を予告することで、その状況を緩和するという機能がある。さらに、アプレイザル理論の価値基準を援用した補語の分析の結果、高頻度で観察される否定的評価を表す補語は話者の心理的抵抗感を表しており、上記の談話・語用論的用法に密接に関わっていることが明らかとなった。

また、COHA のデータに基づく通時的分析から、この構文の発達は間主観化の一種であることが示唆された。

第5章 定形節補文を伴う have 構文の分析

第5章では、have 定形節補文構文によるエビデンシャル方略についての汎時的分析をおこなう。have it that 構文と have it PP that 構文の構文化の過程に迫り、構文間の関連を記述するとともに、英語のエビデンシャルティへの理論的示唆として、英語の伝聞情報構文の背後に存在する非人称化というエビデンシャル方略を示す²⁰。

5.1 定形節補文を伴う have 構文

定形節補文を伴う have 構文は have 構文全体のネットワークの中でも特異的な補文構造をとり、意味論的にも特徴的な振る舞いを見せる。この構文に関しては最近に至るまでほぼ研究がおこなわれていない。先行研究は現代英語を対象とする共時的分析に基づく記述がほとんどであり、通時的な構文変化については考察されていない (cf. Brugman 1988; 1996; 五十嵐・本多 2014; Ureña Gómez-Moreno 2014)。

- (1) a. Rumor has it that they aren't hostages, but I think they are.
- b. In fact, I have it from a reliable source that you've been discussing Mr. Cerino's case in detail.
- c. I have it on good authority that Cormac lives on Coffin Avenue.
- d. ... and then you have it on tape that I said that.
- e. They have it in their logs that I came here last night and retrieved my property with this.

(COCA)

have 構文の補文構造について詳細に議論した Brugman (1996) では、have it that 構文

²⁰ 本章の内容は河野 (2017, 2019), Kono (2019) に基づく。

(以下、HITC と表記) の構造が以下のように示されている。

(2) [_s NP₁ [_{vp} HAVE it [_{s'} that [_s NP₂ XP]]]]

(ibid.: 48)

have 構文の構文ネットワークにおいて have の直後に定形節補文を伴う構文 (*[have φ that (p)]) は慣習化していないが、当該構文ではいわゆる外置 (extraposition) の構造で that 節を伴っている。また、(2) の it は伝統的に虚辞とされてきたもので、当該構文では義務的に生起する。Brugman (1996) では have it that 構文がメンタルスペース理論 (Fauconnier 1985) におけるスペース導入表現 (space builder) として機能すると述べられている。

また、Brugman (1988, 1996) では HITC は話し手の命題に対する疑念を表すと述べられているが、厳密には HITC は構文的意味として話し手の認識的スタンスを指定するものではないようである。五十嵐・本多 (2014) および Ikarashi (2015) では、Brugman (1988, 1996) の記述に対する反例として下記の事例が示されている²¹。

(3) [A と B はリンカーンに関するドキュメンタリー映画について話している。ただし B はその映画を見ていない]

A: I just watched a really interesting movie about the life of Abraham Lincoln.

B: Ahh, the poor guy was shot right in the middle of a restaurant.

A: Restaurant?! The movie has it that he was shot in a theatre.

(五十嵐・本多 2014; Ikarashi 2015: 18)

主語 the movie はリンカーンに関するドキュメンタリー映画であり、話し手 A は話し

²¹ なお、五十嵐・本多 (2014) および Ikarashi (2015) では、この事例は話し手が HITC に含まれる命題を信じている場合の事例として挙げられているが、主語の名詞句の特性についても示唆を含む。この点については後述する。

手 B の注意を、事実に基づく内容の情報源に向けさせている (Ikarashi 2015: 18)。つまり、この事例では、*the movie* に対しての話し手 A の疑念などは解釈しづらい。このように、あえて認識的スタンスとして言うならば、HITC で表されるスタンスはあくまで中立的であるといえる。

また、情報構造の観点では、聞き手も知っている情報を表している事例も存在する。下記の事例は *as we know* が共起しており、話し手・聞き手両者の知識に限らない一般的な知識にアクセスしている。

(4) Well, as we know, tradition has it that management and labor are adversaries;...

(COCA)

また、主語位置に生起する名詞句に一定の傾向がみられることが指摘されている。Ureña Gómez-Moreno (2014) はコロストラクション分析 (collostructional analysis) により、当該構文の主語名詞句は不特定の・非有生的な名詞 (e.g. *rumour, legend*) が典型的であると記述している。特定の・有生的な主語名詞句が主語に生起する事例も観察されるが、相対的に低頻度である (Ureña Gómez-Moreno 2014)。人物名など、有生名詞が主語位置に生起する事例は、その人物の作品を表すメトニミー (metonymy) 的用法としての解釈とされる (Brugman 1996)。

五十嵐・本多 (2014) は HITC とエビデンシャリティとの関連を明示的に指摘した研究である。五十嵐・本多 (2014) は機能主義的観点から、(i) エビデンシャリティを表す構文である点、(ii) 主語名詞句が *that* 節の情報の情報源である点、(iii) *that* 節の命題が伝達を中心である点などを記述している。また、HITC は所有者を主語とする (5) のような「*have it from X that* 構文」から形成されたという仮説を提示している。

(5) I have it from Tom that we'll be paid for our work next week.

(ジーニアス英和辞典第 4 版, 五十嵐・本多 2014: 45)

この仮説では、他動詞構文から中間構文が形成される際の“cutting”という現象 (Goldberg 1995; 57) により have it from X that 構文の SOURCE (“from X”) が削除され、主語位置に生起したと仮定され、HITC が (5) の「have it from X that 構文」から “cutting” により主語位置の POSSESSOR が消失し、空所となった主語位置に SOURCE が現れることで HITC が形成された可能性がある」と述べられている。

(6) a. ~~POSSESSOR~~ have it from SOURCE that S

b. SOURCE have it that S

(五十嵐・本多 2014 ; POSSESSOR の取り消し線表記は原文に基づく)

Goldberg (1995) における cutting は英語の中間構文やドイツ語の非人称受身構文にみられ、参加者が「削除」される現象とされる。cutting では、中間構文における動作主などが削除される参加者として典型的である。しかしながら、この現象が「have it from X that 構文」(本研究における HIPTC) における所有者 (POSSESSOR) でも適用されるかどうかは明らかではない。

先行研究におけるエビデンシャルとしての HITC という記述や機能主義的観点に基づく記述はおよそ妥当なものと思われる。しかしながら、先行研究では HIPTC に関する記述・説明は十分なされていないとはいえず、HITC と HIPTC の構文間の関係や差異が明確でない。

また、先行研究はいずれも現代英語における共時的研究である。HITC は情報源を主語とする定形節補文であるが、have 構文のネットワーク (cf. Brugman 1988) の中でも意味的・統語的に特異的である。しかしながら、どのような過程を経て構文が成立してきたかという点について詳細に議論している研究は管見の限り見当たらない。また、これらの構文の成立に関する (6) の仮説の妥当性にも議論の余地がある。

本研究では、通時的側面を含めた汎時的分析をおこない、HITC と HIPTC の比較・

検討をおこなう。さらに、他の構文との連続性を示すとともに、英語におけるエビデンスシャル方略への示唆を述べる。

5.1.1 have it that 構文 (HITC)

5.1.1 節、5.1.2 節では、Corpus of Contemporary American English (COCA) から HITC および HIPTC の構文の事例を収集し、観察した結果得られた事実を述べる。

まず、HITC の情報源の特性を記述するため、主語名詞句の傾向について確認する。COCA から [N + {have, has, had} it that] の事例を網羅的に抽出したところ、それぞれ *have it that* (n=16), *has it that* (n=546), *had it that* (n=119), 合計 681 例が得られた。主語名詞句のトークン頻度から、HITC では以下のような抽象名詞句が主語位置に生じやすいという傾向が示された (括弧内の数値はトークン数を示す)。(7) は典型的な主語名詞句の 3 分類、(8) は具体事例である。

- (7) a. 噂話類 : rumor (143), word (40), story (19), report (8), gossip (7), scuttlebutt (6),
whispers (2), ...
- b. 伝承類 : legend (233), lore (32), tradition (21), myth (5), history (4), folklore (3), tale
(2), ...
- c. 社会通念類 : wisdom (37), theory (14), speculation (4), accounts (3), cliché (3),
argument (2), ...
- (8) a. Rumor has it that they aren't hostages, but I think they are.
- b. Legend has it that when George Washington was a boy, he chopped down a cherry tree
on his father's farm.
- c. Conventional wisdom has it that business and pleasure don't mix.

(COCA)

(7a) は噂話に関する概念であり、その中でも、量的な観点で *rumor* が典型例とみなせる。(7b) は伝説や言い伝えなど伝承にまつわる概念で、*legend* が典型例である。(7c) は社会通念や学説等の概念で、(7a, b) と比較するとやや頻度が低い。社会通念類の特筆すべき点として、*wisdom* や *theory* などは修飾語句として「慣習的な」「一般に共有された」のような意味を表す形容詞を含む事例 (e.g. *conventional wisdom, common belief, general understanding*) が高頻度で観察されるという点が挙げられる。噂話は伝聞情報のひとつで、特定の個人による発言というよりも、不特定多数の話者に共有されている情報であることを想起させるものである。また、伝承や社会通念はある共同体における慣習的な知識を表す名詞句である。この主語名詞句の特性は、後述する認知構造と深く関わる。

先述の主語位置に *movie* が生起する事例 (3) についても、同様の特徴を備えていると思われる。以下、(3) を再掲する。

(3) [A と B はリンカーンに関するドキュメンタリー映画について話している。ただし B はその映画を見ていない]

A: I just watched a really interesting movie about the life of Abraham Lincoln.

B: Ahh, the poor guy was shot right in the middle of a restaurant.

A: Restaurant?! The movie has it that he was shot in a theatre.

(五十嵐・本多 2014; Ikarashi 2015: 18)

主語位置に *movie* が生起する HITC の事例は、管見の限り他の先行研究では扱われておらず、また、コーパスからも観察されなかった。つまり、映画を表す名詞句は HITC に生起する主語名詞句の周辺的事例であり、上記の談話文脈がなければこの事例は容認度が相対的に低くなると思われる。しかしながら、この事例が容認される理由については五十嵐・本多 (2014)、Ikarashi (2015) では言及されていない。²²

²² 五十嵐 (2015, p.c.) によると、この事例は作例をもとに英語母語話者に容認度判断を依頼し

この事例の場合、「リンカーンに関するドキュメンタリー映画」という文脈が容認性に影響を与えていると思われる。リンカーンは言うまでもなく誰もが知っている歴史的偉人であり、さらに、ドキュメンタリー映画はフィクションの映画作品とは異なり、(一定の脚色はあれ) 基本的に史実や客観的記録に基づくものである。つまり、この事例の *the movie* には創作物としての側面はあるものの、同時に、一般に知られている慣習的な知識が反映されているという側面も併せ持っているといえる。したがって、この事例の *the movie* は文脈上、HITC の典型的な主語名詞句の意味カテゴリーに概念的に接近していると考えられ、そのため、周辺的な主語名詞句との共起ではあるものの、容認度が上がっているものと思われる。

5.1.2 *have it PP that* 構文 (HIPTC)

先述のとおり、HITC に対応する所有者主語構文として先行研究では *have it from NP that* 構文のみが扱われている。本研究では (i) *have it from N that* だけではなく、コーパスから収集された (ii) *have it on N that*, (iii) *have it in N that* も同様に HIPTC [N *have it PP that* (p)] のマイクロ構文として分析対象とする。以下は (1b, c, d, e) の再掲である。

- (9) a. In fact, I have it from a reliable source that you've been discussing Mr. Cerino's case in detail.
- b. I have it on good authority that Cormac lives on Coffin Avenue.
- c. ... and then you have it on tape that I said that.
- d. They have it in their logs that I came here last night and retrieved my property with this.

have it on N that に関しては、Brugman (1996: 54) で HITC と *have it on good authority that* (p) との関連が触れられているが、構文間の差異については詳細に述べられてい

た際に、(3) のような文脈があれば容認可能であると指摘されたという。

ない²³。しかしながら、*on good authority* のように *on*-句をとる HIPTC は情報源の意味を表すものであり、HIPTC の下位構文の中で、*from*-句をとる HIPTC と同様にコーパス上で特に高頻度で観察される。

以下、共起する前置詞句ごとに特徴を見ていく。まず、(9a) のような (i) *have it from N that* 構文の前置詞句で表される情報源の意味に関する特徴として、信頼度の高い情報源 (e.g. *from a {reliable, knowledgeable} source*) や複数の情報源の存在 (e.g. *from {two, several} sources*)、特定の人物から直接得た情報 (e.g. *from the editor himself*) が表される傾向が強いことが挙げられる。

また、(ii) *have it on N that* 構文の顕著な特徴として、(9b) のように *on*-句内の名詞句が“形容詞 (e.g. *good, certain*) + *authority*” となっている事例が高頻度で観察される。この種のコロケーションは、定型表現として特にチャンク化しているものと思われる。また、(9c) のように、*tape, videotape* 等、情報記録媒体が動かぬ証拠となっているものもみられる。

(iii) *have it in N that* については、情報源に関わる HIPTC の下位構文のうち現代英語で最も頻度が低いが、(ii) *have it on N that* 構文と同様、*in N* が情報記録媒体となっているものがみられる。以上から、HIPTC の全体的な特徴として、信頼できる情報源から得た情報や、情報記録媒体等のいわば物的証拠に基づいて情報を保持していることが表される傾向がある。

次に、HIPTC の語用論的機能を示す。以下の例では、*I heard, had it on that* ([*the news*]), *they said* 等が並列的に用いられている。

(10) ... and then I heard on the news — you know, I had it on that ([*the news*]) ... And they

²³ 以下、Brugman (1996: 54) より引用する。

“Adele Goldberg has pointed out that the collocation *I have it on good authority that* S shares the critical syntactic elements of this construction, but differs both in lexical conditions (where NP₁ is animate, and typically first person, and also in that a phrase like *on good authority* is required) and in its constructional semantics.” (ibid.: ft18)

said, Tejano star Selena was shot.

(COCA)

この例の中で用いられている主節表現はいずれも伝聞情報を導入する構文である。この点においては、特に HIPTC と *hear PP that* 構文は類似した機能をもち、Fraser (1996: 183) における語用論標識の分類における「伝聞標識 (hearsay marker)」に類すると考えられる。これらの違いは、(11) のように、知覚動詞 *hear* 構文では必ずしも前置詞句を必要としないのに対し、HIPTC では情報源を示す前置詞句が必須である。

(11) a. I heard it (on the news) that Tejano star Selena was shot.

b. I had it *(on the news) that Tejano star Selena was shot.

また、先述したとおり、HIPTC では前置詞句で表される情報源の信頼性に関する評価が示されたり、情報記録媒体が情報の動かぬ証拠として示されている傾向がある。以下の (12)' では、アメリカ合衆国の移民政策法案 (“DREAM Act” 「ドリーム法」) に対して自分の立場を明確にしてない Romney 氏が、実際は過去にそれに反対していたことを話し手が知っており、なおかつそれがテープに収められていることが表されている。つまり、ある情報の根拠としてテープの録音という証拠が残っていることが示される。

(12) BEGALA: He ([Mr. Romney])'s somehow ... annoyed both the left and the right today, because he gave that mealy-mouthed, kind of cowardly statement where he didn't take a position. But we know, because we have it on tape. He came on CNN. We had that Tea Party debate. ... And he said this. That only attracts people to come here and take advantage of America's great beneficence. So, we know he's bitterly opposed to the DREAM Act. But he didn't say it today.

(12) BEGALA: We have it on tape that he's bitterly opposed to the DREAM Act.

((12) に基づく作例)

5.2 通時的分析：HI(P)TC における構文化

本節では、複数のコーパスのデータをもとに構文発達過程を推定する。

事例の収集に用いるコーパスは、通時コーパスである Oxford English Dictionary (OED)、 English Historical Book Collection (EEBO, ECCO, Evans; 以下、EHBC と表記)、 Corpus of Historical American English (COHA) および、現代英語コーパスである BNC (British National Corpus)、COCA (Corpus of Contemporary American English) である。

5.2.1 HI(P)TC における構文化前の構文変化

収集された事例の観察の結果、16 世紀以前は Traugott and Trousdale (2013) における構文化前の構文変化の時期とみられる。その根拠としては、that 節を伴う定形節補文構文としての事例が出現するのが 17 世紀初頭以降であり、また、他の構文と区別しにくい事例が散見される点が挙げられる。そのため、16 世紀は HITC の構文ネットワークが確立前であると考えられる。

先行研究の記述のとおり、現代英語の HITC は非有生的な名詞句が主語位置に生起するものが典型的であるが、16 世紀頃までの “N have it” の事例に生起する主語名詞句には有生・非有生のいずれの名詞句も一定数みられ、分布においても現代英語よりも相対的に偏在性が低い分布となっていたようである。有生名詞句は人称代名詞や著者を表す名詞句などが観察され、(i) 作者・著者を表す参与者的解釈と (ii) 作品を表す無生物解釈の 2 通りの可能性があり、曖昧である。非有生名詞句は聖書や古典、福音書といった特定性の高い事物が高頻度で観察され、現代英語で高頻度である抽象名詞句主語の事例は、この時期にはほぼ観察されない。非有生名詞句の事例は「書物に書かれているように」「文献の記述にあるように」といった意味を表す。

(13) a. And Paul, reciting the psalm, affirms Christ as concerning his manhood to be less than God or less than angels, as some text hath it.

(EHBC, 1533)

b. ... and so these new translations of the english bibles hath it in all places, ...

(EHBC, 1557)

c. The more, because Iulius in the same epistle (as Athanasius hath it) citeth their autoritie for the Councell aboute ...

(EHBC, 1584)

d. Likewise in the olde Testament, the approued Latine text hath such and such speeches, that make for vs, the renowned Greeke text hath it, the Hebrew text hath it: onely their translations haue it not.

(EHBC, 1583)

(13d) のように「特定の個別言語で書かれたテキスト」を表す事例も散見され、*Latin, Greek, Hebrew, Spanish, French* を含む事例や “*vulgar* + 個別言語” といった事例が高頻度で観察されるほか、*translation, version, edition* などの名詞が主語として生じた事例なども高頻度で観察される。

このように、16 世紀以前の “N have it” の事例は概して信仰において重要なテキストを表す名詞句が主語位置に生起する事例が高頻度で観察されるようである²⁴。

16 世紀以前の “N have it” の事例は定形節補文を伴っておらず、主語が抽象名詞句でないという点で現代英語における典型的な HITC の事例とは異なっている。しかしながら、構文化は漸進的な変化であり (Traugott and Trousdale 2013)、さらに、後述す

²⁴ このことはおそらく当時の文化社会的背景が関連していると思われる。教義や教理は一般になんらかのかたちで明文化された上で幾度となく引用され、生活や思想における指針として用いられる。特定の内容が聖典などの個別具体的な記述 (情報源) に基づくものであることを他者に伝達することは極めて重要な言語活動であるため、引用的な事例が高頻度で使用されていたことは想像に難くない。

る当該構文の発達過程からも、この時期に高頻度で観察される引用的構文は HITC の祖としてみなすことができる。

さらに、16 世紀には以下の事例のように、it を介在させず直接 that 節を後続させている have 構文 ([have φ that (p)]) の事例も観察される。

(14) Yea the text hath that they accounted such abstinence inter necessaria, in the nombre of those things that were necessary to be obserued, euen as to absteine from fornication.

(EHBC, 1564)

現代英語では have は直接定形節補文を伴わない。このような事例の混在の事実も、この時期が構文化前の構文変化の段階であることを反映しているものと思われる。

5.2.2 HI(P)TC における構文化

17 世紀初頭には定形節補文を伴う HIPTC・HITC の両構文が観察されるようになり、構文化が進展した時期であると推定される。以下は、17 世紀に観察される HIPTC および HITC の事例である。

(15) a. Heathens had it from the Patriarches, that a man should come, ...

(EHBC, 1604)

b. He had it from a very good hand, that the King of Poland had sent an Ambassador.

(OED, 1662)

c. It is reported (and I have it from a very good hand) that when the old Archbishop of St. Andrews, came to take his leave of the King, ... he desired leave to give his Majesty three Advertisements before his going.

(EHBC, 1668)

d. They have it ... from his own mouth.

(OED, c1680)

e. ... I should not instance in Fact, but that I have it on good Authority.

(EHBC, 1689)

(16) ... the Text hath it, that Wrath is gone out from the Lord, ...

(EHBC, 1626)

HI(P)TC の定形節補文構文への変化にあたって、(i) it の指示性の変化（希薄化）と (ii) それに伴う [have it] のチャンク化が生じたことが重要な要因であったと思われる。

(17) a. 構文変化が生じる前の “N have it” : [N [have] [it]]

b. 構文変化の過程における “N have it” : [N [have] [it]] または [N [have it]]

(17a) の [N [have] [it]] は、構文化に至るまでの時期における、目的語位置を占めていた it の指示が明確に存在する捉え方を表している。この時期には、述語動詞 have と目的語 it が構成的に解釈されるのみであったと考えられる。

一方、(17b) [N [have it]] は、構文化前の構文変化を反映する捉え方を表している。17 世紀初頭頃、“N have it” が定形節補文構文に類する意味を喚起する文脈で繰り返し使用されることによって他の構文との類推が生じ、補文導入節を構成する [have it] のチャンクの一部としての（非人称の）it の解釈を誘発したと考えられる。構文化前の構文変化では形式と意味のミスマッチが生じるとされる。当該構文の場合、“N have it” の it の指示の曖昧性による形式・意味間のミスマッチが生じているとみられる。つまり、it の指示対象が明確な場合ではより典型的な動詞 have+ 直接目的語 it とした解釈が生じる一方、it の指示対象が不明確な解釈では [have it] で補文導入節 (complement-taking clause) を構成するチャンクとしての解釈が生まれていると考えられる。

それでは、定形節補文構文への変化を生じさせた他の構文との類推とはどのような

ものであったか。初期近代英語期には複数のタイプの動詞で [V it that (p)] の形式が観察され、目的語位置の非人称 *it* (cf. “Anticipatory *it*” (Visser 1963-73)) を含む定形補文節補文構文として存在していた。16 世紀には少なくとも *know*, *perceive*, *prove*, *doubt*, *wit* (廃語) といった認識・思考動詞や *mean*, *command* といった発話動詞の事例が観察される (Visser 1963-73: 464)。

(18) a. I take it your owne business calls on you.

(OED, 1596)

b. Publish it that she is dead.

(OED, 1599)

[V it that (p)] の構文の中でも、(18a) の *take it that* 構文は HITC 同様、*it* が義務的に生起する定形節補文構文である (I take *(it) that (p).)。それだけではなく、*take it that* 構文は推論や伝聞といった間接的なエビデンシャルに関わる意味を表すという点も共通している。したがって、HITC の構文化を促進した可能性がある。

(19) She takes it by tradition from her fellow Gossips, that she must weepe showres vpon her marriage day.

(EHBC, 1615) ²⁵

上記の [have it] や [V it that (p)] の頻度の増加およびチャンク化は、HIPTC, HITC の両方の構文変化に影響を及ぼしたと思われる。そして、17 世紀初頭はこれら 2 構文の定形節補文構文としての事例の出現期ではあるものの、両構文の構文化は一様に進展したというわけではないようである。特に、17 世紀頃の 2 構文の事例と現代英語に

²⁵ (19) のように、情報源が *by*-句で示される用法は他の構文でも観察される (e.g. *seem* 構文: *it seems by his speech that he is drunk.*” (Gisborne & Holmes 2007: 7))

おける 2 構文の事例との類似性の観点について全く異なる様相を見せている。

(20) a. Heathens had it from the Patriarches, that a man should come, ...

(EHBC, 1604)

b. He had it from a very good hand, that the King of Poland had sent an Ambassador.

(OED, 1662)

c. It is reported (and I have it from a very good hand) that when the old Archbishop of St. Andrews, came to take his leave of the King, ... he desired leave to give his Majesty three Advertisements before his going.

(EHBC, 1668)

d. They have it ... from his own mouth.

(OED, c1680)

e. ... I should not instance in Fact, but that I have it on good Authority.

(EHBC, 1689)

(21) ... the Text hath it, that Wrath is gone out from the Lord, ...

(EHBC, 1626)

17 世紀の HIPTC の事例を見ると、既に現代英語の事例と類似する意味論的特徴をもつ事例が現れているのがわかる。具体的には、(20b, c) における PP に現れる情報源 *from a very good hand* や (20e) における *on good Authority* などは、これらの事例が信頼性の高い情報源からの情報を表す傾向が強いことを示しており、この特徴は 5.1.2 節で確認したとおり、現代英語の事例にも顕著にみられるものである。また、*I have it on good authority that (p)* は現代英語で非常に慣習化した事例となっており、かなり固定化した表現といっても差し支えない。これらを鑑みると、HIPTC は少なくとも 17 世紀頃に現代英語に近い事例が出現し、慣習化した後、現代まで残存してきたとみるのが妥当と思われる。

一方、HITC については、現代英語の HITC で典型的である抽象名詞を主語にとる事例は 17 世紀頃にはほぼ観察されない。後述するように、抽象名詞が主語に生起する HITC の事例が典型的な構文になるのは数世紀後になってからである。

このように HIPTC が比較的早期に発達を見せた背景として、先に述べた *take it that* 構文を含む [V it that (p)] の事例の広がり以外に、HIPTC への類推として、前置詞句を含む間接的なエビデンシャルに相当する定形節補文構文の頻度の増加が影響した可能性が高い。(22) はそれぞれ、16 世紀に既に観察される “read PP that”, “hear PP that”, “gather PP that” の例である。

(22) a. We rede in Scripture that some have ben sanctyfyed in their mothers wombes.

(OED, 1530)

b. That all men may hear from the mouth of the depositors and witnesses what is said.

(OED, 1565)

c. I gather from his words, that he condemneth all Churches.

(EHBC, 1590)

(22b) は伝聞を表す *hear* による経験者主語構文である。また、(22c) の *gather* については、評言節研究の Brinton (2008) にも記述がある。Brinton (2008) によれば、*I gather* は「認識・証拠的挿入構文 (epistemic/evidential parenthetical)」として機能するものであり、初期の “*I gather*” 挿入構文の事例は “*as I gather*” として 16 世紀後期に出現したようである。また、(23) のように、情報源を表す *by/from* 句を含む事例が一定頻度で観察され、現代英語における “*I gather*” と同様、伝聞知識を表していたという。

(23) a. So farre as I gather by the substance of your letters.

(OED, 1576)

b. Yet as I gather by my comming forth, / Being then sixe, it cannot now be lesse / Than

halfe an hower past seuen.

(English Drama (Chadwyck-Healey), 1599)

c. Harke, as I gather, / That great Ship was de Castro call'd your Father.

(English Drama (Chadwyck-Healey), 1653)

d. “A strange Alteration indeed!” says Adams, “as I gather from some Hints which have dropped from Joseph”

(English Drama (Chadwyck-Healey), 1742)

(Brinton 2008: 228)

HIPTC の構文化の過程において、前節で述べた引用的な事例の頻度の増加に加え、上記の [V it that (p)] や、前置詞句を含む間接的なエビデンシャルに相当する定形節補文構文の事例の頻度の増加により、その類推から [have it] が補文導入節を形成するチャンクとして変化しつつあったと考えられる。

5.2.3 HI(P)TC における構文化後の構文変化

前節でみたとおり、17 世紀頃には HIPTC の事例が現代英語の事例と同様の特徴を見せており、慣習化に至るペースがより早い。一方で HITC では、定形節補文を伴う構文としての成立後にさらに構文変化が生じている。²⁶

HITC では、17 世紀頃の定形節補文を伴う事例の出現の後、主語名詞句のタイプ頻度の増加が生じている。これは構文化後に発生する構文変化 (Post-Constructionalization Constructional Change) におけるコロケーションの拡大の現象 (ホストクラスの拡大, host-class expansion) であるとみなすことができる。HITC の構文化

²⁶ ただ、HIPTC でも構文化後の構文変化が生じていないわけではない。5.1.2 節でみた (9c, d) の事例は、前置詞句が情報が記録された記録媒体を表している。これらの記録媒体用法は低頻度ながら現代英語に入って出現するようになってきた比較的新しい用法であるため、HIPTC における構文化後の構文変化の現れといえる。

- (9) c. ... and then you have it on tape that I said that.
d. They have it in their logs that I came here last night and retrieved my property with this.

過程におけるホストクラスの拡大は主語名詞句の抽象化にみられる。つまり、17 世紀頃の HITC では典型的に具体的かつ特定のな名詞が主語位置に生起していたが、現代英語に近づくにつれ抽象名詞が生起するようになり、現代英語ではむしろ抽象名詞句が主語の事例が中心的になっている。

ここで、より詳細な議論のために、抽象名詞類の分類として Schmid (2000) の分類を援用する。

Schmid (2000) は *The {thing, problem, truth} is (that) (p)* のような抽象名詞を含む諸構文（貝殻名詞構文）をコーパスによる定量的分析に基づいて網羅的に分析し、600 を超える抽象名詞を生起する構文のタイプや意味の観点から分類している。

表 1. 貝殻名詞構文の 4 形式 (Schmid 2000: 22; Aktas and Cortes 2008: 5; 柴崎 2014: 4)

| Function | Pattern | Abbreviation | Example |
|------------|---|--------------------|--|
| Cataphoric | Shell noun + postnominal clause | <i>N + cl</i> | Mr. Bush said Iraq's leaders had to |
| | Variants: <i>that</i> -clause, | <i>N-that</i> | face the fact <u>that the rest of the</u> |
| | <i>to</i> infinitive-clause, | <i>N-to</i> | <u>world was against them.</u> |
| | <i>wh</i> -clause | <i>N-wh</i> | |
| | Shell NP + <i>be</i> + complementing clause | <i>N + be + cl</i> | The advantage is <u>that there is a</u> |
| | Variants: <i>that</i> -clause, | <i>N-that</i> | <u>huge audience that can hear other</u> |
| | <i>to</i> infinitive-clause, | <i>N-to</i> | <u>things you may have to say.</u> |
| | <i>wh</i> -clause | <i>N-wh</i> | |
| Anaphoric | Referring item + (premod) + shell noun | <i>th-N</i> | <u>(Mr. Ash was in the clearest possible terms labelling my clients as anti-semitic.)</u> I hope it is unnecessary to say that this accusation is also completely |

| | |
|--|--|
| | unjustified. |
| Referring item as subject + <i>be</i> + <i>th-be-N</i> | (<u>I won the freshmen's cross-</u> |
| shell noun (phrase) | <u>country</u> . — Mm.) <u>That</u> was a great |
| | achievement wasn't it? |

Schmid (2000) では HITC は分析対象として扱われていないが、以下のように、当該構文の通時的変化や表されるエビデンシャルティを捉えるのに有効である²⁷。

HITC の主語名詞句の広がりには以下のように捉えられる。17 世紀頃は名詞句が個別具体的な書物・文献を表す Text タイプ (e.g. *text, the Bible, scripture*) や Adage タイプ (e.g. *proverb, axiom, slogan*) に限られていたが、現代英語に近づくにつれ、Myth タイプ (e.g. *myth, legend, tradition*)、Idea タイプ (e.g. *wisdom, theory, belief*)、Rumour タイプ (e.g. *rumour, gossip, whisper*) といった多様な抽象名詞をとるようになった。

(24) Text タイプ : ... the Text hath it, that Wrath is gone out from the Lord, ...
(EHBC, 1626)

(25) Adage タイプ : ... for as our English proverbe hath it, That there is no service like to the
service of a King, ...
(EHBC, 1647)

(26) Rumour タイプ : Yet the current of the village gossip has it, that they are to marry.
(COHA, 1866)

(27) Myth タイプ : Tradition has it that The The Virginian was very popular in the South.
(COHA, 1873)

(28) Idea タイプ : Current belief has it that if on this day the groundhog sees its shadow, there

²⁷ HITC は Schmid (2000) で中心的に分析されている構文ではないものの、Rumour タイプの名詞句が生起する珍しいコロケーション (unusual collocations) のひとつとして言及されている。

“It is the noun *word*, which is used the same way as ‘Rumour’ nouns in such unusual collocations as *word has it that ...*, *word spread that...* and *word went out that*” (ibid.: 146)

will be 6 weeks more of winter; if it does not see its shadow, winter will be soon gone.

(OED, 1948)

Text タイプ以外の抽象名詞タイプである Adage, Myth, Idea, Rumour の4分類は Schmid (2000) に基づいている。

以下の表は通時的データから HITC の各用法の初出年を示したものである。表中の (N have it) は定形節補文を伴わない [(as) N have (has) it] の事例の出現時期を示し、(HITC) は定形節補文を伴う事例 [N have (has) it that (p)] の出現時期を示している。

表 2. HITC における引用的用法と伝聞的用法の出現時期

| | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | (C) |
|-------------------|------|--------|--------|------|--------|-----|
| 【引用的 HITC】 | | | | | | |
| Text (N have it) | 1533 | -----> | | | | |
| (HITC) | | 1626 | -----> | | | |
| Adage (N have it) | | 1614 | -----> | | | |
| (HITC) | | 1647 | -----> | | | |
| 【伝聞的 HITC】 | | | | | | |
| Myth (N have it) | | 1652 | -----> | | | |
| (HITC) | | | | 1866 | -----> | |
| Rumor (N have it) | | | | 1835 | -----> | |
| (HITC) | | | | 1860 | -----> | |

HITC のマイクロ構文である Text タイプ・Adage タイプは 16 世紀～17 世紀のうちに定形節補文を伴う事例が出現しており、相対的に早期に構文化が進んでいる。その一方で、現代英語で典型的なマイクロ構文である Myth タイプ・Rumor タイプの HITC は定形節補文構文としての事例の出現が 19 世紀以降である。より詳細にみると、Myth

タイプは [N have it] の事例自体は 17 世紀には確認できるが、定形節補文構文の事例の出現までかなり時間的隔たりがある。これはおそらく漸進的な構文化の過程を反映していると思われる。まず第一段階として、特定性の高い名詞句の構文が確立し、その後、第二段階として、より抽象的な名詞句の構文へと変化していったことを示唆する。

HITC の主要な Adage, Myth, Idea, Rumour という分類は一見、全く無関係のカテゴリーのように思えるかもしれない。しかしこれらは実際は概念的に近い関係にあり、伝聞情報や社会通念などの慣習的知識に近い概念であるといえる。これらのうち Adage, Myth, Rumour の 3 カテゴリー間については Schmid (2000) にも記述があり、これらはいずれも言語的カテゴリーに属すると述べた上で、「Rumour, Myth は Adage よりも定義しづらい」カテゴリーであると述べているほか、「明確に言語的カテゴリーに属する Adage タイプに対し、Myth タイプは心的ドメインに接近し、発話と思考の間の中間的カテゴリーである」としている (Schmid 2000: 147)。つまり、当該構文に生起する主語名詞のタイプにおける Text > Adage > Myth, Idea, Rumour という出現の順序は、この構文が表す情報源の抽象化の過程を反映しているとみなすことができる。

この主語名詞句におけるホストクラスの拡大についてエビデンシャルリティの観点から再解釈すると、(i) 当該構文の表すエビデンシャルリティの多様性と (ii) 変化の観点について以下のように述べることができる。

まず、(i) エビデンシャルリティの多様性の観点について、HITC は概して伝聞情報の構文として慣習化しており、Aikhenvald (2004) のエビデンシャルの分類における Reported に相当すると思われ、その下位分類である伝聞 (Hearsay)・引用 (Quotative) の両方に類する意味を表しうる。Anderson (1986) は、Aikhenvald (2004) の Reported に相当する分類である “reportive” は少なくとも (a) 伝聞 (hearsay)、(b) 一般的評価 (general reputation)、(c) 伝承・歴史 (myth and history)、(d) 「引用」 (“quotative”; 引用符は原文に基づく) の 4 種類を含むと指摘しており、たとえばアイマラ語 (南米・ア

イマラ諸語) では reportive evidential の類型としてこの 4 種類のエビデンシャルが存在する (Anderson 1986; Hardman 1986)。この種のエビデンシャルの意味は、英語の HITC や、後述する非人称受身構文は伝聞的・引用的エビデンシャルの両者にまたがるカテゴリーの言語化に関わっている。

また、(ii) エビデンシャルリティの変化の観点では、構文化の初期である 17 世紀頃以前は具体的な文献や格言等からの引用的な構文であり、書物や聖典に明文化されている内容や格言・箴言という固定のテキストとして確立している内容を表す構文であったが、現代英語に近づくとつれ、必ずしも明文化されていない伝承や噂話といったより抽象的な情報源に基づく伝聞を表す構文へと広がっていったとみられる。

このように、19 世紀中葉には定形節補文構文としての用法が確立する。さらにその後、20 世紀には評言節としての事例が観察される。特に高頻度の主語名詞句タイプである Rumour, Myth タイプの事例で顕著にみられる。

- (29) a. Mr. Russell, rumour has it, is gathering together a sheaf of our younger poets' verses.
(OED, 1922)
- b. Long, long ago, legend has it, the demigod Maui became incensed with the sun.
(COHA, 1979)
- c. The McDonald's gospel sing has been going for two years and is so popular that, word has it, Wendy's is about to start one too.
(COHA, 2001)

HITC の評言節的用法には、典型的に主語位置の名詞が無冠詞で現れ、補文化辞 that も共起しないという特徴がみられる。このような事例には構文化における形態統語的縮約現象が関わっている。この現象は HITC だけでなく、抽象名詞を主語にとる他の定形節補文構文でも観察される。柴崎 (2014) によれば、定冠詞や補文化辞が共起しない [φ {point, thing, fact, problem} is φ,] といった貝殻名詞構文が形態統語的縮約

の事例として観察されるという。

(30) AUTO, HOST: Well, the president is getting restless. He wants a stimulus package now.

Problem is, the one in the Senate isn't the one he wants. (2001 COCA: SPOK. Fox Cavuto)

(柴崎 2014: 13)

このように、当該構文では通時的に主語名詞句の多様化を見せているが、主語名詞句で表される存在のスキーマとして、慣習的・一般的なカテゴリーであるということが通底している。17世紀以降に抽象名詞句が主語として中心的に生起するようになる前は Text タイプの主語名詞句が典型的であったが、この時期の事例は頻繁に引用される聖典などのテキストである。つまり、初期の Text タイプの事例も、慣習性・一般性という特性を持つカテゴリーであることは共通しているといえる。

5.2.4 構文化理論からみる HITC

前節までの議論から、HITC の構文化の過程を以下のようにまとめることができる。

N_{Text} は Text タイプの名詞句を、 N_{Source} は抽象名詞句を含む情報源を表す名詞句を表す。

(31) HITC の構文発達過程：

(a) 構文化前の構文変化 > (b) 構文化 > (c, d) 構文化後の構文変化)

a. 16世紀以前： [N_{Text} [have] [it]] : [have it] における形式・意味のミスマッチ

b. 17世紀前半： [N_{Text} [have it] [that (p)]] : [have it] のチャンク化

c. 17世紀以降： [N_{Source} [have it] [that (p)]] : 情報源スキーマの確立と主語名詞句タイプの多様化 (Text > Adage > Myth, Idea, Rumour)

d. 20世紀以降： [N_{Source} have it] : 評言節・語用論標識的用法の成立

16 世紀以前は構文化前の構文変化の時期であり、頻度の増加した Text タイプの “N have it” の事例において、他の構文からの類推により、形式と意味のミスマッチを生じる構文変化が生じている。その後、17 世紀前半には [have it] が補文導入節を構成するチャンクとして変化し、Text タイプの主語名詞句をとる定形節補文構文がみられるようになる。さらに構文化後の構文変化として、情報源構文としてのスキーマが確立し、ホストクラスの拡大が生じたことにより、Text タイプだけでなく Adage, Myth, Idea, Rumour といった抽象名詞句タイプの構文が慣習化するようになる。

HITC における構文化はエビデンシャルとして固定化したという点で手続き的意味が表出しており、文法的構文化とみなすことができる。また、情報源のスキーマが確立し、慣習性・一般性という特性を保持しながら、ホストクラスの拡大により多様な情報源の構文として慣習化していることも文法的構文化の特徴を反映している。

また、HITC は具体物を主語にとる引用的構文から抽象概念を主語にとる伝聞情報構文へと拡張してきたことが明らかとなった。このことは、HITC が他の伝聞情報構文と同様、不特定多数の人々の含意を生じるということだけでなく、典型的な他動詞構文と異なり、非人称的な（あるいはセッティング的な）構文に接近しつつあることを示唆する。

(32) は現代英語への変化の過渡期を反映すると思われる興味深い特徴を含んでいる。

(32) a. Then the next Evidence is Fielder, and he tells you, that at their Town of Andover the Wednesday before my Lord murdered himself, it was all the talk about the Town, that he had cut his throat; it was in every bodies mouth, the Market people, Men, Women and Children, all over the Town had it, when the Earl of Effex did it not till the Friday following.

(EHBC, 1684)

b. All the Town has it, that Miss Caper is to be married to Sir Peter.

(OED, 1738)

c. “Come, come, Random (continued he) you need not make a mylfery of it to me, the whole town has it.

(EHBC, 1748)

(32) はいずれも主語に名詞 *town* を含む事例であり、17 世紀から 18 世紀、つまり初期の HITC から Myth, Rumour タイプの HITC の出現に至るまでの構文化後の構文変化の途上の時期に観察される。(32b) は OED の HITC の項 (have (v.) 13a) に収録されている事例である。主語名詞句の *all the town* は見かけ上、空間的なセッティングを表す表現のようにも見えるが、街の不特定多数の人々を集合的に表すメトニミーである。こういった事例も、それ以前の時期に出現していた say 構文の類推による事例の可能性はある。

(33) a. The burgesse of a town in the parliament house beareth the person of the whole towne, and whatsoeuer he saith, that the whole town saith, and whatsoeuer is done to him, is also done to all the towne: ...

(EHBC, 1595)

b. Saltmarsh and Antinomians say, there are graces of Faith, Repentance, Mortification, or rather, (as Town saith) gifts of Faith, ...

(EHBC, 1648)

c. AS the Burgess of a Town or Corporation sitting in the Parliament-House the person of that whole Town, place; and what he saith, the whole Town saith; and what is done to him, is done to the whole Town.

(EHBC, 1658)

d. A wither'd Beggar-woman, little sundred From him, who all the Town said, was a hundred: Toothless she was, nay more, worn all her Gums, And all her Fingers too were worn to Thumbs: ...

(EHBC, 1671)

同様に、以下は現代英語の事例であるが、こちらも特定の場所（ハリウッド）が不特定多数の人々の存在を含意するものである。

(34) Hollywood had it that at one time or another he [Louis B. Mayer] used his fists tellingly on Charlie Chaplin, Walter Wanger and Sam Goldwyn.

(COHA, 1957)

この事例の場合、Hollywood はアメリカの映画業界を指し、メトニミー的に不特定多数の映画業界関係者を含意する。このように、見かけ上、空間的なセッティングを表す主語名詞句が生起する事例は現代英語では高頻度で観察されるというわけではない。しかしながら、この事例は、当該構文がセッティング的な性格の主語をもつ構文となっていることを示唆するものであるといえる。セッティング的な主語との関わりについては、後にさらに述べる。

以上の通時的分析を踏まえ、次節では HITC と HIPTC との間の認知構造上の比較をおこなう。

5.3 共時的分析

5.3.1 have 構文と参照点構造

所有動詞 have による構文は非常に広範な意味を示す (Heine (1997); Langacker (2009))。以下の例のように、have 構文の表すプロセスは、主語で表される所有者と目的語で表される所有物との間の身体的・物理的なコントロールを伴う関係から、セッティングを主語とする構文のような主語・目的語間のより抽象的な関係まで幅広くみられる。

- (35) a. I have an electric toothbrush.
 b. She has several dogs.
 c. Jones has a very good job.
 d. My brother has frequent headaches.
 e. We have a lot of earthquakes in California.
 f. Sherridan has brown eyes.
 g. Their house has four bedrooms.

(Langacker 2009: 104)

have 構文では、いずれの場合も主語と目的語との間の参照点構造 (Langacker 1993, 2009) が根底にあるとされる。参照点能力は人間の一般的認知能力のひとつで、概念化者 (C) が際立ちの高い参照点 (R) を参照することによって、参照点の支配域 (D) に存在するターゲット (T) を特定していくものであり、広範な言語現象の経験的な基盤となっている。

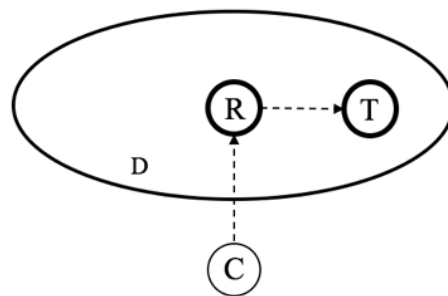


図 1. 参照点構造 (Langacker 1993: 6)

(35) では、(35a, b) がより典型的な所有の意味を表すのに対し、(35e-f) の主語は目的語位置の存在にとっての空間的な参照点を示すのみとされる。

HITC・HIPTC はいずれも、典型的な身体的・物理的所有構文と違い、抽象的な所有

関係を表す。所有者を主語にとる HIPTC は、情報源を主語にとり、所有者が客体化されない HITC よりも相対的にコントロールは強く、一方で HITC では所有関係はよりスキーマ的である。

5.3.2 HI(P)TC の認知構造

前節までの事実をもとに、HITC・HIPTC の 2 構文の認知構造を示す。これらの認知構造の記述にあたり、前節で述べた参照点構造と、3.3.3 節で援用した認知文法における非人称 *it* の理論を援用する。

3.3.3 節で述べたように、以下のような構文は連続体を成している。

- (36) a. I {suspect / believe / imagine} that she will be elected.
 b. It {appears / seems / is likely} that she will be elected.
 c. That she will be elected is {likely / probable / doubtful}.

(Langacker 2009: 144)

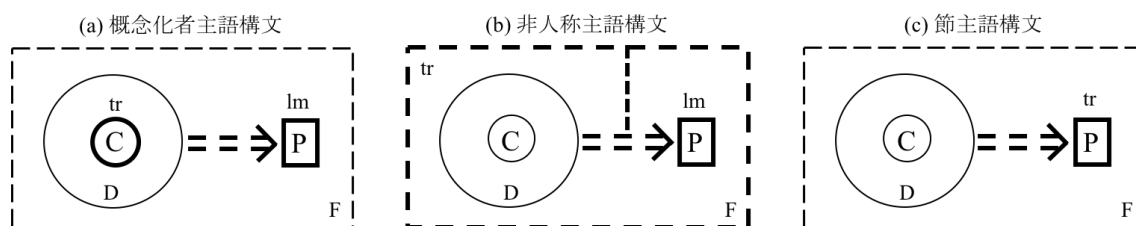


図 2. 概念化者主語構文、非人称主語構文、節主語構文 (Langacker 2009: 144)

Langacker (2009) による非人称 *it* 構文の議論を援用するにあたって注意すべきなのは、Langacker (2009) の分析は非人称 *it* が主語位置に生起する構文に関するものが中心であり、HI(P)TC のように目的語位置に非人称 *it* が生起する構文については今後の課題として挙げられているのみで、認知文法の応用可能性を示唆する記述にとどま

っているという点である²⁸。本研究では、前節までの通時的・共時的分析で得られた言語事実に加え、Langacker (2009) の分析を背景とし、HI(P)TC の構文的特徴を以下のように記述する。HI(P)TC では、目的語位置の非人称 *it* は動詞とともにチャンクを形成し、主節全体が補文を導入する節として機能している。還元すれば、HI(P)TC では、直接、定形節補文をとる動詞ではない *have* と非人称 *it* が共起することで、(通時的に類推が生じていた) 他の定形節補文をとる認識・思考動詞構文のように機能しているとみられる。

以下の認知図式は Langacker (2009) に基づいて 2 構文の参照点構造を図示したものである。C は概念化者 (Conceptualizer)、P は命題 (Proposition)、S は情報源 (Source)、F は非人称 *it* で表される意識のスコープ/フィールド (scope of awareness / Field)、R は参照点 (Reference point)、T はターゲット (Target)、G はグラウンド (Ground) をそれぞれ表す。

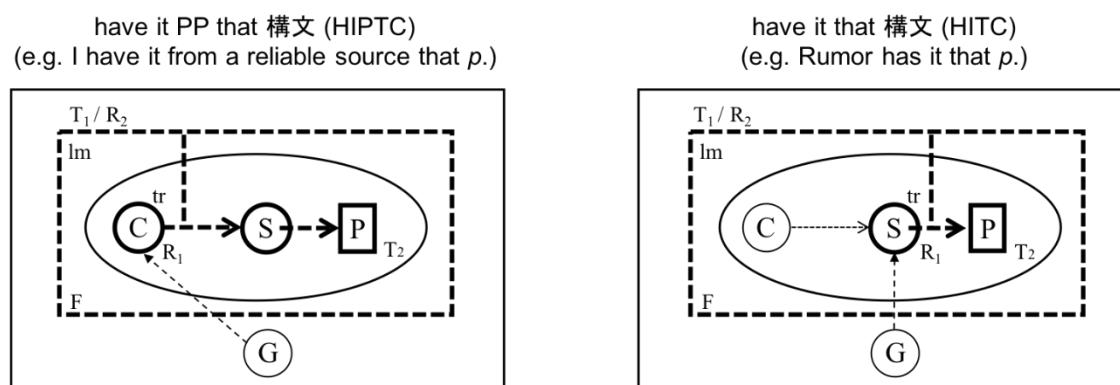


図 3. HIPTC と HITC の認知図式

図式が示すように、これらの構文は鏡像的な関係にある。所有動詞 *have* は通常、直接目的語として *that* 節をとらない。換言すれば、*have* 構文は直接的に命題を *lm* としてとるプロセスになじまないが、*that* 節を伴う HIPTC および HITC は、*it* を欠くこと

²⁸ Langacker (2009) では、認知文法やメンタルスペース理論の枠組みから目的語位置に非人称 *it* が生起する構文の分析をおこなっている Smith (2000) を支持するかたちで、認知文法的分析が目的語位置に非人称 *it* が生起する構文にも応用できることを示唆されている。

はできない (I have *(it) from a reliable source that p. / Rumor has *(it) that p.)。つまり、いわゆる外置 (extraposition) の形式をとることで have it (PP) の形式が伝達節 (reporting clause) として成立し、被伝達節 (reported clause) である that 節を導いているとみなされる。したがって、これらの構文は参照点連鎖において、意識のスコープを表す非人称の it を介して命題内容にアクセスする参照点構造を持つ構文と考えられ、両者の節内におけるプロファイルの差異が意味・用法に反映していると考えられる。

HIPTC は、人がある情報源を参照することによって情報にアクセスしている状態を表す。つまり、人がある情報 (命題) を知っているという事態に焦点があり、情報源は二次的な際立ちにとどまっている。HITC と比較したとき、相対的に情報源として表される概念が情報源の存在の複数性やその存在との関係性といった個別具体的な情報のやり取りを含意しやすいのは、参与者を含む構文であることにほかならない。

一方、HITC は、情報源と情報とのスキーマ的な所有関係を示す事態である。この構文では、参照点としての情報源から命題へのアクセスに焦点があり、概念化者は客体化されず、含意にとどまる。この構文の情報源のような抽象概念は一般に具体的・物理的な事物と比べ認知的際立ちが低いとされるが、情報の内容と情報源の関係性においては、情報源が参照点として機能することは自然に理解できる。また、3 節で典型的な主語名詞句が噂話、伝承、社会通念といった慣習的な概念となっていることを見たが、情報源としてのアクセスのしやすさにつながっていることを示唆しており、こういった分布も当該構文特有の慣習化の結果としてみることができる。

5.4 理論的含意

5.4.1 非人称 it 主語構文との連続性

本節では、前節までの議論を踏まえ、HITC と非人称受身構文との連続性について論じる。

前節での分析から、HITC は漸進的な構文化の結果、引用的な構文から慣習性・一般性というスキーマを持つ伝聞情報構文として発達してきたことが明らかとなった。

伝聞情報の構文として慣習化している構文の一例として、非人称受身構文が存在する。非人称受身構文は主として「意見、報告、社会通念、言い伝え、予測、期待などを表す動詞」をとり、不特定多数の人々の存在が含意される (中右 2015: 9-10)。

(37) a. It is said that two can live on less than one.

b. It was rumoured that Apple would be sold to Sun Microsystems, but that deal never materialized.

c. It is commonly believed that pictograms appeared before ideograms.

(中右 2015: 9-10)

また、(37c) の *commonly* のように、非人称受身構文ではしばしば不特定多数を含意する修飾表現が共起することも指摘されているが、この傾向は HITC にもみられる。Schmid (2000: 326) では、抽象名詞を修飾する高頻度の形容詞カテゴリとして *general*、*popular*、*widespread* のような「ある観念が認められ、共有されている程度 (“the degree to which an idea is accepted and shared”)」を表す形容詞が存在することが指摘されている。抽象名詞句を主語にとる HITC の事例にもこのような修飾表現が共起する事例が高頻度で観察される。

(38) a. {general, popular, widespread} belief

b. {general, unanimous} conclusion

c. {broad, general} consensus, shared conviction

d. {general, widespread} expectation

e. {general, widespread} feeling

f. {general, widespread, popular} notion

g. widespread perception

(Schmid 2000: 326)

(39) a. Common misconception has it that rock'n'roll was invented when Alan Freed first foisted this brash new music on the unsuspecting good burghers of Cleveland in April 1952.

(BNC)

b. I'm wearing belong to different phases of socio-cultural reality. One of them is a gold watch: for ages, common belief had it that nothing was better than gold, thanks to the value lent to it by its stainlessness.

(COCA)

また、いずれの構文も話し手の認識的なコミットメントの観点では中立的であり、判断保留を表す (cf. 五十嵐・本多 2014; 中右 2015)。つまり、HITC と非人称受身構文はいずれも (i) 伝聞情報構文である点、(ii) 不特定多数を含意する点、(iii) 話し手の判断保留を表すという点で共通している。

これらの共通の特徴は Langacker (1991, 2008, 2009) におけるセッティング主語構文と非人称 *it* 主語構文との連続性の議論が関連する。(40) は知覚経験を表すセッティング主語構文および非人称 *it* 主語構文であり、(41) は HITC・非人称受身構文である。

(40) a. Chicago is {hot, cold, freezing, miserable}.

b. It's {hot, cold, freezing, miserable} in Chicago.

(Langacker 2009: 143)

(41) a. Rumour has it that he was shot.

b. According to rumour, it is said that he was shot.

前者の事例が同一の概念内容を基盤にもち、焦点化される部分がそれぞれ異なるのと同様、後者の事例も平行的に捉えられる。

非人称受身構文は非人称 *it* 主語構文の下位構文であり、参与者が脱焦点化され、一般化された概念化者 (*generalized conceptualizer*) を含意する構文である (Langacker 2009)。非人称 *it* は概念化者の意識の場 (*field of awareness*) を表す抽象的なセッティングであり、より狭義の時間的・空間的セッティングと連続体を成すとされる (cf. 對馬 2016)。

一方、HITC も一般化された概念化者を含意する点が共通するが、主語名詞句は情報源を表す名詞句であり、副詞的 (*according to rumour*) にも捉えられうる認識的概念であるといえる。そのため、HITC の主語名詞句で表される情報源をセッティングの一種と捉えると、非人称構文との連続性を見出すことが可能となる。

HITC は、事態概念を表す狭義のセッティング主語構文と非人称 *it* 主語構文との間の、中間的な構文とみなすことができる。つまり、HITC は所有・存在を表す *have* 構文を基盤とするセッティング主語構文と捉えられる。このとき、セッティング主語構文の背後にある認知プロセスのズームイン (*zoom-in*) は、HITC の場合、主語名詞句で表される情報源から *that* 節で表される具体的な情報へのアクセスに対応する。(41a, b) における両構文の差異も (40a, b) と平行的であり、名詞句主語構文である HITC が客体的な報告文であるのに対し、概念化者の意識の場を表す非人称 *it* を主語とする非人称受身構文はより主体的な認識が表される。

本章の通時的分析から、HITC が非人称的・セッティング的な構文に接近しつつあることが示唆された。この変化について、次節でさらに検討する。

以上で述べた HITC と非人称受身構文との連続性には、通時的データにも示唆的な事例が存在している。近代英語期以前から存在していた、前置詞句を伴う *have* 非人称受身構文 *it is had PP that (p)* 構文について触れる。この構文は現代英語では廃用となっているものであるが、HITC と非人称受身構文の関連を示唆すると思われる。

(42) Thou3 it mai be had by tho textis that God schal zeue and do.

(OED, 1449)

この事例は *by*-句 (*bytho textis*) が共起する定形節補文構文であり、形式的には *have* の非人称受身構文に、前置詞の目的語として *Text* タイプの名詞句が共起している。つまり、ある情報が特定のテキストに基づくものであることを表す引用的な構文であると思われる。この構文は 16 世紀以前の “*N have it*” の事例の典型的な主語名詞クラスが *Text* タイプであったことが関連する。

この構文は、前置詞句が義務的に共起する、[*It be had PP (that (p))*] という形式的イデオムであったと考えられる。というのも、本研究で収集したデータにおいて、同時期に前置詞句が共起しない非人称受身構文の事例 (**/? it is had φ that (p)*) が観察されなかったことから、前置詞句が生起しない構文が慣習化していなかったと仮定されるためである。コーパスデータの制約上、本研究で収集された事例数が限定的であるため、この見方は現時点では仮説にとどまる。しかしながら、もしこの見方が正しければ、この構文では情報源を表す前置詞句との結びつきが強固であったと思われる。もしそうであったとすれば、情報源を表す前置詞句との結びつきという特徴は *HIPTC* と平行的であり、[*It be had PP (that (p))*] は中英語期から近代英語期頃におけるエビデンシャル方略のひとつであったといえるかもしれない。

先述のとおり、現代英語では *have* の受動態構文は一部の用法に限られ、非人称受身構文などは観察されない。しかしながら、*Visser (1963-1973)* によれば、古英語期・中英語期には所有の意味に由来する数多くの *have* の受動態用法が観察されるようである。かつての *have* は現代英語における *have* と比較してより動作主性の高い動詞であったことがしばしば指摘されるが、このことは、初期の *have* による定形節補文構文が引用的な意味を表す構文に限定されていたという事実も関連すると思われる。

5.4.2 英語のエビデンシャル方略としての非人称化

前節では *HITC* が非人称構文と連続体を成していることを示した。本節ではエビデンシャル研究への示唆として、英語ではエビデンシャル方略として「非人称化」

というべき方略が存在することを述べる。

英語には伝聞情報を表す構文としていくつかの非人称的な構文が存在する。前節までで扱ってきた HITC や非人称受身構文のほか、*they say (that)*、*one says (that)* などが該当し、これらはいずれも概念化者が背景化しているという共通点がある。

(43) a. It is reported/said that 75 people died from yesterday's clash.

b. Rumor/word/news has it that 75 people died from yesterday's clash.

c. They say 75 people died from yesterday's clash.

(Yan and Siewierska 2011: 576)

先行研究において、これらのうちのいくつかの構文が伝聞情報を表すものとして指摘されることがあるが、少なくともこれらの構文とエビデンシャルティとの関連についての分析は管見の限りなされていない。唯一、非人称構文 (impersonals) の研究である Yan and Siewierska (2011: 576) に、英語には「不特定な情報源の背景化のために（非人称的な）主語が用いられる」（“the subject are used to background an incompletely specified source of information”）事例が存在すると指摘され、上記の諸構文が取り上げられているのみである。

本研究で援用する認知文法の枠組みでは、上記の構文間に共通の方略が存在することが示唆される。

Yan and Siewierska (2011: 576) が指摘するとおり、こういった構文で表される伝聞情報はいずれも、特定の概念化者の指示の背景化が生じている。これは、非参与者主語構文にみられる脱焦点化 (defocusing) によるものである。さらに、これらの構文は一般化された概念化者 (generalized conceptualizer) の含意を持つ。

この 2 つの特徴は、伝聞情報構文における話者の伝達する命題内容 (that 節) に関する判断保留 (cf. 中右 1983) や責任の回避 (cf. Fox 2001) と整合するものである。したがって、伝聞情報構文に関わる方略として、非人称化と呼ぶべきものが存在するこ

とが示唆される²⁹。

5.5 まとめ

第5章では、コーパスに基づく通時的分析により、定形節を伴う *have* 構文である HITC と HIPTC の構文化の過程を明らかにした。HITC および HIPTC は動詞 *have* の所有の概念に基づく引用的構文から発達し、他の定形節補文構文の類推によって慣習化に至った。さらに、引用的構文から情報源スキーマの確立を経て、ホストクラスの拡大により、より抽象的な情報源を含む多様な伝聞情報を表す構文として発達した。また、HITC と非人称受身構文の連続性について、認知文法におけるセッティングと非人称 *it* の議論を援用し分析した。2 構文の連続性はセッティング主語構文と非人称 *it* 主語構文の連続性に対応する。

また、この分析から得られる理論的示唆について述べた。HITC や非人称受身構文 (e.g. *It is said that* (p)), *they say* といった英語の伝聞情報構文はこれまで散発的に記述されてきたが、いずれも概念化者が背景化した定形節補文構文であるという特徴がある。認知文法におけるセッティングや非人称 *it* の概念を援用し、これらの構文の背景には、セッティング主語構文のように参与者が脱焦点化され、一般化された概念化者

²⁹ 5.4.2 節では非人称的な構文に着目したが、伝聞情報を表す構文には「人稱的」な構文 (*I hear that*) (p) も存在する。伝聞情報を表す人稱的構文と非人称的構文との意味・機能的な差異は明確ではない。

Langacker (2008) では、非人称的な構文と人稱的な構文で表される責任性の概念が異なることが指摘されている。具体的には、(i) 一人称主語構文、(ii) 節主語構文および (iii) 非人称 *it* 主語構文を取り上げ、話し手がトラジェクターとして選ばれる (i) では話し手自身の個人的な疑念が表されるとしている。一方、セッティングをトラジェクターとする (ii) や抽象的なセッティングをトラジェクターとする (iii) では、認識的判断の中に話し手自身の責任は含意されないという。

- (i) 一人称主語構文 : *I'm doubtful that* (p)
- (ii) 節主語構文 : *That* (p) *is doubtful*
- (iii) 非人称 *it* 主語構文 : *It is doubtful that* (p)

伝聞情報構文も平行的に責任性の観点が異なることが予測されるが、その一方で、伝聞情報構文は間接的に、あるいは非能動的に当該の情報を得ることが表されるという点が質的に異なる。そのため、これらの差異の記述は今後の課題とする。

(generalized conceptualizer) を含意する構文を形成する非人称化というエビデンシャル方略の存在を示唆した。

第6章 結語と展望

本論文では、認知言語学の立場から英語の補文構造について分析をおこなった。本章では、各章における議論・分析を概観する。また、本論文の意義を述べ、今後の展望を論じ、本論文の結語とする。

6.1 本論文のまとめ

第2章では、本研究の理論的背景について論じた。研究対象である英語のように、定形節補文構文などでエビデンシャル方略が観察される言語では、分析の際に文法と語彙の二分法を超えた、本論文が援用する認知文法および構文理論といった認知言語学的言語観・構文観が重要となることを述べた。

第3章では、先行研究における補文構造の定形性と直接性・間接性との関係および情報源の特定性との関係に関する認知言語学的分析を概観し、具体的に連結的知覚動詞構文の表すエビデンシャルリティや認識的意味について、経験者主語構文と対比するかたちで検討をおこなった。経験者主語構文では定形節補文を伴う事例において推論や伝聞といった間接的なエビデンシャルリティを表すのに対し、連結的知覚動詞構文では定形節補文を伴う事例だけでなく、定形節補文以外の補部をとる事例にもエビデンシャル用法が存在する。先行研究ではそのような事実に対する用法の記述にとどまっていたが、本研究では認知文法における認知モデルであるコントロールサイクルの理論を援用し、エビデンシャルリティをめぐる用法における認知構造を明らかにした。さらに、定形節補文を伴う連結的知覚動詞構文に関して、繰り上げ現象や非人称 *it* 主語構文の発達、語用論標識・評言節的事例の出現といった事実をもとに記述をおこなった。また、構文成立過程および現代英語における変化に関しては、構文化理論の観点から、チャンク化 (Bybee 2010) に基づく構文変化が進行中である可能性を示唆した。

第4章では、連結的知覚動詞構文や *seem* 構文と *complement-as* 構文との相互作用から創発する間主観的な構文変化について、認知言語学の観点から分析をおこなった。コーパスに基づく量的分析により、前置される補部の分布と典型的な事例における意味的傾向を浮き彫りにし、当該構文の否定的評価を表す補部への分布の偏りという特異性を示した。さらに、通時的・共時的両側面の分析から、当該構文の典型的な補部が表す否定的評価は話し手の想定・期待に反する評価・判断を表し、話し手の導入する発話内容に伝達が阻害されうる要素を含む際に、話し手の想定する聞き手の解釈を予告することでその状況を緩和するという機能がある点や、この構文が *sound* や *seem* で特に発達しており、構文の意味的・機能的特徴付けに主体性および推論の意味が深く関わっているといった考察を展開した。

第5章では、*have* を含む定形節補文構文によるエビデンシャル方略についての汎時的分析をおこなった。通時的分析により、(i) *have it that* 構文と *have it PP that* 構文の構文化に関して [have it] のチャンク化 (Bybee 2010) が重要な役割を担っていること、(ii) *have it (PP) that* 構文は *have* の所有概念に基づく引用的構文から発達し、他の定形節補文構文の類推によって慣習化に至ったこと、(iii) *have it that* 構文は引用的構文から情報源スキーマの確立を経て、構文化後の構文変化におけるホストクラスの拡大により、より抽象的な情報源を含む多様な伝聞情報を表す構文として発達したことを明らかにした。また、通時的分析の知見を背景として、参与者とセッティング、参照点構造の観点から、*have it that* 構文と *have it PP that* 構文の認知構造を示した。また、この分析から得られる以下の理論的示唆について述べた。*have it that* 構文、非人称受身構文 (e.g. *It is said that (p)*)、*they say* といった英語の伝聞情報構文はいずれも概念化者が背景化した定形節補文構文であるという特徴がある。認知文法におけるセッティングや非人称 *it* の概念を援用し、これらの構文の背景には、セッティング主語構文のように参与者が脱焦点化され、一般化された概念化者 (generalized conceptualizer) を含意する構文を形成する非人称化というエビデンシャル方略が存在すると述べた。

6.2 本研究の意義と今後の展望

本研究の意義として、まず、言語変化研究における用法基盤的な分析の一定の妥当性を示したことが挙げられる。本研究で扱った諸現象のように、従来の文法化・語彙化の理論では捉えきれない現象に対して、認知文法や構文化の理論といった用法基盤モデルに基づく汎時的分析が有効であることを示した。

また、認知文法および構文化理論への貢献が挙げられる。

認知文法は Langacker を中心に、1980年代から一貫した理論として発展を続けている。第3章で援用したコントロールサイクル (Langacker 2002, 2009) や非人称 *it* への記述・説明 (Langacker 2009) などは比較的最近確立されたものであり、援用可能性や理論の精緻化が求められる。また、認知文法の立場からのエビデンシャリティ研究は Langacker 本人によるものでも Langacker (2017) が最も古いという状況がある。そのため、エビデンシャリティに関わる現象に対して認知文法的アプローチがどこまで応用可能かという視点は意義があると思われる³⁰。

このことは構文化理論 (Traugott and Trousdale 2013) についても当てはまる。構文化理論は本研究が立脚する理論的枠組みの中でも特に歴史が新しいものであり、理論の記述・説明の妥当性における精緻化が望まれる。構文化理論に基づく他の研究として、早瀬 (2015, 2017) の懸垂分詞の研究や前田 (2015)、柴崎 (2017) などがある。これらの研究でも、従来の研究で研究対象となることが多くなかった現象の精緻化や、特に文法化研究などで扱われつつも離散的な分析にとどまっていた諸現象についての統一

³⁰ Langacker (2016: 24) は40年来の認知文法理論の展開を振り返り、大まかに2000年頃を境に、次の2つの段階に分けられるとしている。

- (i) a. 第一期 (The first phase; “Classical” CG) (Langacker 1987, 1990, 1991, 1999)
- b. 第二期 (The second phase) (Langacker 2001, 2008, 2009, 2012)

第一期は、自律的・形式的体系としての生成文法の文法観に対する代案としての記号的文法観が強調される。第二期はさらに、構造や認知処理、談話における統合的な説明が目指されている。

第二期には形態素・単語・句・文レベルから、さらに談話レベルの現象に射程が広がられている。現行談話スペース (Langacker 2001) やコントロールサイクル (Langacker 2002)、エビデンシャリティの記述・分析 (Langacker 2017) は第二期を象徴する理論や射程である。

的な説明がなされている。

また、イディオムの構文研究への記述的・理論的貢献が挙げられる。第5章で扱った **have it (PP) that** 構文はこれまで研究対象となることが稀であり、**have** に相当する他言語の動詞がエビデンシャルとして機能する現象は管見の限り報告されていないようである。この先行研究の少なさには当該構文が形式的イディオムのような構文であることにも起因していると思われるが、第2章でも提示された認知言語学的アプローチではこのような現象も射程内となることを示している。

今後の展望としては、まず、本研究の意義でも述べた認知文法・構文化理論の応用可能性の追求が挙げられる。本研究は連結的知覚動詞構文や **have it (PP) that** 構文など、エビデンシャルリティに関わる非人称 **it** を含む一部の構文の分析であったが、非人称 **it** が主語位置や目的語位置に生起する構文はエビデンシャルリティに関わるもの以外にも非常に広範なネットワークを成している (中右 2013, 2015)。セッティング主語構文や他の非参与者主語構文などを含め、構文間のネットワークの全容を明らかにしていくことは今後の課題である。

また、第5章で理論的含意として述べたエビデンシャル方略としての非人称化について、妥当性を追求する必要がある。本論文では、認知文法の観点から伝聞情報を表す諸構文が連続体を成している可能性について述べたが、あくまでも共時的観点において連続体を成している可能性についてのみにとどまる。それぞれの構文が (i) どのようなネットワークを構成しているのか、(ii) 通時的にどのような構文変化を経て成立したのか、(iii) 英語の他の非人称的な構文との関係など、本論文で扱えなかった論点は多い。また、非人称化についてはさらに、(iv) 英語以外の言語における非人称的な構文の分析など、類型論的・対照言語学的展開が望まれる。

最後に、本論文では補文構造をめぐる言語現象を中心に議論したが、序論でも述べたとおり、補文構造は言語研究において非常に長い伝統のある領域である。そうでありながら、現在でも、認知・機能主義言語学の立場から興味深い知見が明らかになっている分野でもある。その理由はひとつには、補文構造は本論で議論したエビデンシ

ャリティだけでなく、認識的モダリティ、アスペクト、発話行為といった、言語学における非常に広範な領域に関わるものだからといえるであろう。以下の Langacker (2008) の引用にもあるとおり、人間の発話や認識の様相をさまざまなかたちで反映し、文法と語彙の連続性の中で立ち現れる。そういった個々の事例を可能な限り統一的に説明できる理論を追求することが肝要である。

Clausal grounding reflects our lack of omniscience. We do not have a God's-eye view of the world, and with our local perspective we directly experience only a very small portion of it. Much of what we know (or think we know) about the world has to be acquired through indirect means: hearsay, records, inference, projection, and the like. Our perspective is also local in a temporal sense. Only the immediate present is directly accessible, and a mere fragment of the past has ever been (as previous present moments). We nevertheless think and talk about the entire sweep of history and the endless reach of the future, knowledge of which ranges from insecure to wholly speculative. This vast discrepancy between what we securely know, on the one hand, and what we contemplate and express linguistically, on the other hand, is the source of clausal grounding. For each situation we describe, there is a need to indicate its epistemic status—where it stands in relation to what we currently know and what we are trying to ascertain.

(Langacker 2008: 296-297)

参考文献

- Aikhenvald, Alexandra Y. 2004. *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.
- Aikhenvald, Alexandra Y. 2007. “Information source and evidentiality: What can we conclude?” *Rivista di Linguistics* 19 (1): 209-227.
- Aikhenvald, Alexandra Y. (ed.) 2018. *The Oxford Handbook of Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.
- 天野みどり・早瀬尚子 (編). 2017. 『構文の意味と拡がり』 東京：くろしお出版
- Anderson, L.B. 1986. “Evidentials, paths of change, and mental maps: typologically regular asymmetries” in Chafe, Wallace and Johanna Nichols. (eds.) *Evidentiality: the linguistic coding of epistemology*, 273-312. Norwood, NJ: Ablex.
- Barth-Weingarten, Dagmar. 2003. *Concession in Spoken English: On the Realisation of a Discourse pragmatic Relation*. Tübingen: Gunter Narr.
- Bolinger, Dwight. 1968. “Entailment and the meaning of structures.” *Glossa* 2.2: 119-127.
- Bolinger, Dwight. 1972. *That's That*. The Hague: Mouton.
- Bolinger, Dwight. 1974. “Concept and percept: two infinitive constructions and their vicissitudes.” In Phonetic Society of Japan (ed.), *World Papers in Phonetics: Festschrift for Dr. Onishi's Kizyu*, 65-91. Tokyo: Phonetic Society of Japan.
- Bolinger, Dwight. 1977. *Meaning and Form*. London: Longman.
- Borkin, Ann. 1973. “To be and not to be.” *Papers from the 9th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*: 44-56.
- Boye, Kasper and Peter Harder. 2007. “Complement-taking predicates: Usage and linguistic structure.” *Studies in Language* 31 (3): 569-606.
- Boye, Kasper and Peter Harder. 2009. “Evidentiality: Linguistic Categories and Grammaticalization.” *Functions of Language* 16: 9-43.
- Boye, Kasper. 2018. “Evidentiality: The notion and the term.” In Aikhenvald, Alexandra Y.

- (ed.) *The Oxford Handbook of Evidentiality*, 261-272. Oxford: Oxford University Press.
- Bresnan, Joan W. 1979. *Theory of Complementation in English Syntax*. New York : Garland.
- Brinton, Laurel J. 1996. *Pragmatic Markers in English: Grammaticalization and Discourse Function*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Brinton, Laurel J. 2008. *Comment Clause in English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brugman, Claudia. 1988. "The Syntax and Semantics of HAVE and Its Complements." Ph.D. dissertation. Berkeley: University of California.
- Brugman, Claudia. 1996. "Mental Spaces, Constructional Meaning, and Pragmatic Ambiguity." In Fauconnier, Gilles and Eve Sweetser (eds.) *Spaces, Worlds and Grammar*, 29-56. Chicago: University of Chicago Press.
- Bybee, Joan, Revere Perkins, and William Pagliuca. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Bybee, Joan. 2010. *Language, Usage and Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Chafe, Wallace and Johanna Nichols. 1986. *Evidentiality: the linguistic coding of epistemology*. Norwood, NJ: Ablex.
- Couper-Kuhlen, Elizabeth and Sandra A Thompson. 2000. "Concessive patterns in conversation." In: Couper-Kuhlen, Elizabeth and Bernd Kortmann. (eds.) *Cause, Condition, Concession, Contrast: Cognitive and Discourse Perspectives*, 381-410. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Cornillie, Bert. 2009. "Evidentiality and Epistemic Modality: On the Close Relationship Between Two Different Categories." *Functions of Language* 16: 44-62.
- Curme, G. 1931. *Syntax*. Boston: D. C. Heath and Company.
- Dik, Suzanne D. and Kees Hengeveld. 1991. "The hierarchical structure of the clause and the

- typology of perception-verb complements.” *Linguistics* 29: 231-259.
- Diessel, Holger and Michael Tomasello. 2001. “The acquisition of finite complement clauses in English: a corpus-based analysis,” *Cognitive Linguistics* 12: 97-141.
- Dixon, Robert M. W. 1992. *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles*. Oxford: Clarendon.
- Dixon, Robert W. 1995. “Complement clauses and complement strategies.” In F. R. Palmer (ed.) *Meaning and Grammar*, 174-220. Cambridge: Cambridge University Press.
- Egan, Thomas. 2008. *Non-Finite Complementation: A Usage-Based Study of Infinitive and -ing Clauses in English*. Amsterdam and New York: Rodopi.
- Fauconnier, Gilles and Eve Sweetser (eds.) 1996. *Spaces, Worlds and Grammar*. Chicago: University of Chicago Press.
- Fauconnier, Gilles and Mark Turner. 2002. *The Way We Think: Conceptual Blending and the Mind's Hidden Complexities*. New York: Basic Books.
- Fox, Barbara. 2001. “Evidentiality: Authority, Responsibility, and Entitlement in English Conversation.” *Journal of Linguistic Anthropology* 11 (2):167-192.
- Fraser, Bruce. 1996. “Pragmatic markers.” *Pragmatics* 6 (2): 167-190.
- 深田智. 2001. 「“Subjectification” とは何か: 言語表現の意味の根源を探る」 『言語科学論集』 7: 61-89. 京都大学 人間・環境学研究科 言語科学講座.
- 深田智・仲本康一郎. 2008. 『概念化と意味の世界』 東京: 研究社.
- Gisborne, Nikolas and Jasper Holmes. 2007. “A history of English evidential verbs of appearance.” *English Language and Linguistics* 11.1: 1-29.
- Gisborne, Nikolas. 2010. *The Event Structure of Perception Verbs*. Oxford: Oxford University Press.
- Givon, Talmy. 1981. “Typology and functional domains.” *Studies in Language* 5: 163-93.
- Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: Chicago University Press.

- Haiman, John. 1983. "Iconic and economic motivation." *Language* 59: 781-819.
- Halliday, M. A. K. 2004/1994. *An Introduction to Functional Grammar*. London: Edward Arnold. (2004 third edition revised by C. M. I. M. Matthiessen).
- 早瀬尚子. 2015. 「懸垂分詞節由来表現の構文化：Traugott and Trousdale(2013)の観点から」『時空と認知の言語学』, 21-30.
- 早瀬尚子. 2017. 「分詞表現の談話標識化とその条件—懸垂分詞からの構文化例—」『構文の意味と拡がり』, 43-64. 東京：くろしお出版.
- Heine, Bernd. 1997. *Possession: Cognitive Sources, Forces and Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 本多啓. 2005. 『アフォーダンスの認知意味論—生態心理学から見た文法現象—』 東京大学出版会.
- Hooper, Joan B. 1975. "On assertive predicates." In Kimball, John (ed.) *Syntax and Semantics* 4: 91-124. New York: Academic Press.
- Horie, Kaoru. (ed.) 2000. *Complementation*. Amsterdam: John Benjamins.
- Horie, Kaoru. 2000. "Complementation in Japanese and Korean: A Contrastive and Cognitive Linguistic Approach." In: Kaoru Horie (ed.) *Complementation: Cognitive and Functional Perspectives*, 11-31. Amsterdam: John Benjamins.
- Horie, Kaoru and Bernard Comrie. 2000. "Introduction." In Kaoru Horie (ed.) *Complementation: Cognitive and Functional Perspectives*, 1-10. Amsterdam: John Benjamins.
- 堀江薫・プラシャント・パルデシ. 2009. 『言語のタイポロジー』 東京：研究社.
- Jespersen, O. 1933. *Essentials of English Grammar*. London: George Allen & Unwin.
- Jespersen, O. 1909-49. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. London: George Allen & Unwin.
- 五十嵐啓太・本多正敏. 2014. 「証拠性を表す have it that 構文」『英語語法文法学会第22回大会予稿集』, 42-47.

- Kamio, Akio. 1979. "On the notion Speaker's territory of information: A functional analysis of certain sentence-final forms in Japanese." In G. D. Bedell, E. Kobayashi, M. Muraki (eds.) *Explorations in Linguistics : Papers in Honor of Kazuo Inoue*. Tokyo: Kenkyu-sha.
- 神尾昭雄. 1990. 『情報のなわ張り理論』 東京：大修館.
- Karttunen, Lauri. 1971. "Implicative verbs." *Language* 47: 340-358.
- 加藤重広・滝浦真人 (編). 2017. 『日本語語用論フォーラム 2』 東京：ひつじ書房.
- Kemmer, Susanne. 1993. *The Middle Voice*. Amsterdam: John Benjamins.
- Kiparsky, Paul and Carol Kiparsky. 1970. "Fact." In Manfred Bierwisch and Karl Erich Heidolph (eds.) *Progress in Linguistics*, 143-173. The Hague: Mouton.
- Kirsner, Robert S. and Sandra A. Thompson. 1976. "The role of pragmatic inference in semantics: A study of sensory verb complements in English." *Glossa* 10 (2): 200-240.
- Kjellmer, Goran. 1992. "Old as he was: A note on concessiveness and causality." *English Studies* 74: 337-350.
- König, Ekkehard and Peter Siemund. 2000. Causal and concessive clauses: formal and semantic relations. In: Couper-Kuhlen, Elizabeth and Bernd Kortmann. (eds.) *Cause, Condition, Concession, Contrast: Cognitive and Discourse Perspectives*. 341-360. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Kono, Wataru. 2015. "Constructional Change of complement as it SEEMs." *Papers in Linguistic Science*, 21: 111-127.
- Kono, Wataru. 2019. "Constructionalization of Have it (PP) that Construction as English Evidential Strategies." Paper presented at The 15th International Cognitive Linguistics Conference (ICLC-15), Kwansei Gakuin University, Japan. August 8th.
- 河野亘. 2013. 「英語知覚動詞構文の証拠性用法に関する認知文法的考察」 『言語科学論集』 19: 27-49.
- 河野亘. 2016. 「seeming verbsと complement as 構文との相互作用による譲歩構文について」 『日本認知言語学会論文集』 16: 202-214.

- 河野亘. 2017. 「have it that 構文およびhave it PP that構文の認知言語学的分析」 『日本語用論学会第19回大会発表論文集』, 105-112.
- 河野亘. 2019. 「have it that 構文と非人称 it 主語構文の連続性」 『日本認知言語学会論文集』 19: 134-146.
- Kruisinga, E. 1931. *A Handbook of Present-day English*. Groningen: Noordhoff.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, vol.1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1990. "Subjectification." *Cognitive linguistics*.1: 5-38.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, vol.2: Descriptive Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1993. "Reference-point constructions," *Cognitive Linguistics* 4 (1): 1-38.
- Langacker, Ronald W. 1995. "Raising and Transparency." *Language* 71: 1-62.
- Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and conceptualization*. Cognitive Linguistics Research 14. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2001. "Discourse in cognitive grammar." *Cognitive Linguistics* 12: 143-188.
- Langacker, Ronald W. 2002. "The control cycle: Why grammar is a matter of life and death." *Proceedings of the Annual Meeting of the Japanese Cognitive Linguistics Association* 2: 193-220.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. 2009. *Investigations in Cognitive Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2016. "Toward an integrated view of structure, processing, and discourse." In Drozd, Grzegorz (ed) *Studies in Lexicogrammar: Theory and applications*, 23-53. Amsterdam: John Benjamins.

- Langacker, Ronald W. 2017. "Evidentiality in Cognitive Grammar." In Marín-Arrese, Juana Isabel, Gerda Haßler and Marta Carretero (eds.) *Evidentiality revisited: cognitive grammar, functional and discourse-pragmatic perspectives*, 13-55. Amsterdam: John Benjamins.
- Leech, Geoffrey N. 1983. *Principles of pragmatics*. New York: Longman.
- Lehmann, Christian. 1988. "Towards a typology of clause linkage." In Haiman, John and Sandra A. Thompson (eds.) *Clause Combining in Grammar and Discourse*, 181-225. Amsterdam: John Benjamins.
- Marín-Arrese, Juana Isabel, Gerda Haßler and Marta Carretero (eds.) *Evidentiality revisited: cognitive grammar, functional and discourse-pragmatic perspectives*. Amsterdam: John Benjamins.
- 前田満. 2015. 「史的構文研究：構文発達のダイナミズム」 立正大学 博士論文.
- Martin, James Robert and Peter R.R. White. 2005. *The Language of Evaluation: Appraisal in English*. New York: Palgrave Macmillan.
- Narrog, Heiko. 2012. *Modality, Subjectivity, and Semantic Change*. Oxford: Oxford University Press.
- 中村芳久・上原聡 (編) 2016. 『ラネカーの (間) 主観性とその展開』 東京：開拓社.
- 中右実. 1983. 『認知意味論の原理』 東京：大修館.
- 中右実. 2013. 「非人称 it 構文—語法と文法の不可分な全体を構文に見る—」 『英語語法文法研究』 20: 5-34.
- 中右実. 2015. 「非人称 it 主語と特異な構文」 深田智・西田光一・田村敏広 (編) 『言語研究の視座』, 2-18. 東京：開拓社.
- Noonan, Michel. 1985. "Complementation." In Shopen, Timothy. (ed.) *Language Typology and Syntactic Description, Vol. 2. Complex Constructions*, 42-140. Cambridge: Cambridge University Press.
- 大橋浩. 2013. 「Having said thatをめぐると覚え書き」 福岡言語学会 (編) 『言語学からの眺望』, 12-27. 九州大学出版会.

- Palmer, Frank R. 1986 [2001]. *Mood and Modality*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- Ransom, Evelyn N. 1986. *Complementation: Its Meaning and Form*. Amsterdam: John Benjamins.
- Riddle, Elizabeth. 1974. "Some pragmatic conditions on complementizer choice." *Papers from the 11th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*: 467-474.
- Rosenbaum, Peter. 1967. *The Grammar of English Predicate Complementation*. Cambridge: MIT Press.
- Ross, John Robert. 1973. "Nouniness." In Fujimura, Osamu (ed.) *Three Dimensions of Linguistic Theory*, 137-258 Tokyo: TEC.
- 佐野大樹. 2012. 「アプレイザル理論を基底とした評価表現の分類と辞書の構築」 『国立国語研究所論集』 3: 53-83.
- Schiffrin, Deborah. 1987. *Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schmid, Hans-Jörg. 2000. *English Abstract Nouns as Conceptual Shells: From Corpus to Cognition*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Seppänen, Aimo. 1978. Some notes on the construction "adjective + A + noun." *English Studies* 59: 523-537.
- 柴崎礼士郎. 2014. 「直近のアメリカ英語史における the problem is (that) の分析—構文の談話基盤性を中心に—」 『語用論研究』 16: 1-19.
- 柴崎礼士郎. 2017. 「談話構造の拡張と構文化について—近現代日本語の「事実」を中心に」 加藤重広・滝浦真人 (編). 『日本語語用論フォーラム』 2: 107-133. 東京: ひつじ書房.
- Shibatani, Masayoshi. 1985. "Passives and related constructions: A prototype analysis." *Language* 61: 821-848.
- Smith, Michael. 2000. "Cataphors, spaces, propositions: Cataphoric pronouns and their

- function.” *Proceedings from the Meeting of the Chicago Linguistic Society* 36.1: 483-500.
- Sweetser, Eve. 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge [England]; New York: Cambridge University Press.
- Taniguchi, Kazumi. 1997. “On the Semantics and Development of Copulative Perception Verbs in English: A Cognitive Perspective” *English Linguistics* 14: 270-299.
- 谷口一美. 2005. 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』 東京：ひつじ書房.
- Thompson, Sandra A. 2002. “‘Object Complements’ and Conversation: Towards a Realistic Account.” *Studies in Language* 26: 125-164.
- 徳山聖美. 2007. 「連結的知覚動詞構文をめぐる問題」 『日本語用論学会第9回大会発表論文集』 2: 81-88.
- Tomasello, Michael. (ed.) 1998. *The New Psychology of Language. Cognitive and Functional Approaches*. New York: Lawrence Erlbaum.
- Tottie, Gunnel. 2001. Tall as he was: on the meaning of complement-as-constructions. In: Dalton-Puffer, Christiane, Arthur Mettinger, and Nikolaus Ritt. (eds.) *Words: Structure, Meaning, Function*, 307-321. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Tottie, Gunnel. 2002. Tall as he was or as tall as he was? concessive constructions in American English. In: Fisher, Andrea, Gunnel Tottie, and Hans Martin Lehmann. (eds.) *Text Types and Corpora: Studies in Honour of Udo Fries*, 205-218. Tübingen: Gunter Narr.
- Traugott, Elizabeth C. and R. B. Dasher. 2002. *Regularity in Semantic Change*. Cambridge Studies in Linguistics, No. 97. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, Elizabeth C. 2003. “From Subjectification to Intersubjectification.” In Raymond, H. (ed.) *Motives for Language Change*, 124-140. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, Elizabeth C. and Graeme Trousdale. 2013. *Constructionalization and Constructional Changes*. Oxford: Oxford University Press.
- 對馬康博. 2016. 「英語の無生物主語構文と対応する日本語表現の認知文法的再考」 中村芳久・上原聡 (編) 『ラネカーの（間）主観性とその展開』, 231-267. 東京：開拓

社.

- Ureña Gómez-Moreno, Pedro. 2014. "The Have-It-That Construction: A Corpus-Based Analysis." *International Journal of Corpus Linguistics* 19 (4): 505-529.
- Vandelanotte, Lieven. 2009. *Speech and Thought Representation in English: A Cognitive-Functional Approach*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Verhagen, Arie. 2005. *Constructions of Intersubjectivity*. Oxford: Oxford University Press.
- Viberg, Arie. 1983. "The Verbs of Perception: A Typological Study." *Linguistics* 21: 123-62.
- Visser, Fredericus Theodorus. 1963-1973. *An Historical Syntax of the English Language*. Leiden: E. J. Brill.
- Whitt, Richard J. 2011. "(Inter)subjectivity and evidential perception verbs in English and German." *Journal of Pragmatics* 43: 347-360.
- Wierzbicka, Anna. 1988. "The semantics of English complementation in a cross-linguistic perspective." In Wierzbicka, Anna. *The Semantics of Grammar*, 23-168. Amsterdam: John Benjamins.
- Willet, T. L. 1988. "A Cross-linguistic Survey of the Grammaticalization of Evidentiality." *Studies in Language* 12, 51-97.
- Wischer, I. 2000. "Grammaticalization versus lexicalization: 'Methinks' there is some confusion." In Fischer, O., A. Rosenbach and D. Stein (eds.) *Pathways of change*, 355-70. Amsterdam: John Benjamins.
- 山梨正明. 1993. 「認知言語学—ことばと心のプロセス—」 『日本語要説』, 235-261. 東京：ひつじ書房.
- 山梨正明. 1995. 『認知文法論』 東京：ひつじ書房.
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』 東京：くろしお出版.
- 山梨正明. 2009. 『認知構文論』 東京：大修館.
- Yan, Yi and Anna Siewierska. 2011. "Referential impersonal constructions in Mandarin" In Malchukov, Andrej L. and Anna Siewierska (eds.) *Impersonal Constructions: A cross-*

linguistic perspective, 547-580. Amsterdam: John Benjamins.

コーパス

Davies, Mark. 2004-. *British National Corpus* (from Oxford University Press). Available online at <https://www.english-corpora.org/bnc/>.

Davies, Mark. 2008-. *The Corpus of Contemporary American English (COCA): 560 million words, 1990-present*. Available online at <https://www.english-corpora.org/coca/>.

Davies, Mark. 2010-. *The Corpus of Historical American English (COHA): 400 million words, 1810-2009*. Available online at <https://www.english-corpora.org/coha/>.

Davies, Mark. 2012-. *The Corpus of American Soap Operas (SOAP): 100 million words, 2001–2012*. Available online at <http://corpus.byu.edu/coha/>.

English Historical Book Collection (EEBO, ECCO, Evans). Available online at <https://www.sketchengine.eu>.

Oxford English Dictionary Second Edition on CD-ROM, Version 4.0.